
十字架背負う花天使達・1

蓮千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十字架背負う花天使達・1

【Nコード】

N4580A

【作者名】

蓮千里

【あらすじ】

身体はどこかに十字傷を持つ子供達。彼等は飛行機事故の生存者。同時に記憶喪失者……記憶を取り戻せない純歌。取り戻している仲間達。仲間が言う、都遊と純歌自身の力で記憶を取り戻し、本来の役目を果たすため、十字架を持ち、十字架を背負う

NO・1 ドタバタ自己紹介（前書き）

突然、自分の目の前に”自分”が現れたらあなたは何か言えますか？

NO・1 ドタバタ自己紹介

飛行機事故で生き残った子供達。

皆、どこかに十字架に似た傷があることから、世間は子供達に

「十字架背負う子供達」

という異名で、恐れと怒りの対象にしていました。

NO・0 あなたはだあれ？

「生きてみない？もう一度」

私は答えることが出来なかった

すべてを、疑った

「もしもし聞いてる？」

だって話しかけてくるのは。

「おい」

私

NO・1 季節館

リ
リ
リッ
リッ
リ
リ
リ
リ……
ッ！！！！

西曆2000年4月。

朝7時に、うるさくなり続ける目覚ましを乱暴に止めた者がいた。

「あゝまた見たよ」

その者はうんざりしながら天を仰いだ。

「もう、3年になるのか」

ため息交じりで外を見ると、青空が目映る。

窓を開けると静かに風が何もかもを通りすぎ、春の風が髪を優しくなでていく。外は青空が広がっている。

ここは埼玉県〇市5 - 5 緑ヶ丘12にある季節館。

私は住人のひとり、蒼霞純歌。

本名を失った私に何の関係もない誰かによってつけられた名前だけ。一応、私の名前。

3年前の2003年4月1日から、私は蒼霞純歌となった。

当時は大規模な事故として扱われたけど、関係ない人達は忘れていくことだ。

乗客は500人。生存者は私を含めた子供ばかり5人。

皆が記憶を無くし、十字架のような傷があることから世間は災いを恐れた。

ひとつだけの傷の形が十字架。記憶喪失。

世間が恐れるわけもわかる。

結果、この季節館に全員が集められ、私達だけの生活が始まった。

生き残っただけで、何も覚えていない。

一緒に飛行機に乗っていたのに、私達はのうのうと生きている。

だから、遺族などの怒りの矛先は全て私達に向けられた。

来る日も来る日も、無言電話や脅迫テープに手紙。

流石に今はないけど。あまり記憶に残しておきたい記憶じゃあない。

私達、『十字架背負う子供達』は、異常な程までに立派な館に住んでいる。

目の前の庭園は大きく、左右にひとつずつ大きな噴水。

ひとりにひとつずつある部屋。

男女別のトイレにお風呂……。正直、至りつくせりである。

ちなみに、『季節館』とよばれる所以は、『季節ごとに変わる花や木』が関係している。

手入れをしただけあり人々をいつも魅了させてくれる庭園。これが季節館とよばれる大きな理由だ。

「おい。純歌、起きてつかー？」

突然の間抜けな声で、私は現実に戻される。

「ほいほい、今行く」

着替え終了と同時に声をかけるとは監視カメラでもつけたのかと疑いたくなる。

そして、案の定。

天井にはめ込んであったりもする……………

「ミコ！？あんた何して…………」

監視カメラをとりつけた張本人、相場巫斗、通称ミコを怒鳴りつける私。

すぐさま左ストレートをくらわせようとしたけど、叶わなかった。

代わりに私は、その場にフリーズ。

勿論、声も小さくなる。

「あ、おはよん、純歌。もうココに来れたって事は、またみたんだ。

大変ね」

「あーうん」

無邪気な声で話しかけてきたのはミコの双子の妹、茶山透香。通称
トーカ。

2人の苗字が違うのは、単なる私達の名付け親の気まぐれって聞い
てる。

まあ、異常に似ているから、誰も疑いはしないだろうけど。

私は曖昧に答えて、ズタボロのミコを視界にばっちり入れた。

セミロングの髪を片方だけピンで留め、いつも笑顔な彼女がミコを
ズタボロに出きる技といえは……。

セイソウリュウ

静槍流しか考えられない。

静槍流。

文字通り「静かな槍」といわれ、音もなく相手に傷を負わせること
が出来る技。

武器が手だけとは思えない傷口になる。

トーカもミコも使い手だけど、ミコは決して異性には使わない。

それに自称温厚なトーカがミコをここまでズタボロにする理由なん

てないはずだ。多分。

「妹の部屋にもつけたんか、ミコ」

大げさにため息をついてやる。自業自得だ。可哀想なんて思いはない。

見かけは物静かな雰囲気のみこだけど、人は見かけによらぬもの。

「……まあ、兄妹喧嘩はやってもいけど」

実兄をのほほんと見ているトーカと、未だに気絶しているみこに私は声をかけておく。

「入学式、遅れないようにねー2人とも」

そう、今日から季節館の全員が中学生。つまり入学式。欠席なんてしたくない。

勢いよく飛び出し、走りかけたその時！

「バカ純！」

「リボン忘れてるよ。純歌」

突然の背後の声で派手に転んでしまった。

「忘れてた。ありがと、シュート君」

素直に受け取り、リボンを結ぶ。

朝から制服が汚れるのはミコではなかったか。

「ただでさえ鈍いのに、んなスカート丈にすつからだ。自業自得だぜ、バカ純」

ケイこと、向日佳の言う通り、私のスカート丈は、くるぶしまである。

まるで昔のスケバンのように長い。

「喧嘩売ってる？ケイ？」

「本当のこと言われると嫌だよねえ、純歌」

「」

考えるより即行動派のケイは、よく絡んでくる運動バカ。

だから喧嘩は常に格闘もの。

右の額の十字架……もとい十字の傷を隠すことなくおっぴらにしている。

本人いわく『隠すことじゃねえ』だそうだ。

そして、シュート君。本名、大出秀人。

相変わらずフォローしてるのかバカにしているのか解らない存在。

男なのに肘まである髪はいつも下のほうで一つに結んでいる。

まあ、優しさは認めるけどね……

「純歌、佳？始業式の時間は？」

笑顔でたずねてくるシュート君に殺気を覚えたのは私だけか。

「「い、行ってくるー！」」

入学式開始から20分経過。

はたして全員無事に始業式を迎えることができるのか？！

NO・1 ドタバタ自己紹介（後書き）

初めまして、Rueとかいて『ルー』と読みます作者です。
この作品は長いです。

初めて書いた小説なので、かなり荒削りかと思いますが、
最期までお付き合いが出来たらなと思います。

Rue

NO・2 十字架の傷（前書き）

仲間を知っているのに自分だけ知らない時の気持ちって、どんな気分ですか？

NO・2 十字架の傷

季節館の住人名簿

蒼霞 あおがすみ
純歌 じゅんか

向日 むかひ
佳 けい

大出 おおで
秀人 しゅうと

相場 あいば
巫斗 みこと

茶山 さやま
透香 とつか

「あの子じゃない？」

「え？何が？？」

「ほら、飛行機事故の……」

あちこちで声がする。

そして、そのターゲットになっているのは……… いう必要もないだろう。

ヒンヒン……コンコン…ヒンヒン……コンコン…

ノイズ

あちこちからで聞こえる雑音。

話が聞こえるのが何でわからないのだろうか。五月蠅いっただらあり

やしない。

ヒソヒソ話の結末はいい加減に聞きあきてんだから。

『十字架背負っ子供達のひとりじゃん？』

これに決まってる。

実際、今もそうだった。こちらをチラチラ見ながらのヒソヒソ話の結末は

『にしても、なあんで目えそらすかね……チラチラ見てくんのにさ』

噂をしている人達の方に目を合わせると、慌てて目をそらし教室から退散したんだ。

見てはいけないものでも見たように。

そして逃げてく。

一刻も早く、ターゲットがいらないところへと。

んで、また話し始めるんだ。

今度は、ヒソヒソ話ではなく、堂々と。

私は無意識に入学式を済ました後の校長とのやり取りを思い出した。
ケイと一緒によびだされたんだ。

『2人とも、覚悟して生活を送って下さい』

あ那时的校長の顔、声、目。

全てが、この教室の生徒達と同じだった。

思い出したくもないこと程、思い出してしまうのが本能というもの。

私の身体は、私自身がよくわかってる。

自力じゃ、抑えられない感情。

感情のコントロールは未だに、自分だけではできない。

このままだと、リセットが出来なくなる……それが、はつきりとわかるんだ。

といって、何もしなかったら、もっとやばい。

何とか、しないと

右腕をきつく抑えて呼吸を整える。目を閉じて、ゆっくりと。

『吸って、吐いて……吸って、吐いて』

他人に分からないように呼吸を整える私は、次の瞬間冷水を浴びせられた。

“冷たい言葉の冷水を”

「十字架を抑えるなんて怖いのかよ。教室が。十字架を背負う子供、
蒼霞純歌」

ガタンッ

この一言で、椅子から立ち上がる。

……というより椅子を後方に蹴っ飛ばしていた。

「あんだ、誰？」

声が渴く。かすれてく。それでも、私は目の前の男子生徒を凝視する。

私の反応に生徒達は驚き、ざわめいたが気にはならない。それどころじゃ、ない。

「何で、ここだと思うの。何で、抑えてただけで、ここなの。あんだ誰……？」

早口でそういった。

この状態では話すことさえ、私にはご法度なんだから。

「蒼霞純歌は『リセット不能になると、右腕を掴む』違うか？」

確かめるように相手は言った。

「そして、それはお前に『恐怖や過去のことには錯覚を起こすから』だろ？」

「あんだ、誰」

それしか言えなかった。バカみたいにそれしか頭に浮かばなかった。

「俺は都遊。お前等のこと、全部知ってるぜ？お前達が『本当は何者かも』。まあ、今は危険状態みてえだし、帰るわ」

そついうと、都遊は教室を出て行った。手をこちらに振りながら、無邪気に。

「どついう、こと……」

眩き、頭の中が真っ白になるとこまでが私の覚えてる記憶だった。

どれくらい眠ってたのだろう。

気がついたときは自室のベットの上。

起きたのは、声がしたからだ。

聞き覚えのありすぎる声が怒鳴り散らしていたから、目が覚めた。

「なんで、すぐに飛んでなかったのかなあ……佳」

「だーかーらー。俺は4組で、こいつは1組なんだよ！気づけっ方が無理だろーが！！透香！！」

「喧嘩、買ってあげよーかあ？佳」

「売ってねえよ！」

爽やかに問うトーカにケイは怒鳴っていた。

トーカは静かに怒るし、顔に出ないタイプだから余計に恐ろしい。

笑顔を崩したところは見たことがない。

「相変わらず、それ怖いって。透香」

静かに透香をペシッと叩いて、話に入ってきた。

まだ、誰も私の意識が回復したことには気づいていない。

「透香の気持ちはわかるけど、仕方ないよ。それに、すぎてしまった事だ」

マジ切れ寸前の透香に話せ、静めることが出来るのは、やはり双子と言えど兄。

「でも、何の為に純歌の見張りを……見張りをつけた意味、ない」

ミコはトーカとケイを見ながら、

「五月蠅くしてたから、純歌が意識戻ったこと、気付かなかつたろ2人とも」

この言葉に、私は飛び起きた。

「そして、純歌に思い出してもらわなければなくなった。俺達がど

んな存在か」

最後の台詞は私を真っ直ぐにみて、ミコはいった。

私の脳裏に都遊の言葉が蘇る

お前たちが、『本当は何者かも』

「どゆこと？……見張り？何のために？『なんで私だけ知らないの！？』」

聞きたかったことは最後の台詞だけ。

パジャマ姿のままだったせいか、わずかに震えがする。

コワイ

ワタシハ ナニモノナノ？

ナンデ ワタシダケ シラナイノ？

底の见えない恐怖が襲う。 ミコモ トーカもケイもが私を見ている。

視線が痛い。

「なんで、なんであいつと同じようなこというの」

都の姿が、ミコと重なる。

私の声は、かすれてしまってる。 完全に、感情のコントロールが出来なくなりそうだ。

「 会ったんだね、ミヤコ・ユウに」

ミコが静かに話しかけてくる。

「わかるの？ミコ」

驚きで目を見開きながら、尋ねる。かすれ、震えた声で。

「知らないのは純歌だけだよ。俺達は会ってるから。だから」

「だから、俺達は『記憶喪失者じゃない』都遊は記憶を取り戻す鍵となる男。」

その男を受け入れていない純歌は、いつまでも記憶喪失者だ」

いつの間に入ってきたのか。

ミコの台詞をついだのはシュート君だった。

NO・2 十字架の傷（後書き）

Rueです。すでに意味分からなくなっている方がいるかと思いますが（苦笑）

この小説は、人数多いわ、名前の種類が多いわで少しついてけないところも。あると思います。

出来るだけフォローしますので、また読んで下さると嬉しいです。

Rue

NO・3 不安定な心は謎と共に……（前書き）

知っている仲間に囲まれて
自分は全く知らなくて。

もどかしさと悔しさは、時に心の傷をえぐってしまふ。

突き放されるのが、最善だと分かっている……

NO・3 不安定な心は謎と共に……

季節館の住人名簿

蒼霞 あおがすみ
純歌 じゅんか

向日 むかひ
佳 けい

大出 おおで
秀人 しゅうと

相場 あいば
巫斗 みこと

茶山 さやま
透香 とつか

「
思い出したくない？てか……てかどうやって入ってきた
の？ドアはドアはっ……」

私は続きが言えなかった。

それは、底知れない恐怖から来る言葉だと思うから……

「確かに、ドアを俺は開けてないな。てゆうか、俺達にとって鍵なんて必要じゃない。

例え、それが特別な鍵でもね」

私を見て話すシュート君は、私が知っているシュート君じゃなかった。

こんな、意地悪なシュート君なんて、認めたくない。

私が知っている、大出秀人君だなんて……！！

寒気がする。

これは、明らかに、寒いから来るものではない……

返事が怖かったからだ。シュート君の言葉が、怖かったから……だ！

返事の、言葉が、私は、予想、できていたんだ

シュート君が言う『特別な鍵』というのは、この館の『指紋』とい

う鍵のこと。

言葉通り、私達5人の指紋のみが登録されている。

つまり、私達しか開くことが出来ない。

そして、この鍵は全ての部屋にも設置されてる。

ドアの音は静かだとは思うけど、この状況で聞こえないはずがない。

ありえないんだ、そんなこと！

「……説明したいのは、やまやまなんだけど」

「今は、無理だな。トーカとケイが口々にいう。2人ともどこかバツが悪そうな顔つきで。

「！？なんで？私が、思い出してないから？」

いつのまにか、私は泣いていた。

記憶喪失者だからといって、感情がないわけではない。

ここが、教室のようで……泣けてくる。

恐怖からくる、涙が溢れ出る。

季節館で泣いた事なんて、一度もありはしないのに。

「違うだろ？純歌」

シュート君が口を開く。

「言ったはずだ。『受け入れていない』とね。つまり、受け入れられないことなんだ。難しいことじゃないはずだ」

シュート君の言葉は冷たい。

人が、そんなに早く対応できるはずなのに。

特に私が、出来ないと知っていながらでの発言……ひどすぎる。

ワタシノ

メノマエニイル

シュートクンハ

ワタシノシラナイ、ヒト。

ゼツタイニ

オオデ シュウトトハ、ミトメナイ。

ミトメタクナイ!!

ミトメル、ハズガナイ!!

そう。私は認めない。

錯覚だとも思わない……。

話しかけてくるのが、大出秀人だということを。

「純」

「……でてつて！でてつてよ！」

トーカの差し伸べた手を私は払いのけ、近くにある物という物を投げていく。

不思議と、全て投げた物がトーカ達に命中する。

まるで、何かに吸い寄せられるように。

でも、私にはそんなことどうでもよかった。

「避ける気がないなら、絶対によけるな？！ただし、恨まないでよっ？！」

机の引き出しも開け、私は様々な物を投げつける。

それでも、皆、石の様に動かない。

「 苛々、する、なあっ！」

投げるスピードを速める私。

手当たり次第、投げつけていく。

どれも、血を出したりしないような物ばかりを投げていた。

色鉛筆に消しゴムにマジック、セロハンテープ……そして、ハサミ

「……………あ……………」

私は、小さく声を出す。視界に入っている仲間が、額から血を流していたから。

そして、それは明らかに私が投げたハサミが原因だった……。

「おい、大丈夫か?! 透香」

ミコが、トーカを寄せ、無理やり額を見ていた。

「……………あ、あ、あ……………」

これ以上、声は出ない。

「大丈夫だよ？巫斗。専門分野だし」

笑顔で返すトーカの言葉に、ミコ達がいつきに引いた。

「
確かにな」

「だね」

「………… コイツの専門分野、だもんな」

ミコ、シュート君、ケイが引きつり笑いをしながら同意する。

だけど、私は、わたし、は………… どうしてもいいたい事がある。

あるのに………… 声が、出せない。

「
大丈夫だって。だから、そんな顔しないでよ純歌」

トーカが、優しく手を握ってくれる。

だいたい同じ背の高さの私達。

だから、傷の深さがわかってしまう。

深くはないが、痛々しい傷だ。一瞬でも痛かったに違いない。

傷とは、そういうものだ。

「今は、話せる時じゃないの。でも、覚えていて。私達は味方だっただけ」

と、トーカは言う。真っ直ぐに私を見て。

「こればかりは、助けてあげることが出来ないけど、信じてよ」

トーカの後をミコが継ぐ。

「自分がどういう存在かは、自分自身で思い出さなきゃ意味はない。俺達も、歩んだんだ」

とシュート君がすまなそうに言葉をかける。

私がついている、大出秀人として声をかけてくれた。

……くやしい、くやしい！

……情けない情けない！自分自身が。

話せない、話すことは許されない。

私は、皆を信じようとしなかったから。

「……今は何ひとつ、教えてもらえないの？」

やっとの思いでそう、聞いた。精一杯の、かすれた声で。

懇願するような声で、私は問う。

誰に向かってでもなく……

「もう一度、いうよ？ 純歌。都遊……彼を受け入れなきゃ、始まらない。何も、ね」

シュート君はゆっくりと真剣に話す。

「それからな、純」

ケイは口を開く。

「命が狙われる。視野を広くして、気をつける」

などと話してくる。

「は？」

間抜け面で、言葉をはく私がそこにいた。

「まあ、ともかく今日はおやすみ。純歌」

シュート君は私の額に人差し指を突きつけ、同時に私は意識を失った。

誰かに、呼ばれた気がした。

その声は、確かに私を呼んでいた。

『……………てください。』

誰かの声がする。とても小さな声、だけど。

『思い出して……………ください』

この声　　聞き覚えがある……………けど、わからない

だから、目をゆっくりと開けたの。

閉ざされた視界を、無理やりこじ開けたの。

そしたら、目の前にぼんやりと幼い少女が映った。

少女は私へ笑いかけた。

ぼんやりとしているから、はっきりとは分からなかったけど。

少なくとも、怒ってはなかった。

そして、もうひとつ。

私は、自分がどこにいるかわかった。

水の中

私は水の中にいた。寝転んで、死海みたいに浮いていたんだ。

『…………え〜と。あなた名前は？これ、夢の中だよ…………ね？』

バカみたいに、聞いていた。

『私はアオガスミ ジュンカだよ』

バカみたいに名乗っていた。

少女はぼんやりとしか見えない。はつきりとは映らない。

でも、口は動いていた。

そう見えた。

なのに、聞こえない…………何も。

『さっきは聞こえていたよ？あなたが私を呼んでいたんでしょ？』

少女は明らかに困っていた。

口が動いているのに、私には何も聞こえない。

『ねえ
』

私は再度話しかけたそのとき。

少女は花を私につきだし

反射的に私は花を掴んで

私は本当に目を覚ました

NO・3 不安定な心は謎と共に……（後書き）

Rueです。毎回微妙なところで終わらせてすみません；
それでも読んでくださる方々には、深くお礼を言いたいです。
では、最後までお付き合いが出来ることを祈りつつ……

Rue

NO・4 カスミソウは不安を運ぶ（前書き）

自分のせいで周りが傷つくと知ったら、あなたはどうしますか？
周りがあなたの心を傷つけていたとしたら、あなたはどんな行動をとりますか？

NO・4 カスミソウは不安を運ぶ

季節館の住人名簿

蒼霞 あおがすみ
純歌 じゅんか

向日 むかひ
佳 けい

大出 おおで
秀人 しゅうと

相場 あいば
巫斗 みこと

茶山 さやま
透香 とつか

都 みやこ
遊 ゆう

リリリ……ピッ。

珍しく静かに目覚ましを切り、すっきりした気分で勢いよくベットから降りる。

と、一緒に何かが足に当たった感触を得た。

「……カスミソウだ」

そう、足に当たった感触は、まさに真っ白い小さなカスミソウ、1本。

私の、大好きな花。しばらくすると、ノックをしてトーカが入ってきた。

「純歌、起きて……うわっ熱でもあるの？純歌が自主的に起きるなんて」

トーカの驚きは当然の反応。

普段の私は目覚ましをかけても、とめるだけでまた寝てしまう。

そして、時間ギリギリにトーカが起こしてくれる、というのがいつものパターン。

自主的に起きる私は、たいそう珍しい動物だったに違いない。

トーカの目尻が笑っているのだから。

「
　　いーくーらー珍しいからって笑うことはないんじゃないの？」

こめかみに四つ角マークを出しながら、笑顔で言ってる。

「だ、だって、笑うな、いうほうが……無理……あはは！」

トーカの笑い顔は、感に障る。

『わざとだ、絶対にわざとだ！』

兄が兄なら、妹も妹、ということか。

今のトーカは、完全にミコと変わらない行動をとっている。

「起きてちゃ駄目かなあ……？」

カスミソウをヒラヒラ振りながらトーカに満面の笑顔で聞いてやる。

『秘技・嫌味笑い返し』

心の中でも呟きながら笑う私は、トーカの反応に違和感を覚えた。

トーカは察しのいい方だから、更なる嫌味を返すはずなんだけど……
…返って来ない。

「と、トーカ？どしたの？具合、悪いの？ねえ、トーカ！」

目の前にいるトーカの顔は真っ青で、何かに怯えるように目を見開いている。

その視線の先にあるものは、ただひとつ。

カスミソウ……

「……その花、どこから、持って……きた……？」

尋ねる声も顔もいつものトーカではなかった。

「へ？」

私は戸惑う。そんなの、答えはひとつだ。

「花なんて、季節館のそこら中に」

口にして、気がついた。

「……ない……ないね、ここには、1本も」

自分自身で口にする。

季節館は、様々な花が咲いているけれど、カスミソウは1本も咲いていないんだ。

『なんで、なんで、なんで?!』

自問自答しても答えは出ない。

記憶をたどる。

必死に、なんとかして少ない引き出しを開けていく。

だけど、どんなにたどつても、行き着く場所はただひとつ。

教室で倒れた、というところもだったんだ。

「おい」

「知ってたら、説明してます」

登校中にケイが30回目の質問を仕掛けると同時に30回目の返答をしてやる。

『てか、何で私、数えてるんだろ……』

妙なことに疑問を抱いている最中に、五月蠅い声が鼓膜に響く。

「てめっ！俺はまだっ」

「はいはいはい。しつこい男は、もてないよ？」

ケイが右拳を振り上げると同時に、鼓膜を押さえ逃げる私。

結局、謎のカスミソウは私が持ち歩くということになった。

『どーせ、見つけた奴だから、つてのが理由だよねー』

小さくため息をつきながら、校舎に入る。

小さく、風が吹いた気がした……

ガラガラ……

8：30。

私が教室のドアを開けると、五月蠅かった教室が静まりかえる。

今までやっていたことを、中断するクラスメート。

紙のボールが落ちている。

回し読みしていた漫画を持つ手が宙に浮く。

何を話していたのか、女子数人の集団が口をつむぐ。

皆、私が自分の席に着くまで一言も喋ることは決して無い。

ましてや、動くこともしない。

五月蠅かった教室がいつそうに静寂さを増すのが肌で感じられる。

視線の中を私は歩き、席に着く。

『……全く、いい性格してる連中だよ』

心の中で、ため息をつきながら席に座る。

と、かすかに右腕がうずいた。

いつものようなうずき方じゃない。十字架が私に警告をしている気がする。

「……こんなの初めてだ」

驚きながら呟くと、私は、誰かに呼ばれた。

『……てください……思い出して下さい』

クラスメートではない。

それは、はっきりとわかる。でも、やけに近くから聞こえるのは確かだ。

『……てください……思い出して下さい』

『私の鞆の中?!』

小さな声だったけど、確かに聞こえた。

私を呼びかける声が、私の鞆の中から。急いで鞆の中をしてみる。
が、何も変わったところはない。

カスミソウを除けば、の話だけれど。

「花が話すわけな

」

みなまでいえず、息がつまる。

朝見たとき真っ白なカスミソウが今は、ほんのりと青みがかかって
いたのだ。

私は無我夢中で花を掴み取った。

と同時に感じたものは、人の手。

「?!」

驚いて放そうとしたけど、手は放せない。

目も動かせず、動こうとしても動けない

「へえ。思ったより早かったじゃん？」

不意に声がして、私はカスミソウから解放された。

「助け……助けたの？知っているの？この花も、この花がなんなのかも」

私は冷静かな声で聞いた。クラスメート達は、五月蠅いほどに喋っている。

でもまるで、私達のことが見えていないように見えるのは思い違いだろうか。

「全部、お前の思った通りさ。蒼霞純歌」

真っ直ぐに私を見る目は嘘をいつている目ではない。

そして、全部とは私の思った通り、見えないのだ。

クラスメート達から、私達の存在は、消えている

『でも、何故?!』

「見つけたなら、早く俺を受け入れる蒼霞純歌」

急に真顔で話しかける都。

「！！」

脳裏にふと昨日のやりとりが頭の中を駆け巡る。

そして、駆け巡ったのはそれだけではなかった。

『思い出して下さい』

さっき聞こえた声は、夢の少女の声。

私にカスミソウを差し出した少女の声だ……！

何で忘れていたのだろう。

今は、こんなにも鮮明に思い出せるのに……！そんなこと得を考えてた、その時。

「戻るぞ！クラスに！……いや戻らなきゃいけない！！」

都のデジタル時計が8：55を知らせる。

今の都は、先ほどまでの都とは思えないほど狼狽していた。

重苦しい空気が季節館のリビングに漂う。リビングには、当然のように腰をおろす見慣れた住人達がいた。

細長い円形の机を囲む、向日佳、大出秀人、相場巫斗、茶山透香の4人。

カモミールのハーブティーを前にして、せわしく時間を気にしている。

「もうすぐ時間だな」

と何気に気遣うように巫斗。

「……ああ。巫斗」

珍しくどこことなく元気のない佳。

「時間だねー」

この場の雰囲気合わない、明るい声を出したのは、透香。

巫斗も佳も思わず、つつぷしそうになるのをこらえていた。

「この場の空気を」

「よんでるよ。でも、暗くなっただってどうにもできないでしょ?」

無邪気に答える透香は笑顔を絶やすこと無く兄に返すと、

おかわりを自分のカップのみに注ぐ。泣きまねをしている兄を無視して。

「静かに待つことはできないのか？」

この一言で、佳、巫斗は勿論、透香まで凍りついてしまった。

3人同時に、声の主、大出秀人を凝視する。

少し余談を語るが、館の玄関に一番近いのが秀人。入ればいやおうなく彼の後姿が見える位置。

そんな秀人の右側に佳、巫斗。そして巫斗の目の前には透香が位置している。

透香の場所が一番キッチンに近いせいか、彼女が食事をつくるのがごく当たり前のようになっていた。

だから、目の前におかれているジャーマンカモミールのハーブティーを作ったのは透香。

彼女は薬を作るのが本業ともいえる。

だから、どんな花や草がどんな効力を持ち、お茶にあっているかなんて、容易いこと。

今現在、全員気が立っている、といっても過言ではない。

だから、鎮静作用とリラックス効果があるジャーマンカモミールのハーブティーを皆に作った。

リラックス効果なら、ラベンダーにもあるが、『鎮静作用』はなく『安眠作用』がある為に外したらしい。

「てか、こんなときに落ち着いてなんかいられるかよ」

カップを指で軽く弾きながら佳がぶつくさ言つと

「その中に、アルカネットをいれてあげようか？」

につこりした透香は、どこからともなく可愛らしい青紫色の花を取り出す。

「毒性がある花、取り出すな！」

80%の声で佳は叫ぶと隣にいる巫斗の方へと視線を動かす。

『……どんな教育しやがった……』と目は訴えている。

「透香。俺達でも流石にその花に毒性があるのは知ってるから」

「知らないのだったら良かった？」

間髪いれずに、疲れきった巫斗の言葉に返事を返す透香。

本当にどんな教育をしたんだろう、と考えてしまっ作者がいる。

「ハンス、クリス、セラフィン」

秀人の一言は、作者までもが凍り付いてしまっ。

いい加減、話を戻した方がよさそうだ。

現在時刻は朝 8：30。

純歌以外の住人全員が何故こんな時間にいるかがわからない。

「俺と蒼霞純歌は30分に学校に着いた。今頃は席につくころだな」

「一緒に登校したはずの奴が消えたなんて、蒼霞純歌には考えつかないだろね」

巫斗がおかしな笑顔で意見を言う。

「何分に襲撃だっけ？秀ちゃん」

笑顔を取り戻した透香は確認のように尋ねる。

「9：00ジャストだよ」

答える秀人は現在の時刻を確認するように言葉を返す。

「8：40か」

と、独り言のように呟きながら立ち上がる。

「ちょっと席、開けるよ。場所は」

「さっさといきやがれ」

「わかってるから」

「いつてらっしゃい」

佳に続き巫斗と透香も秀人の行き場所も行くこともわかっていたようだ。

「流石だね」

呆氣にとられたような顔をした秀人。

だが、それもすぐに苦笑へと変わった。

「あそこで信じると思ったぜ」

「1人で信じる、か……秀人らしいよな」

季節館を静寂がつつみこむ。

今ならどんな音でも聞こえる気がするほどに。

カラン……

ハーブティーが入ったカップが割れる音が見事にリビングに響く。

「おわ！びつくりしたあ」

「……………驚かさないでくれよ透香」

心底驚く佳と脱力気味に発言する巫斗。

そして、それを静かに聞く透香。

テーブルの上には真つ二つに割れたカップは、巫斗と佳のカップだった。

「静槍流の一輪草……久しぶりに使ったな」

2人の事を完全に無視し、なおかつ、こぼれたお茶を気につけない透香。

彼女は、どこか怒っているように残りの2人を見据えた。

「1人じゃないでしょう？秀ちゃんは1人で信じるわけじゃないよ」

言葉の端々に怒りの感情がでている。

が、どこか悲しい感情も入り混じっているような声。

そんな声で見据え、見える人間は実兄の巫斗と佳のただ2人。

「……………秀ちゃんが、ジル・パーシカリアが行った場所には、駿季さんがいる、よ」

このリビングにはいないように話す透香。

しかし、実際に彼、大出秀人は影も形もみられなかった

現在時刻 8：45

コツコツコツ……

暗く長い廊下を歩いている者がいた。

顔は分からない。ただ、足跡の音しか聞こえてこない。

コツコツコツコツコツ……コツコツコツ

足音が聞こえなくなった。着いた場所は、広いが全体的に暗い部屋。でも一箇所だけ紅い光が見えるところがあった。

そこにはあるのは深紅の柩。しかし、近づいてみると蓋がない。

「はろ。ディック、久しぶり」

聞き覚えがある声。それは、紛れもなく秀人の声だった。

「……8：50。受け入れられるか？本当にあんたの妹は。ソニカ・アイリスにズバズバと言いつけて驚いてあたふたしてると思うけど？」

秀人は話しながら笑っていた。話しかけるように。深紅の柩の中には、青年が横たわっていた。

まるで、眠ってるような顔つきだ。

「乗り越え、受け入れることができる力はあるだろうな。けど、それはアイツ自身の心の問題……難しいと思わないか……？」

瞳を閉じる秀人は、わずかながらに震えていた……

現在時刻 8 : 55

「戻らなきゃいけない！？どういうことなの？都」

まるで血の気の無い顔つきの都に驚く純歌。

「被害者って、どういうこと？なんでそんなことが？」

都の肩をゆすり、言葉をぶつけても都は話さず、目を閉じていた。

「……んで、なんで目を閉じてんのさ！！現実から目をそらさないで！」

パシッ…

叫びながら純歌の右拳が、都の顔面にとんでいく。

が、懇親の一発は、いとも容易く都に封じられてしまった。

「今のお前に、その台詞を言う資格はねえよ」

静かに目を開け、純歌を真っ直ぐにとらえながら、都は口を開いた。

「なら、お前はなんで記憶喪失者なんだ？それと同じだろ。」

『受け入れることを拒否してる』お前も、目えをそらしてんだよ！』

「

」

穴をあけた風船のように純歌は一気に力がぬけ、くずれ落ちる純歌。

知りたかったら、受け入れる全てを。じゃないと何も始まらない』

秀人の声が蘇りこだまする。

『……………らなかった……気付かな、かつ……………』

純歌の中で、答えが出た。出すことが、できた。

だから、言う。

たった一言、叫ぶことが出来た。

「……………さっさと……戻るよっ！！」

右足を振り上げ、都の顎にすん止めさせる。

「私を、早く行かせる！」

純歌は都に命令口調で急かせる。

その表情を都は複雑な表情で受け止め、見つめる。

「わかったの！自分が私が、しなくちゃいけないことが……！」

迷いの無い声で純歌は叫ぶ。

「　　クラスが危ないのは、私を殺すためなんだから!!」

都が目を見開き、震える。だが、お構いなしに純歌は続けた。

「シュート君の言葉と同時にケイの言葉を思い出した。ただそれだけのこと」

純歌は視線を都から放さず都に話す。

『命が狙われる。視野を広くして気をつけろ』

ケイは前もって教えてくれたのだ。

「私のせいで、私だけのせいで皆を巻き込みたくない!自分の命がどうなるうとも!!」

この叫びを最期に、都と純歌はこの場から消えた。

現在時刻 9：00 ジャスト

同時刻。

「 試練が始まるぜ? 」

静かに秀人は答えるはずの無い相手にそう告げた。

どうしてなのか、わからないが

NO・4 カスミソウは不安を運ぶ（後書き）

Rueです。

なんだか次回はアクション（？）もはいるような場面で終わりました。

次回にはこれまでのあらすじを入れようと思います。

これまでの流れでわからないこと、腑に落ちないことなどのコメントがあれば気軽にどうぞ。

では、第五部でお会いできるのを祈りつつ……

Rue

NO・5 揺るがぬ決心・予想外の伝言（前書き）

あらずじ

飛行機事故で生き残った子供達。

彼等には共通するものが2つある。

ひとつは、身体はどこかにある十字傷。

もうひとつは記憶喪失。

これが原因で彼等は世間から冷たい目でみられることになる。

中学に上がった彼等。

それが合図かのように、次々と真実が解き明かされる。

同じ記憶喪失者だと思っていた秀人達が記憶を取り戻していたこと。

『本来の姿を知っている』と言われた都への恐怖感。

純歌は恐怖の絶頂に位置していた。

そんな時、自分のせいでクラスメートの命が危ないと知った純歌の

とった行動は

NO・5 揺るがぬ決心・予想外の伝言

季節館の住人名簿

蒼霞 純歌

日向佳

大出秀人

相場巫斗

茶山透香

都遊

「！？う”がつ……」あまりの痛さに顔をゆがませる純歌。

クラスは、男女関係なく互いを傷つけあっていた。

教室に帰るとそこは純歌が知っている教室ではなかった。

彼女が知っている、クラスメートではなかった。

そのすさまじい現実に純歌は呆然とたち、みぞおちを蹴飛ばされる。
「痛……いしい」その場に崩れ、苦しそうに吐く言葉。恨みがまし

く睨むが意味は無かった。

「またもや、みぞおちに拳と蹴りが入ったのだ。たて続けに、容赦ない力で。」

「！！」動けない純歌に、容赦なく降る、椅子の雨。

3人の男子が両手に椅子を手にし、自分に向かって放り投げたのだ。「！？」

悔しいが、流石にダメージが大きく、純歌は動けない。

「ちつく……しよっ」目をつぶり、腕で頭をカバ―する。

クラスメートの変貌振りの元凶は、自分自身にあることに純歌は気付いていた。

そして、大人しく『自分が殺されれば』彼等は正気を取り戻し、クラスメート達は『元に戻る』。

クラスを、クラスメート達を元に戻したいのなら、『自分は死んでもいい』と彼女は都遊に言っていた。

だが、彼はそれに『待った』をかけた。ここに、戻ってくる途中でそれを、純歌は思い出す

『さっきの……さっきの台詞だけだな』浮かない顔で、都は純歌の顔を見ながら話す。

クラスに戻る為、異次元をこえている最中に。

『さっき……？』『ああ。【私のせいで、私だけのせいで皆を巻き込みたくない！自分の命がどうなるうとも！！】ってくさい台詞』

『言つとくけど本気だからそれ』『わーってるよ。バー力。ただ、これだけは言わせろ』

都は、純歌の頭を叩くと、大きく深呼吸する。

『何をのん気に……』と思った瞬間、彼女を引き寄せ、至近距離で続けた。『絶対に、死ぬな。意地で生きやがれ。無様だろうがなんだろうが、んなもん、ぜってー気にすんな。』

てめーは絶対に死ぬんじゃないやねえ。死んだら、ぜってー後悔すんぜ？お前は特にな』

不思議な顔で、都は純歌に吐いていた。

一体何故、彼がそんなことを言うのか分からなかったが、死んで後悔するなら、無様に生きよう、と心に決めた純歌。

『肝に銘じとくよ、都』 そう、約束したばかりだ。だが。

これが、安易でないことを純歌が肌で感じるようになったのは、クラスに戻ってからだといえるだろう。

この現状が、答えといえる。

現に彼女は今、椅子を回避することができないのだから。

『ちょ……まっ……!』

なんとか力を振り絞り、頭をカバーするため腕を動かす。直撃したら、『痛い』じゃすまないのは目に見えている。

バキメキバキッ……

派手な音が耳に届く。

でも、純歌は何の痛みも感じない。

『……降ってこない……?』 腕を動かすと同時に、無意識に目を閉じていた純歌。

何十秒後かに、恐る恐る目を開け、腕を下す純歌に聞こえてきた第一声は。

& nbsp; & nbsp; & nbsp; & nbsp;

「ばーか。いつまでそんな格好してるつもりだ?」

都の声だった。

いつもの、人をバカにした言い方は、今、純歌を安心させた。

「てか、都……それ……」 よく見ると都の目の前には椅子の残骸。

たったひとりで、無数の椅子をぶっ壊したらしい。

色々と聞きたい事があつたが、純歌はあえて言葉を呑み礼を言う。

「あ、ありがと」

「礼言つてる暇あつたら、てめーのやるべきことしやがれ、蒼霞純歌」

都は制服のブレザーの上着を脱ぎ捨てながら純歌に言い放つ。

「……そういう態度は酷いと思うんだけど？」みぞおちの痛さはこのやり取りで吹き飛ぶ純歌。

立ち上がると、純歌は都とクラスメートを交互に見て小さな声で頼む。

「都、悪いけど手伝ってくれる？流石に無理だし」

「何をだよ」

都の問いに対し、純歌はクラスメートの方を向きながら

「私ひとりじゃ、誰かが被害を受けてしまふ。解ってるでしょ」

クラスメート達は、互いを傷つけることをやめ、ターゲットを都と純歌に絞ったらしく、

2人を囲むようにして円を作り始める。

「手伝えねえな」都は大きな声ではつきりと言った。

「俺は手伝ねえ。俺は、自分自身を守り抜くだけだ」

純歌は目を見開く。

「でも、連中には手はださない。お前も、自分自身だけを守りぬけ！」

これが、2対30のゴングだった。

秀人は計画を実行することを決めた。

「準備してもらわないとな。」

秀人は紫色のビー玉をポケットから取り出し、フツと息を吹きかけ

る。

すると数秒後にはビー玉は犬でもなく猫でもない、不思議な動物に変化した。

「頼んだぞ？カリン」

秀人が告げると、その動物の姿は消えていた。

「『大出秀人』としてではなく、『ジル・パーシカリア』としてあんたに言うよ。ディック・クローバー」。

” あんたは、そのまま。未来永劫、目覚めない” とね」
見下すように彼は言う。

だが、その目は悲しみを帯びているように見えた。

薄暗いので、断言は出来ないが。

両拳を強く握っているのは、明白だった。

四方八方から物が飛んできく。蹴りや拳も休むことはない。

2人は全身ボロボロだった。教室は狂気に満ち、そこら中に赤い血が飛び散っている。

それでも、2人への攻撃はエスカレートしていった。

笑いながら、まるで生きがいのように。

殴られ、蹴られ…… 2人の精神力も限界に近づいていた。1 - 1組はもう教室ではなく、戦場だ。 「おい、やられても攻撃は」

「……絶対反…… 撃しない……」 助けないといいながらも、都は危険を冒して話しかけてくれた。

純歌もそれに答える。

『連中には手出しはしない』

純歌はこの言葉を信じ、クラスメートから身を守ると同時に守っていた。

そして、考えていた。『どうすることが最善策なのか』と。

静かなリビングは、カリンの登場により一変した。

「おわつ。カリン？」

飛び上がる佳。

「久しぶり、カリン」

撫でようとする巫斗。

が、カリンは真っ直ぐに透香の元に飛んでいく。

「カリちゃん！秀ちゃんからだよね？」

カリンは目をつぶり、透香にすりよる。

透香は、しっかりと抱き寄せ目をつぶる。

カリンという名前だが、れっきとした　なので、　の透香にすりつくのは当然だろう。秀人のペットが、同性愛をしつけられているはずがないのだから。

数秒後、カリンは音もなく消え、再びリビングは3人になった。

「秀人の奴、なんだって？透香」

佳が透香に話しかける。

「？透香？？」

妹の様子がおかしいと感じた巫斗は肩に手を置き、静かに尋ねた。
が、その手をはらう透香。

「！？どうしたんだよ」

佳も透香の様子がおかしいことに気がつく。

「準備して巫斗、佳。追い込むよ？蒼霞純歌を……いえ、ティアラ・ジプソフィラを」目を、どこことなく泳いがせながらも透香は言う。
はつきりと。

「追い詰める??」

「限りなく限界が近いんだぞ?!それに」

「それに、死ぬ可能性もありうるね」

のほほんという態度の透香に2人は頭に血が上る。

「お前、蒼霞純歌を、……ティアラを本当に殺すつもりか?!」

佳は思わず、透香のむなぐらをつかむ。

その手を掴みとりながら

「だとしたら、なに？」

透香は胸倉を掴まれたまま、自分の右肩に十字をきるように指を動かす。

「今、クラスメートを操ってるの秀ちゃんだよ」

この言葉に巫斗も佳も絶句する。

目の前にいるのは透香であって、透香でない。

よく似ているが、違う。少女は手の中には緑色の十字架を持っていた。

「さてと。ジルに協力しようかな」

少女は巫斗と秀人をふりかえり

「必要なことだよ、きつと」

少女は言った。十字架を握りしめながら。

「ハンス、クリス。いなくなるのは『蒼霞純歌』なんだからさ」

落ち着いた声で少女はそういった。

「蒼霞純歌だつて覚悟してるよ。私達みたいに」

「そだな、セラ」

「確かにそうかもね。セラフィン」

少女はセラフィンというらしい。

やはり巫斗と佳に似た2人組みがセラフィンに問う。

「さあ、始めるよ？兄さん&クリス」

1-1に異変が起きた。

といつても、クラスが殺気立ってること自体が、異変かもしれないのだが。

突然地面が裂け、足場をなくした都と純歌。

そんな2人に真正面から強風が襲いかかる。よけようがなくもろに直撃してくれる強風。

2人の視界は閉ざされたも同然だった。

強風のせいで、一緒に土が舞い目に入る。前に進むことも出来やしない。

「うわっ」

「今度はなに!？」

疲れも忘れて、2人は口々に騒ぎ出す。

裂け目から、何かが2人の行動をとらえる。

「木の根!？」「しかも、椿だな。ご丁寧に花つきだ」

都の指摘で、一瞬だけだが確かに見えた。赤い椿が。

「……厄介。椿って生命力強いから……」「逃れることは、期待できそうに、ねえな……」手足は椿の根でしばらく身動きとれない2人は、わざと雑談し、身体を休ませる。

というか、喋ること自体が疲れると思うのだが。

「げ」

「マジ……?」同時に吐いた、視線の先に見えるものはクラスメイト達だった。

「連中は対象外なわけか」

根は次第に強く締めてくる。

『どうすれば、この事態を回避できる!？』

考えることを止めない純歌。

「くっ!」

都が顔をゆがませる。

『私は何が出来る?私のすべきことは??』

強風は更に強まり、クラスメートの攻撃力も強まっている。

それを、全く避けることの出来ない状態に追い込まれる純歌と都。

『どうして、こんなことに!？』

30人とも気絶させればいいと考える人もいるだろうが、それでは駄目なのだ。

クラスメートを戻せる方法は、ただひとつだから。

『でも、したら私は』一瞬迷った純歌だが、頭を小さく振ると両拳を握り締め口を開いた。

「あのさあ」

とたんに右ストレートが、またしてもみぞおちに入る。

「おい、蒼霞純……ウガッ!!」純歌の声に反応したため隙をつくってしまった都。

まともに頭部になにか硬い物をぶつけられる。

1・1の狂気は強まるばかりで、正常に戻る気配はない。

「これ、あやつってるんだよね? んで、元凶は私……」「だとしたら……どうなんだよ」頭から血をだらだら流しながら尋ねる都。

彼が無理やり横を見た時、笑顔が見えた。

「皆の目を覚ます方法、思いついたよ。カケだけどね」

笑いながら純歌が答える。

「カケ?」

もう、ボロボロの姿になった都は純歌の言葉を繰り返す。

「うん、カケ」

息があらくなりながら答える純歌。やはり言葉を繰り返す。

同時に純歌と都の体を闇が包み込みはじめた。

「どうやら、ジルが本気モードになったみたいだな」

佳に似た少年、クリスがニヤリと笑う。

「クリスが一番、手を抜いてるんじゃないのか?」

発言者は巫斗に似た少年、ハンス。

「それ、言えてるね。本気モードのクリスにしちゃあ」

「手加減しすぎ」

ハンスのあとをつぐセラフィン。最後はきれいにはもる。

「 バカ双子」 呟くクリス。

今、リビングにいるのは、透香に似た少女セラフィン、巫斗に似たハンス。

そして、佳に似たクリスの3人。

透香達の姿はどこにも見えない。

「まあ、地割れを起こしてくれたことはいいいけれど」とセラフィン。

「それだけだよ。クリス」
後をつぐハンス。

「セラ、ハンス。その言い方ムカつくからやめろ」

青筋立てながら、右の額の十字傷に手を当てるクリス。

「第一、俺がティアラ相手に本気出せるわけねーだろが」

口調は、情けなく、表情は悲しいようで悔しいといった様子が見て取れる。

流星のセラフィンもハンスも、からかうことは出来なかった。

「グハッ!」

「どこから……!?グッ」何も見えない闇に包まれる2人。その間にも、容赦なく攻撃は続く。

「こっちは何も見えないってのに」身をねじる純歌。とその時

「グッ……」「みゃ……こ?どうしたの??」尋ねる純歌。その声は震えていた。

都の声がしたと同時に、生ぬるいものがとんできたから。

「う……そでしょ……」見えなくてもわかる。生ぬるいものの正体が都の血だということは。

紛れもない、血の匂いが純歌を襲う。

「都、都!」

必死に純歌は呼び続ける。

いい加減、目も慣れてきて都の状態もわかってきたのだ。

都が切られたのは左肩。傷口からは血がどんどん流れていく。

「都ってば!!」

いつそう、声をはりあげる。

このまま、この樁の根の鎖がとけなければ都の命は危険域をすぎるだろう。

それは、死を意味する。

「駄目……死んじゃ……誰も、誰も死なせない!」死力を尽くして、叫んだ純歌の一声。

かといって、状況が変わるわけではないのだが。

「……死なせはしない……そう、誓った。それに」都が作り出した場所で純歌は確かに誓ってた。

犠牲者を出さない為に、戻ってきた。

なのに、目の前で自分を助けてくれた都を死なせてしまうかもしれない。

「何もしなければ、後悔する……私の考えた『最善策』で、皆を助けるんだからっ!」叫びと同時にくやし涙が飛び散った。

「ぜった、い、助ける!」

飛び散った涙が樁の根に落ちる。

「へ?」

樁の根に落ちた純歌の涙が樁を溶かしていく。

当然のように純歌は拍子抜けの声を出し、同時に身体が自由を取り戻した。

2人は解放されていく……ただ、2人とも気を失ったまま。解放され、落ちていく。何メートルも上から

NO・5 揺るがぬ決心・予想外の伝言（後書き）

予告通りのあらずじつきです。

アクションを書くのには毎度頭を痛めます。

何かアドバイスがあれば、教えていただきたいです。

では、第六部でもお会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・6 命の使い方（前書き）

他人のために、あなたはどこまでできますか？

NO・6 命の使い方

季節館の住人名簿

蒼霞 あおがすみ
純歌 じゅんか

向日 むかひ
佳 けい

大出 おおで
秀人 しゅうと

相場 あいば
巫斗 みこと

茶山 さやま
透香 とつか

都
遊 みやこ
ゆう

「あんな形で破るなんて。反則だよ」

苦笑しながらセラフィンは呟く。

言葉とは裏腹に怒ってはいない。

むしろ『喜んでいた』ともみえる。

緑の十字架は濡れていた。水でもかぶった様にぐっしょりと。

だが、季節館が雨漏りの被害にあったわけではない。

その証拠にセラフィンもクリスマスもハンスも濡れていないし、床もごく普通だ。

「セラ。『本気出せなかったのか』、『ださなかったのか』どっちだ？」

ま、俺から見れば後者だな。じゃないと、お前のリーナスがあつさりとけるはずねーもんなー」

クリスの声は完全にかかっている。が、セラフィンは反論せず、クリスとハンスに向き直る。

「てか、3人ともいえる事でしょ。全力で『リーナス』使ってない」

セラフィンが笑いながらクリスに返す。

「まあ、考えることは皆同じってことだろ」

簡単に流そうとするクリス。

どうやらこの話題から離れたらしい。

いいだしっぺのくせに。

「安全なところを作つとくなんて優しいねえ。クリス」

にこにこしながら言うハンスはとても楽しそうだ。

「……なんのことだか」

クリスは顔をそむける。

「……考えることは皆同じ……か。でも約1名違うみたいだけど」

セラフィンは、悲しそうに遠くを見つめ、言葉にする。

彼女の気持ちを察したかのように、クリスやハンスが同じように遠くを見つめる。

「……このまま時間が止まればいいのに」

「いや。正確には、『時間が戻ればいいのに』だな」

ハンスの言葉をすぐさまクリスが訂正させる。

しんみりとした空気が流れようとした時、パンパンと手を叩いた音を耳にする2人。

振り向けば、そこには透香がいた。

どこことなく目が赤いのは黙っておくことにする。

「さて。私達の役目は、終了。今度は改良型ラベンダーティー入れてあげるよ」

どうやって出てきたのか、茶山透香がキッチンに消える。

逆にセラフィンの姿はどこにもない。

そして、これはクリス、ハンスも同じことだった。

「おー。頼んだぜ、透香」

「てか、改良型ってなんだい？」

佳と巫斗が透香に自然に声をかけあう。

まるで、何事もなかったかのように……

「……ってええ」

声の主は都。気がつけば、いつの間にやら自分はあまり地割れしていない場所に寝ていた。

「
確か椿の根に縛られて……暗闇の中、切られて……って！
？」

少し離れたところに純歌はいた。

遠めだが、外傷はみられない。

都は傷が痛んだが、それどころじゃなかった。

「おい！起きろ！！蒼霞純歌！！！」

揺さぶり、大きな声で純歌に呼びかける。

5、6回それ続けると純歌は目を覚ました。

「死んだかと思ったぞ？蒼霞純歌」

安堵した声で都は話しかけた。

「ねえ……」

「どした？蒼霞純歌」

優しく問いかける都。柔和に笑いながら優しく問う彼に対して

「……フルネームで呼ぶのやめてくれない？」

純歌は真面目な顔でそういった。

「……あの状態で脱出……まるで、アンタが助けたみたいだな、デ
イック」

ジルの瞳と髪が紫を帯びていく。

その瞳は真っ直ぐデイック・クローバーを見つめている。

「どこまで、助けるつもりですか？デイック・クローバー」

ジルの声には感情が無い。

「でも。まだ……ショータイムは終わってませんから」

念を押すように、ジルは呟く。

その顔は、どことなく厳しかった。

「ところで……皆は？」

ゆっくり起き上がりながら、純歌は尋ねた。

何の音も、気配も何ひとつ感じられない、静寂感。

それは、不安を仰ぎ、増大させる。

「さーな。でも、ここが1・1だという証拠はあるぜ？」

都は力なく笑い、前方へ目を向ける。

つられて見ると、横転した机や椅子などの山から純歌は自分の鞆を見つけた。

見つけることが出来たのは、青いカスミソウがこちらを覗いていたからだ。

「皆、何処に」

呟きながら純歌がカスミソウに触れた時、静寂は消え去った。

「おらああ……!」

何処から現れたのか、1人の男子生徒が何かを握って純歌に向かってくる。

獲物をしとめたような形相で。純歌の目の前に。

が、純歌は避けようとしなない。男子生徒が持っていたのは、包丁だった。

「……おい。避ける！前！！」

純歌が動かずに男子生徒を見ていることに、都は恐怖した。

純歌の『カケ』の意味がわかったから。

「ごめんね、都。でも、目を覚ましてもらわなきゃ」

首だけ都のほうへ向け、静かに純歌はそういつて

純歌は抵抗せず、腹部を刺された。

真新しいブレザーに穴があき、白いはずのブラウスが赤く染まる。

辺りは純歌の赤い血で染まっていく。

不思議な笑みを浮かべながら純歌は倒れ、同時に包丁から彼女は解放される。

「……………う、うわあああああ」

男子生徒の悲鳴が、響き渡る。

正気に戻った、男子生徒の混乱した声が。

自分のしたことを認めたくないという気持ちが伝わってくる。

『なんなんだ？俺はなにしているんだ？？何で十字架を背負っている奴を……………よりによってこんな……………』

男子生徒の思いを、都は最後まで聞かないことにした。

聞くだけ時間も無駄だ。

「どけ」

静かに、そして威圧感を感じさせる声。

「本当の犯罪者になりたくなかったら、そこをどけ」

男子生徒は、都の言うとおりにして逃げるように教室の隅へと移動する。

いつのまにか、クラスメート全員が揃っていた。

正気は取り戻したが、今までのことは覚えていないらしい。

教室を見て、呆氣にとられている。

もう、あの異様な感じは伝わってこない。

伝わってくるのは、疑問符だらけの言葉。

そして、十字架を背負う者に対しての、恐怖

腹部からの出血はひどく、純歌の周りに血の池ができていく。

傷めた左肩をかばいながら、純歌の傍にいき、血の池に足を入れる都。

慎重に純歌の様子を観察する。

「右腹、約20cmってところか。出血がひどいわけだ」

心臓の音もいつしなくなってもおかしくない状態なのは、一目瞭然だ。

近くに包丁が落ちていた包丁の染まり具合で、それは真実だと分かる。

赤く染まった包丁。

純歌の命を造作もなくとってしまつ……と考えていた時、都の目に留まった物があった。

「ん？こいつ何握って……」

そこで、都は言葉をきる。目を見張らせて……

「ね、ねえ。救急車に連絡……」

女子生徒がおずおずと都に話し掛けて来る。

「んなもん、『こいつらには』無駄なんだよ！」

怒鳴る都。

おびえる、女子生徒。

それを横目で見ながら都は呟く。

「……後はお前次第だ。蒼霞純歌。いや、『お前達』の方があつて
るか？」

後半の台詞は、純歌の握っている青いカスミソウを見ながらだった。
純歌の脈はどんどん弱くなっていく。

「どう思う？ 蒼霞純歌のこと」

新しく入れたハーブティーを飲みながら唐突に透香が話しかける。

「さつきからリーナスが急激に弱まっているからな。予定通りじゃ
ねーの？」

すぐさま答える佳。

「蒼霞純歌が死ねば、全員揃う……仲間の元に」

ため息をつく巫斗。

「なんか、淋しいというか、罪悪感を感じるよ……」

透香の微笑みは珍しく弱々しい。

佳も巫斗も、透香と同じ気持ちに違いない。

だからこそ、浮かない顔なのだ。例えそれが、自分達のせいではなくとも……

「そこまで気にかける割には……案外鈍いな、3人とも」

「ほへ？」

「秀人 ？」

「なんで、戻ってきたんだ？」

透香達は驚くばかりだった。

ディック・クローバーの所から動かないと予想していただけに。

「 緊急事態を感じるよ」

脱力気味に秀人が答えると、透香達3人の顔色が一変した。

顔色だけでなく、身体が小刻みに震えてもいる。

「な、なんで……」

「嘘だろ……このリーナスを何で気付けなかったんだ……？」

驚愕と恐怖が透香と巫斗を縛り付ける。

「一刻も早く助け

」

秀人が2人に声をかけるが、それはみなまずいえなかった。

「こうしている間に被害が出る。あいつが……ユザナが蒼霞純歌を殺せば、今の状態だとティアラも」

秀人の言葉に巫斗が口をはさむ。

「ああ。その通りだ」

秀人は佳の眼を見て返答し、肯定する。

「行くぞ。十字架背負う花天使として、ユザナ・H・ハーブをぶち倒しに！」

そう言い放ちでいったのは、大出秀人と化していた、ジル・パーシカリア。

彼の後を3人がついていく

同時刻

『

ください……しっかりしてください』

誰かに私、蒼霞純歌は起こされた。

『しっかりしてください……思い出してください』

誰の声かわかった。

『カスミソウの少女』

あの少女が私を呼んでいる。

私はゆっくりと瞼を開けた。

『……よかったです。なかなか目を覚まされないので心配しました』

もう、ぼやけていない。はっきりと分かる。呼びかけていた少女の顔も声も。

少女が私を覗き込む。

正確には……私が私を覗き込んでいた、というべきだろうか……

NO・6 命の使い方（後書き）

Rueです。

正直、普通ここまでしないよ。と自分でもつつこんでます。
自分の命と他人の命を天秤にかけた純歌の選択。
吉と出るか凶とでるかわかりません。

では、又お会いできることを祈りつつ……

Rue

NO・7 新たな花天使は十字架を持たず（前書き）

己の身体に深手があるとき、あなたは他人を護ろうとしますか？

自分にはなく、他人にはあるものを心から欲しいと思うものはありますか？

NO・7 新たなる花天使は十字架を持たず

季節館の住人達名簿

蒼霞 あおがすみ
純歌 じゅんか

向日 むかひ
佳 けい

大出 おおで
秀人 しゅうと

相場 あいば
巫斗 みこと

茶山 さやま
透香 とつか

都 みやこ
遊 ゆう

ユザナ・H・ハーブ

「せっかく見つけたのに。死んでるじゃない」

突如、宙に現れた少女、ユザナ・H・ハーブが笑いながら言う。

真っ直ぐに純歌を見て。

笑い声は冷たく、目は笑ってはいない。

黒いようで紅い髪はとても長く、ピンさえもつけない。

右目が紅く、左目は黒い。

異様な組み合わせなのに、それが少女の美しさに変わるから不思議だった。

ゆっくりと地に足をつけたユザナは、静かに都に近づく。

そして、その成り行きを見守るクラスメート達。

「っ……こんな時に……」

都は小さく舌打ちをし、独り言を吐き捨てた。

たったひとりでクラスメートと瀕死の純歌を守らなければならない上、

彼も左肩をざっくりといている身だ。

まともに相手が務まるとは思えない。

『っーか”まともな状態でも”無理……』

顔は平然を装っているが、あくまでそれはうわべだけ。

ぶっちゃけ本音を言うと、『逃げ出してー!!』と叫んでいるのだ。

『大体、美人だけだよ……殺気を身体中に巻きつけている奴なんてぜってーヤダ!』

こんなことを心の中で叫んでいるのを知ってか知らずか、彼女、ユザナが都の前に辿り着く。

「……初めましてというべきかしら？」

都の前に来る間、ずっと純歌の事を見ていたことに都は気付いていた。

だから、彼女にとっては本当に『初めまして』なのだろう。

冷笑をうかべるユザナは、都の答えを待っているようだった。

「……」

「どうしたの？人の子として生まれながら『花天使』の名をもらった、ソニカ・アイリス」

黙っている都に、冷たい声で語りかけてくるユザナ。

ソニカ・アイリスとは、本当に都の『花天使名』である。

人間では、決してもらうことがないとされている花天使の名。

だが、都は偶然にもらったのだ。

今はこの場にいない、ある花天使によって。

「人間なのに『花天使』の名を授かって悪いな。

ま、十字架まではもらってないけどよ」

都は嫌味をたっぷり含ませてユザナを見、挑発するように返答をし

た。

そう、都遊は『普通の人間』。

そして、ユザナを含めた透香達も『人間じゃない』。

彼女達の本来の住む場所は、空。

あの広い空に浮かんでいる国、『プリメット』が彼等の故郷。

彼等が人間界に降り立つ条件はただひとつ。

人間界に、悪しき異変が起きた時だ。

そして、異変の源全てを自分達が吸収する……それが『十字架背負う花天使』の所以。

「……『花天使』の由来のひとつはそうなるわ」

思考を読み取ったユザナが都の目の前に立つ。

「でも、どうして私達が『十字架背負う』と言われてると思う？」

都の目の前で十字をきるユザナ。

「!？」

都が驚いたように目を開けた。

ユザナの目の前から大量の水が流れ出したから。

『十字切ったの、見えなかったぞ？おい……』

冷や汗を流した直後に、笑い声を耳にする。

「さあ、ソニカ・アイリス。少しは楽しませてよ？」

声と裏腹に、ユザナの目は笑っていない。

「わ・わ・わ・わたしいいゝ！！！」

大きな水の音をたて、たくさんのしぶきをあげて起き上がる私。

目の前には、私にそっくりな顔立ちの私がいる。

『あ、あの。驚かせてごめんなさいです

あたふたしながら私に謝る少女は、顔立ちだけでなく、声までもが
瓜二つ。

「え？え？え？？？ゆ、夢だから！？だから私の姿なの！？」

自分でも情けなくなるような言葉の連発。

そんな私に、少女は口を開いてとんでもないことを発言してくれた。

『お久しぶりです。ティアアラさま。私、『蒼霞純歌』です』

お辞儀をしながら少女は言った。手の中には青いカスミソウが握られている。

白い服が静かに水の中へと吸い込まれるように入っていく

バシャン

「へ……？」

突然、『蒼霞純歌』は水の中へ倒れこんだ。

透きとおった水に赤みが少しずつ広がっていくのがわかる。

「　　ちよっ……どゆ、こと……？何で、血が？てか、名前が全く同じ……」

私はこれ以上いえない状態に陥った。

だって、ありえない光景を目にしたんだか……

『蒼霞純歌』と名のる少女の右腹は赤い血で染まっ……。

白い服が赤い血をひきたていたんだ。

そして私は自分の右腹を見た。

血なんて全く出ていない。そんな傷、みあたらない。

あるべき傷が、流れるべき血が流れていない

少女は『私、蒼霞純歌です』と確かにそういった。迷わず、真っ直ぐと。

数分考えていくと、私の中で何かが破裂したように、『パンツ』と音を立てた。

そして同時に答えといえると思う仮設が生まれる。

でも。

それを素直にうけいれることは出来ない。信じたくないのだ。

全身で拒否する私。

そんな時、青いカスミソウが目に入った。

んだよ純歌は』

『現実を受け入れたくない

厳しい言葉の中に、初めて暖かさを感じた私。

「目を開けて蒼霞純歌。そして教えて。私の全てを、貴女の口から」

青いカスミソウに触れたと同時に、私は小さなカスミソウの中へと姿を消した

「『守りの泡』!!」

都はユザナの出した水が自分ではなく、クラスメートを狙ったと判断し、

すばやく全員を守るためにリーナスを使い、横目で純歌をみる。

瀕死状態がエスカレートしている純歌のことも一緒に入れたかったが、

万が一のことを考えて彼女には何もなかった。

『まだ青いカスミソウはなくなつてはねえからな』

その一瞬だった。

「!？」

痛めた左肩に激しい激痛が走り、同時に力がぬけていく。

「なに……しやが……」

上手く話すこともできない都は、額に汗をかきながら崩れ落ちる。

「あら。たいしたことはしてないわよ。ただ」

冷笑をうかべながらユザナは言う。

「『闇の剣』に『ガリナク』をかけたけれどね」

楽しそうなユザナ。

たいして都はどんな力が失われていく。

『闇の剣』は黒の中の黒をしている剣。

少し触った程度でも、軽く殺せることが可能でユザナの言うとおり、本当に触りもしないような程度だったのだろう。

問題は『ガリナク』の方だった。

『ガリナク』は1g……いや、それ以下だけでも十分に相手を動けなくする力があるらしい。

その上、傷口に入ると内部から腐らせる効果があるとも聞いた。

『ユザナの野郎……ぜってえ1g以上』

息が乱れ、ついに倒れこむ都。

「所詮、貴方は人間。『本物の花天使』に勝てるはずがないのよ」
耳元でユザナの声がする。

「貴方が死んだら……貴方が守った人達はどうなるのかしら」

言いながら都の首に『闇の剣』をかざすユザナ。

「考えるだけで、楽しいわ」

うつとりするユザナ。

『楽しくね、え……』

朦朧とする意識の中で悪態をつく都。

「あの子のことは心配しないでいいわ。楽に逝かせてあげるから。」

「ごきげんよう、ソニカ・アイリス」

あくまで楽しそうな声を出し、闇の剣を都に振り下ろす。

刹那

剣はユザナの元から消え、粉々に砕け散った。

多少は驚いたようだが、それを見せないのがユザナだった。

「卑怯じゃないの？姿を隠してなんて……姿をお見せなさい。ジル・パーシカリア」

声は変わらずとも目は怒りに満ちている。

黒い剣の破片のそのまた破片は、ユザナの回りに落ちていた。

「そついわれてもお前の後ろにいるんだけどな」

間の抜けたジルの声。

ユザナが一瞬目を丸く開き、冷や汗をかいたように見えたのは、都の目の錯覚か。

いずれにしても、驚愕を隠し、憎々しげにジルに話しかけるユザナの姿がここにあった。

「私の……楽しみが台無しになったのは誰のせいかしら」

「気づかないお前が悪いだけだぜ？ユザナ・H・ハーブ」

ニヤリとするジルの笑みにユザナは怒りの頂点に達するが、
畳み掛けるようにジルはユザナに言葉をかけ始める。

「殺したい奴がいるんだったら」

紫色の十字架を持ち上げながらジルが口を開く。

「目を離さないことだな」

ニヤツと笑い、振り落とした瞬間、瀕死の純歌も、都もクラスメイト達も消え失せる。

「次から次へと、楽しみを無くしてくれるわね」

怒りに満ちながらも、今ユザナを感じるリーナスの気配はジルと自分だけ。

これには絶対的な確信があった。

「でも、ひとりでなんて馬鹿じゃないの？」

そして、ティアラもディックも貴方達には「

「守れない、なんて言うんなら忠告するぜ？『きちんとリーナスの気配を読んでるのか？』」

とことん余裕に満ちたジルの言葉に思わず、ユザナはひるむ。

ジル以外、誰もいないと思っていただけに心にわずかな隙ができる。

「!」

その直後。ユザナの胸から突然、血が流れ出す。

「静槍流……?!」

音も無き技。武器は手だけ、という変わった流派。

だが、誰もが修行などして、会得できるものではない。

自分がしている、静槍流の使い手は

「どうだ？俺の静槍流『一文字』は。5cm弱。深いなんて言わないよな？」

自分に傷をおわせた張本人ハンスが姿を現した。

「……異性には何があっても静槍流を使わないんじゃない？ハンス」

胸を抑えながらユザナが問う。思った以上にダメージはでかい。

「自分が『本当に女』だと思ってるとはな……」

ため息をつきながらハンスが答える。

同時にセラフィンとクリスも姿を見せた。

「私達のリーナスを感じさせないなんて、流石はジル」

「ジルのリーナス制御、なめてるからだぜ？」

挑むようなクリスの視線。

彼等はユザナを囲むようにして立ちふさがった。

「『花天使』は地上のどこかに異変を感じた時全てを吸収することが宿命」

クリスが最初に口を開く。

「そして『十字架背負う』といわれているのは」

眼鏡をかけ直しながらハンスが後を継ぎ

「死んでしまった人達の体を借りて地上に存在し、

源を打ち砕くまで傷つけてしまうから。心も、体も、何もかも！」

声とは裏腹の微笑は、セラフィンの怒りの表し方。

「代償として、俺達『花天使』は、

その人達が生存していた時の『心の傷』や『罪』を全て吸収し成仏させる……だよなユザナ」

最後はジルが締めくくりながら、全員が十字架をユザナに向ける。

「
貴方達」

ユザナが初めて顔をゆがませる。自分にはない十字架。

同じ花天使でも自分とジル達の違いを見極める十字架。

源をうち砕くための武器。

そして、リーナスを……いわば力を高めてくれる花天使最大の武器。

「……こんなこと許されるとても」

冷静を保とうとするユザナは新たなリーナスを感じ、恐怖する。

「……まさか、この、リーナスは」

「私を誰だと？あのくらいのガリナクは遊び程度ね」

セラフィンの後ろからひょこつと顔をだしたのは都。

またの名をソニカ・アイリス。

彼も花天使のはしくれなら、リーナスの気配はいやおうなくする。

「さっきの礼はさせてもらっぜ？」

この言葉が戦闘の合図となった。

『起きて下さい、起きて下さい！ティアラさま』

ユサユサと『蒼霞純歌』が私を起こす。

「はうえ？おはよー……」

私はそれだけ言うと、また眠りにつく。

『ティアラさま！起きて下さい！！皆さんが危険です』

「！？？どういこと？」

反射的に飛び起きたけど、どこか戸惑いながら尋ねる私がいた。

「やっば、『ティアラ』が私の名前、か……なんか慣れない感じ」

苦笑しながら私が呟くと、蒼霞純歌は『当然ですよ』と返してくれる。

全く、調子が狂ってしまっう。

「ところで……『蒼霞純歌』はなんで透けてるの？」

私の質問に対し、『蒼霞純歌』は迷いなく言う。

『『純歌』でいいです。貴女さまのフルネームは『ティアラ・ジプソフィラ』。』

ここは、『ブルー・ジプソフィラ』簡単に言えば、貴女の力である中心部。

ですから、私がこうなるのは仕方ありません』

純歌は即答するが、自分自身に言い聞かせるように話すようにみえる。

『『ブルー・ジプソフィラ』は貴女さまの魂。私はここには長くいることはできません』

純歌の姿はほとんど見えない。

声も疲れ、表情も見えなくなってきた。

純歌の周りだけが、どんどん歪んでいく。

「ちょ、ちょっとまって。『ブルー・ジプソフィラ』？魂？？どういうこと？」

『魂や力、と言うより『リーナス』というべきでしょうか』

純歌は答える気が無いのか、またもや知らない言葉を発してくれた。

『ティアラさまを、移動、させます』

純歌の息づかいが荒くなるのを感じる。

『そのときにはすでにティアラさまは記憶を全て取り戻しているはず』

無理して笑っているのが痛々しい。

『今までありがとうございました。ティアラさま。』

いえ、『花天使』のティアラ・ジプソフィラさま。そして』

純歌はここで言葉をきった。続きをいつていいのか迷っているように見えた。

『……………とにかく移動させます。ティアラさまはひとりじゃないです。このことを絶対に忘れないで下さい』

最後に聞いた元気な純歌の声を最期に、私は自分が行くべき場所へと帰っていく……………

私が、私である姿に戻りながら……………

十字架背負う花天使のひとりとして。

NO・7 新たな花天使は十字架を持たず（後書き）

ようやくユザナをだせました。こんばんはRueです。

正直、ユザナは生みの親である私でもよくわかりません。というか、創造できないです。つかみ所がないというか……

でも、そんなこといったら、秀人もつかみ所ないですが。

では第八部でお会いできることを祈りつつ……

Rue

NO・8 消えない十字架・ひとつの節目（前書き）

力が飛びぬけているから勝つとは限らない。
個々の能力が一丸になれば、それはとてつもない武器となる。

十字架背負う花天使達・第1章が完結！

NO・8 消えない十字架・ひとつの節目

季節館の住人名簿

蒼霞 純歌（あおがすみ じゅんか）

向日 佳（むかひ けい） 花天使名：クリス

大出 秀人（おおで しゅうと） 花天使名：ジル

相場 巫斗（あいば みこと） 花天使名：ハンス

茶山 透香（さやま とうか） 花天使名：セラフィン

都 遊（みやこ ゆう） 花天使名：ソニカ・アイリス

ユザナ・H・ハーブ

「『紅の十字架』！！」

「『水の守り』！」

クリスが黄色と茶色が含まれた十字架で、空をきると炎の十字架がユザナに向かう。

ユザナも負けじと防御する。

水VS炎。明らかにクリスが不利。

ユザナの『水の守り』は完璧に『紅の十字架』をはじいてしまう。

「『緑の砦』！」

クリスの援護をするため、セラフィンが防御状態のユザナを樁の木で覆う。

たちまち姿が見えなくなるユザナ。

緑の砦は使い手のリーナス次第で強弱がはっきりと出る。

今のセラフィンならユザナを押さえ込む力はあった。

彼女は草のリーナス……いわば、草の力を主に使う者。

殺してしまうことも可能だった、可能のはずだった……が。

「闇の……剣」

セラフィンの背中に闇の剣がおさまっていく。

次第に深く押し込まれていくのをセラフィンは感じたし、ジル達が目にもみてとれた。

「……………くっ」

セラフィンはこの状態で守りと攻撃に入っている。分が悪いのは明らかにセラフィン。

背中が血で染まっていく。

「セラフィン！」

「セラー!!」

クリスとハンスの声が重なり、駆け寄ろうとするクリスとハンスをジルが制する。

「俺達の手で殺しかねない」

その通りだった。ユザナは一か八かの賭けにでていたのだ。

セラフィンが緑の砦を出した時に、自分は闇の剣を投げ、確実にセラフィンを殺そうと。

ジルが言ったとおり自分以外の者が近づいたら深く刺さるように。

「くそつ。もし、セラフィンが倒れたら緑の砦がとかれ、ユザナが自由になっちまう。」

唇をかむハンス。

「2度も緑の砦がきくとは考えられねえ。 『大地の力』
！」

クリスが緑の砦の方向に十字架を振り下ろす。

少しずつ割れていく大地は迷うことなく、ユザナに向かう。

砦の中のユザナを土で固めようとしているのだった。

土だけではなく、大地に眠っていた虫たちも一緒にユザナについていく。

「『氷の枢』！」クリスと同様、ハンスが更に固めるためにユザナの枢を作る。

氷の枢は中では動けるが破ることは不可能だが、やはり使い手のリナス次第。

ハンスには完全な枢が作れなかった。

「少しは気がすんだかしら？ クリス、ハンス」

緑の砦から、すました顔ででてるユザナ。

憎たらしいことに、傷ひとつついていない。

一方、剣を押し込まれたまま、セラフィンは横たわっていた。

クリス、ハンスそしてセラフィンを通り過ぎ、ジルと都に近づくユザナ。

「全く呆れるわ。貴方達のリーナス如きで私が倒せるとでも？

第一、どうして私を殺そうとするのかしら……ねえ？ ジル」

無邪気に問うユザナにジルは怒りをあらわにする。

「言わねえとわかんねえのかよ」

口調まで完全に変わっていた。

「ジル！」

すばやく都がジルに静止をかける。

「ああ。悪い……」

ジルの喉もとに闇の剣がういていた。

もし、静止が無ければジルは完全に闇の剣の餌食となっていただろう。

正直、ジルらしくない行動である。

「よくもまあ、闇の剣を何本も出せるな。ユザナ」

半ば呆れたような都の声。

「私のリーナスは底なしだもの。当然よ。ソニカ」

『何を今更』という意味を込めた顔で、ユザナは言う。

闇の剣は威力がすさまじいため、やたらと出せない。

つまり、剣を出すだけでもリーナスの消耗は激しいということだ。

それがユザナにはないのはやはり、『花天使の差』だろう。

十字架を『持つ者』と『持たない者』……

『持たない者』は『剥奪された者』といわれている。

ユザナが『剥奪された者』となり3年。

3年の間にユザナは『剥奪された者』の特権を見つけた。それが『底なしのリーナス』。

これに気がついていても、自由自在に操れる者はあまりいない。

「で、どうして私を殺そうとするのかしら？ 私には覚えが無いわ」
あくまでしらをきるユザナ。

「だいたい、殺して何の得が貴方達にあるの？」

ユザナに冷たい笑みがうかぶ。

彼女の目は『そんなもの、ないでしょう？』といていた。

そしてクツクツと笑うのだ。

『アホらしい』とでもいうように。

静かで冷たい空気が飛び交う中、うめきながら、絞り出す声が出た。

「特とかじゃ、ない……わ……」

小さなセラフィンの声が響く。

「動くな！セラフィン！！」

ハンスが怒鳴る。それでもセラフィンはこちらを向こうとする。

妹の痛々しい姿に自分が重なるハンス。

『逆の立場だったら俺も同じ行動をとっているからな』

双子というものは、2人揃って1人のようなもの。

顔つきなどが同じように考え方も同じ。

だから、セラフィンのことはハンスが一番わかっている。

「生きてたの？とつくに逝ったティアラの元へ向かったと思ったのに。」

しぶといわね、セラフィン・カメラリア」

ユザナは小馬鹿にするかのようにゆつくりと返す。

「あんた……3年、前から何、も……かわって……ない……」

立ち上がるうとしながらセラフィンは答える。

闇の剣を抜いてやりたいハンス達。

だが、今ユザナに攻撃したりセラフィンに近づけば確実に殺してしまう。

ユザナに一瞬でも隙ができれば、不可能が可能となるのに……！

「何を言うかと思えば。3年間で底なしのリーナスを自在に」

「操れるようになったけどな。お前の十字架は消えてはいないぜ？
ユザナ・H・ハーブ」

途中クリスが後を継ぐ。

「どういうことかしら」

ユザナは静かに問い、クリスを睨む。

自分の十字架は確かに目の前で剥奪され、砕け散ったことは忘れていない。

「ユザナ。お前の十字架は確かにねえよ。」

冷たい声で言い放つハンス。

「俺達が言ってるのはな、『お前自身にかけられた十字架』のことだ」

都がユザナをしっかりとみて発言する。

「忘れたとは言わせねえ。3年前のあの日のことを。俺達がここに

来た理由なんだから！」

ジルの言葉で意味がわかったユザナは、やはり冷笑をうかべ

「ああ、あんなことで？馬鹿げてるわね」

肩をすくめる。ただそれだけで終わらせた。

そして彼女はこうも言った。

「あんな、遊びのことを、今更言つの？」と。

「
変わってない……十字架、剥奪されても……意味ない……
…ね」

肩膝をつき、答えるセラフィン。

相当息も乱れてきているがセラフィンは続ける。

自分との戦いに負けたら、待っているのは”死”だと知っているから。

「私、達は、罪を吸収し成……仏させるのが努め　貴女は……
正、反対よ」

「だから、なに？ていうか花天使がどうしてそこまでしなくちゃならないの」

間髪いれずにユザナはきっぱりと言う。

流石にセラフィンも、もう言葉が出せない。

言いたいことはまだあるのに、力が、リーナスが、消えていく。

「さて、おしゃべりはここまでにしましょう『風の鳥』!!」

教室の空気の全てがユザナの元へ集まったと同時に襲いかかってくる。

それは風で作られた、巨大な鳥だった

「なんつー……『風の鳥』を作りやがったんだ……」

風使いであるハンスだから、よくわかる。

ユザナの作った風の鳥の力が、どれだけ大規模なものかということが。

風はあらゆる物を切り裂いていく。

「セラフィン!!」

ハンスが声をはりあげる。風の鳥が真っ先に狙った人物

それは、闇の剣を刺された、セラフィン・カメラリア。

「さよなら」

眩き程度にユザナは言った。

眩きは次第に大きくなり、完全に笑っていた。

彼女の冷たい笑い声、冷たい目から出される声はハンスの絶叫をけ
してしまふ。

だから、誰もが気づかなかった。小さな歌声に、純粋な気持ちの歌
声に

「これで終いよ！」

鳥をセラフィンに向けるユザナ。誰も、動くことが出来ない。

主導権は明らかにユザナにある。

セラフィンを鳥はのみこむ

目をつぶるセラフィン。次の瞬間、自分がどうなっているかわかっ
ていた。

『ツバキの生命力もこれまでか……』

微笑し眠るような彼女は静かな眠りへといく……はずだった。

だが、一向にユザナの風の鳥がこない。気配がどこにも感じ取れない。

かわりに懐かしいリーナスの気配がする。

そつとセラフィンは目を開けると後一步というところで凍った鳥が目に入る。

完全なる『氷の柩』で鳥は固まっていた。

「無理は禁物でしょ？セラフィン『癒しの香り』」

声を聞いて確信する。目の前にいるのは

「ティアラ……」

安堵したせいかりーナスが蘇ると同時に眠気に襲われていく。

「相変わらず無茶するねえ」

「……………ティアラにいわれたくないなあ」

そして、また聞こえ始める歌声。

『春』

さくらは咲き乱れ

新しい路が開かれる

いたるところに花は咲き

見ているだけでいい気持ち

暖かいようで少し冷たい風が

撫でるように吹いてくと

さくらの舞をみせてくれ

静かに私を通りすぎてく
『

「な……！？」

絶句するユザナ。『あの娘は本物！？』

本物だなんて信じたくないユザナ。

死んだと思い込んでいた矢先に出てきた……いや目覚めたティアラ・ジプソフィラ。

彼女の歌う歌は、純粹すぎてユザナのリーナスを封じ込めてしまうほどのものだった。

『夏』

太陽が元気に顔をだし

負けじとセミが鳴いている

うるささと暑さに負けて

扇風機をつけながら

アイスを食べよ

外をみるとヒマワリが

こちらを元気に見上げてる

涼しいようで

生ぬるい風が

私を通りすぎていく』

歌声で自分のリーナスに隙が出来ていくのはユザナ自信が分かっている。

否応なく、底なしのリーナスを封じられていくのがわかってしまう。

そんなユザナが耳を覆ぎ膝をついた瞬間。

「『今だ!!』大地の怒り』」

都、クリス、ハンスが同時に叫ぶ。

「!しまっ……」

3人の怒りが爆発する。

ユザナが容易く抜けることの出来ない戒めを作ることしか頭にはない。

歌が大きくなっていく。リーナスがみなぎってくる。

「でてきなさいよっ ティアラ・ジプソフィラ」

耳元で言っているような歌声から遠ざかりたいユザナだが、クリス達によって動きを封じられている。

「これさえ…… ほどければ」

必死にもがくユザナ。

そんな時、思いがけない声が目の前から聞こえてきた。

「そんなことしても無駄だよー？ 特にクリスも混じってるとねー」

「！？」

「はっろー。死にぞこないのティアラ・ジプソフィラ！ ただいま参上！」

そして、また歌いだす。

十五夜にかかせない

ススキを大量に摘んできて

皆でおだんごをつくってく

私たちもにぎやかだけど

虫の奏でる演奏にはかなわない

ほんの少しだけ寒い風が

ススキをゆらし

私を通りすぎていく』

「……ティアアラが
」

ジルも目を疑った。

『ティアアラが2人！？』

確かに2つの気配を感じとることができた。

ひとつはセラフィンを守るように歌うティアラ。

そしてもうひとり、ユザナの前に立ちふさがるティアラ。

ティアラが2人、という状況はある意味、簡単に作れる。

が、死の淵から舞い戻ってきたばかりの彼女に、どこからそんな力がでたのかわからない。

もうひとりの自分を出すことなんて、まだ出来るはず、
ないのに

『でも現実を感じる事が出来る』

「ティアラ……イングルも、復活させたのか……？」

ジルの目に涙がうかぶ。

「『無理は禁物、無茶は無駄』って、いつの口癖の奴がよくやるよ」

呆れ半分、嬉しさ半分のジルが呟く。

『冬』

『メリークリスマス！』

聞こえる声楽しそうで

自然に笑みがこぼれてく

行く道には雪のレールができていて

足をとられそうになる私

広場に大きなモミノ木があり

電球や鈴などの飾りはされてないけど

白い雪の飾りつけはワタのよう

刺すように冷たい風が

私を通りすぎていく』

心地よい声が皆の身体にしみこんでくる。

だがユザナにとっては毒のようなものだった。気分が悪くなる歌声。

『1人でも厄介なのにそれが2人！？』

目の前にいる本人を睨む。

「……ティアラ・ジプソフィラ」

死者と生きていただけに流石のユザナも油断したらしい。

対処が間に合わなかった結果、囚われた形になっている。

ユザナはこの歌声から自分の底なしのリーナスが小さくなっていくのを感じた。

「あんたは『ティアラ』？それとも『イングル』？」

目の前のティアラに問いかける。

「さあ？」

にやりとティアラが微笑んだ。

「どっちなわけ？」

「そんなに簡単に教えるかっての」

セラフィン、ジル、ハンス、クリス、都にも笑みが浮かび余裕が出てきた。

どっちが本物かなんて今はいい。

「来るのおせーんだよ」

「久しぶりだね、ティアラ」

「ま、俺は信じてたけどな」

クリス、ハンス、都の声が皮肉ではなく心地よい響きに聞こえる。

「あたしはいいところりが得意だもんね」「」

胸をはるティアラにジルが呆れたように言う。

「どうでもいいが。ティアラ、まだ歌は終わってないはずだが？」

「相変わらずだねえ、ジル。ラストはやっぱりA L Lででしょうが」

笑って歌を再開するティアラ。

『春には春の風がある』

みんなを包み込む風が』

『夏には夏の風がある』

みんなを一瞬、涼しくする風が』

『秋には秋の風がある』

みんなが趣味を快適にできる風が』

『冬には冬の風がある』

みんなを家に閉じこめてしまう冷たい風が』

春をティアラ、夏をクリスと都、秋をジル、冬はセラフィンとハンスでリレー式の歌い方。

その顔に疲労はみられない。

完全に主導権はティアラ達にかわった。

『大地の怒り』であらゆるところを縛られて身動きが出来ないまま、ユザナは目の前のティアラとセラフィンの方にいるティアラに向けられる。

それをしつかり返すティアラ。

「これで勝ったなんて、思わないですよ？」

憎々しげに言い放つユザナ。

赤と黒の目がティアラを睨む。対してティアラは、それを難なく受け止めた。

「それはそうでしょうね、ユザナ・H・ハーブ」

目の前にいるティアラが答える。

「やっと『第一章』が終わったってところでしょっね」

セラフィンと並んでいるティアラが後を継いだ。

「……………よくわかってるじゃない」

ユザナは不思議な笑みをみせる。

「次に会う時は、やられはしないわよ」

「いうことだけは、立派ね」

セラフィンがニッコリ笑って言葉を返した。

「ちなみに今の曲名、『春夏秋冬』な」

とボソツともらすハンス。

「まあ、そんなことはおいといて。

あたしらが黙って逃がしてやるとでも思っわけじゃないわね」

目の前にいるティアラが問いかける。

「まさか」

冷静を取り戻したユザナ。が、底なしのリーナスは歌声でかなり小さくなった。

ティアラもそれを見逃さない。

2人のティアラが右腕に十字をきった。

そしてそこから十字架をとりだす。細くて軽く2Mはある十字架を。慣れた手つきでもてあそび、ユザナに向ける。

全ての行動が同時だった。

リーナスが回復していく。

「流石、ディック・クローバーの妹」

「関係ないでしょう。あんたには」

目の前のティアラが静かに怒りを表す。

その反応を楽しそうに見ているユザナに背後から声がかかる。

「何で……」

もう1人のティアラが真後ろに移動していた。

「気配に気をつけな。そして」

「さよなら」

にこやかに挨拶を終わらせると

「『青い雷』！！」

前後左右からの攻撃。

青白い雷がユザナを直撃し、一瞬だけ辺りが見えなくなる。

気づいた時にはユザナの影も気配も感じられない。

教室には潮のにおいがわずかに漂う中

「兄、ディック・クロバーは関係ない」

2人だけの呟きは決意の表れ。

1章 完結

第

NO・8 消えない十字架・ひとつの節目（後書き）

Rueです。

第1章完結しました。

ですが、まだまだ続きます。

戦闘描写はやっぱ難しいです、私には。

思い描いたように、かけないもんですね（苦笑）

では、第2章でもお会いできることを祈りつつ……

Rue

NO・9 最後の記憶、新たなSTART（前書き）

朝が来れば夜は来て
帰ってくれば家族がいる。

そんな当たり前の生活がなくなったら、あなたはどうしますか？

第2章は、プリメット生活時代からスタートです！

NO・9 最後の記憶、新たなSTART

「ティアラ、イングル。いつまで寝てる気だ！」

怒鳴り声を耳元でされると嫌でも起きるのが本能。それが寝起きの悪い二人、ティアラとイングルでも。

「ったああい！痛い！鼓膜破れる〜」

ジタバタ暴れる少女ティアラ。

「うつせーなー兄貴い。死んだらどーしてくれんだよ」

大げさに反発する少年イングル。飛び起きると2人は兄、ディック・クローバーに抗議する。

「はいはい。死ぬわけないから安心しろ」

妹と弟を交互に見ながらディックは大きなため息をつく。

「いつになったら男と女の区別が出来るような顔になるんだ」

イングルの顔をマジマジと見ながら呟く兄。

「うつせえ！馬鹿兄貴！！！」

五月蠅いのはどっちだと思いつながら耳を塞ぐディック。

「朝からうるさくしないでよ」

ティアラが布団に入りなおそうとする。

五月蠅いイングルと布団に戻ろうとするティアラをひっぱりだし、
ディックは2人を外へ放り出した。

「少しそこで反省しとけ」

これが3人の生活。3人にとって当たり前で楽しい生活。いつまでも
続くと思っていた……誰もが疑いもせず。

壊れたのは、本当に突然のこと

「座って」

2人が喧嘩しながら帰宅するなりディックは言った。

『お帰り』でも『また何かあったのか』とも言わずに『座って』と。

2人は胸騒ぎを覚えながらも、言われた通りに座る。

「一部の花天使が人間を虐殺してることは、知ってるよね？」

コクンと2人は首を縦に振る。

そう降るしかできなかった。

「勢力が強くなっているらしい。このままじゃ、犠牲者が増えるだ
けなんだ」

2人は顔を見合わせた。

兄が、何を言いたいのかわかったのだ。

「兄さん、行っちゃうの？」

「お前等も大きくなつたし」

「兄貴！！答えろよ！地上に行くのか？」

「俺は教えることは教えてきたし。もう大丈夫だな」

一方的に淡々と話す兄。2人を無視して続ける。

「敵は強いし、久しぶりに暴れられるってやつだ」

兄は2人を見て微笑した。

「ちゃんと帰ってくるから、そんな顔するなよ」

気づけば2人は涙をこらえていた。

今、どんなことがおきていて、阻止するには確かに兄の力が必要だ
ろう。

わかっていても、2人の胸騒ぎは消すことが出来なかった。

「いつちや駄目だよ、兄さん」

「俺もティアラと同意見だよ兄貴」

2人は必死になって止めようとしたが、兄の手によって気絶させられた。

「こんなところかな。兄さんは行く時に記憶を一部、消したみたいだから」

ティアラの話が終わった。

彼等の予想通り、残っているのは最後の記憶だけ。

秀人だけがうかない顔をしていた。

『本当に消したんだな、なにもかも』

ユザナが消えてからすぐ、教室の修復、クラスメートの記憶を削除、と大忙しだったメンバー。

結局全てを終わらせ季節館に戻った時刻は夜の10:07。

戻ると同時に花天使達は、館の住人へと姿をかえた。

彼等は、透香が疲れながらも作ってくれたハーブティーを飲みなが

ら、ティアラに兄のディックについて聞いてみた。

何処まで覚えているか確かめるために。

話し終わった現在時刻は10:56。

短い話だったのに、長い沈黙がリビングを支配する。

それぞれが思いふける中、秀人はティアラに言うべきか迷っていた。

『ティアラに言ったらどんな反応をするだろう……』

秀人はティアラを見ながら、深いため息をつく。

11:38

佳、透香、巫斗が己の言葉で今までのことを口にした。ひとつつつ思い出すように。

「ディックがユザナに負けたことで、俺達に指令がきて……」

殺された魂の中で自分と共鳴を起こした奴と取引をしたよな」

「花天使のままだと、すぐ気づかれる。だから、そのための取引をしたね」

「人間と花天使の違いを分かってもらっためとかいってたけど、記憶喪失の原因となった」

はあ……

住人達が一斉にため息をつく。

「お取り込み中悪いんだけど」

都が欠伸をしながら割り込んでくる。

「そろそろ、自己紹介してくれないか？対となる存在のことも、さ」

「『花天使は必ず対の性別をした双子が花から生まれる。』

先に花から出た方が『外』で生き、後から生まれた方は『中』で生きる。

『中』で生きる者は『魂』を守りながら『外』の者の精神の中にいる』って聞いたぜ？ディックから」

都は言った。ディックから信頼され、その証として花天使の名を授かった都遊。

人間でありながらリーナスを使いこなせる者。正直、珍しい存在だった。

「花天使は対の性別の双子が生まれる。

双子って言うからには、一つの花から2人生まれるってことでしょ？」

透香が都に問う。

「当たり前だろ」

馬鹿にすんなという声音で答える都。

「じゃあ、私達5人にも『対の存在』がいると思わない？」

にこにこと尋ねる透香は楽しそうだ。

「そういえば、そうだよな。でも、5人しか見えないじゃないか。」

都の指摘通り、目の前にいる花天使は5人。

双子ならば10人の花天使がいなくてはならない。

都の疑問に答えたのは佳だった。

「『先に生まれし者は『外』で生き、

後で生まれし者は『中』で生きて『魂』を守る』ってなこと聞いた
だろ？デイク兄から」

「ああ。でも『対の存在』が」

「まあ、聞いてよ」

落ち着いた声で巫斗が制した。

「地上では『先に生まれし者』が外見として見える。

『後に生まれし者』はその間、『先に生まれし者』の精神の中にい
るんだよ」

「目に見えなくても、私達の中に『対の存在』はちゃんという」と
透香。

『と、なると透香と巫斗は双子だから……4つ子つてことかよ……
あれ、でも』

都は透香と巫斗に疑問をぶつける。

「お前等、誕生花違うのに、どうして双子になるんだ？」

「ああ。プリメット　母国でもいわれてるよ。

全く同時に別々の花から生まれたんだってさ。俺達が初めてなんだ
って」

楽しそうに言う巫斗を見ながら、そりゃそうだと内心ツツコム。

『 早々何組もあつてたまるかよ。お前等みたいなの!』

心の中だけで騒ぐ都を黙らせたのは巫斗でも、透香でもなかった。

「話は終わったな。じゃ、改めて自己紹介だぜ!」

口を開いたのは佳。

「ヒマワリに宿りし者、クリス・サンフラワー。こと、むかひ向日佳」

右の額に十字の傷がよく目立つ少年クリスは実に活発そうな印象を
うける。

わざとよく見えるように傷口を露にし、十字架を都の前に突き出す
姿は悪戯小僧。

「ジル・パーシカリア。誕生花タデ、またの名をおおでしゅう大出秀人」

はつきりいって、何を考えているのか分からない少年ジル。

透視能力を生かし、全てのものを見通す能力は生まれつき。

細めの十字架を腰に刺し、笑うその姿は敵か味かわからない。

「ポインセチアに宿りし者、ハンス・A・ポインセチア。

またの名を相場巫斗^{あいば みこて}」

「誕生花ツバキ。セラフィン・カメリア。こと茶山透香^{さやま とつか}」

分厚い眼鏡をかけた少年ハンスと、その妹セラフィン。

性別と同じく何もかもが正反対の双子。『風の操縦者』と謳われる巫斗。

『薬品の神』と謳われる透香。この双子、一筋縄では切っても切れない仲だ。

「カスミソウより生まれし、ティアラ・ジプソフィラ。こと、蒼霞^{あおがすみ}純歌^{じゅんか}。」

対の存在のイングル^{イングル}晴夜^{はるよ}もよろしく」

軽く2mはある細長い十字架を空中に投げ、わざわざ一回転してキヤッチする。

どうやら、かなりのお調子者で目立ちがりのようだ。

「ってか、おめーは『バカ純』で十分だろーが？」

「あんだこそ、『バカ面ケイ』でしょ?!」

佳と純歌の間で火花が散る。

「仲いいな、2人とも。ともかく俺は都遊^{みやこゆう}。」

一応、花天使名はソニカ・アイリス。改めてよろしくな」

純歌と佳を無視して喋る都。

「「無視するな!!」」

ギャーギャー五月蠅い2人に透香が爽やかに

「これから1ヶ月、家事一般を2人に任せていい?」と無邪気に問う。

季節館には大きいし部屋数が多い上、一つの部屋が広い。庭の手入れなどもある。

「「ごめんなさい」」

2人はしぶしぶ謝る。家事一般も嫌だが一番の理由としては『今の透香の笑顔は脅しているので怖い』だろう。

現在時刻 12:09。

日付は変わっていた。

「とりあえず、今日は泊まっていけよ。ソニカ……じゃなく遊」秀人が申し出る。

「俺達がまきこんだようなものだし。遠慮しないでさ」巫斗も同意した。

「……じゃ、そうさせてもらうな」

ためらいながらも都は季節館に泊まることにした。

「あ、ねえ。皆」

それぞれが自室に向かおうとした時純歌が声をかけた。

「これからも、あたしは あたし達は『十字架背負っ子供達』
として扱われるの？」

おずおずと話す純歌。

「大丈夫だよ、純歌。もう、あの子達の魂は成仏した。

あの子達の存在は人々の記憶からなくなる。」

ゆっくりと話す秀人。

「つまり、もう世間を気にする必要はないってこと」

透香が付け加える。心地よい笑顔で。

「学校は変わんないけどな」

意地悪い台詞は佳。

「早く寝よう……そろそろ限界」

巫斗の一言で今度こそ自室に向かう花天使達。

誰もが気付かなかった。

それだけ疲れていたのだろうか、それとも……。

「そっか……みんなの中では『終わってる』んだね」

純歌が淋しく吐いた言葉に。

秀人の部屋

「でも、終わったわけじゃない」

自室に戻った秀人は、ベットに座ると小さく呟いた。

『ユザナは生きている』

『ユザナは誰かによって助けられた』

『次に会った時は今回以上のリーナスで挑んでくる』

皆も気づいているだろう。戦いは終わっていない。

むしろ今回の戦いは『序章』にすぎないと。

「やっと『第一章』が終わったってところでしょうね」

純歌の質問をユザナは当然のように肯定していた。

今、『第一章』が終わり『第二章』に入っているのだろう。

なにより、ユザナのバックには誰がついているのか。

何も分からないまま時間がたっていく。

「うけてたつてやる……！」

迷いのない声。

季節館にしばしの休息がおとずれる

NO・9 最後の記憶、新たなSTART（後書き）

ある意味これは自己紹介ではないかと考えたりします、Rueです。
そして出番がようやく来たキャラクターが登場しました。
でも、これからはどうなんだろう……

では又お会いできることを祈りながら……

Rue

NO・10 Top・Secret?! (前書き)

命をなくすと、何が残されると思いますか？

NO・10 Top・Secret?!

季節館の住人名簿

蒼霞 あおがすみ 純歌花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日 むかひ 佳花天使名：クリス・サンフラワー

大出 おおで 秀人花天使名：ジル・パーシカリア

相場 あいば 巫斗花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山 さやま 透香花天使名：セラフィン・カメラリア

都 みやこ 遊花天使名：ソニカ・アイリス

リリリリリリッ………ビッ！

耳障りな目覚ましをたたきつけて起き上がる純歌。

「起き上がったものの完全に寝ぼけていた。」

「起きなよ！純歌、遅刻するよ」

片手にお玉を持ち、エプロンをしているトーカは完全に主婦だった。

「うゝだつてー……眠いんだ………うわあー！」

ガタン！

あたしの悲鳴と共にベットがずれる。

バランスを失ったあたしは当然のように滑り落ち、目がさめる。

「トーカさん。何も静槍流『風雷』ふうらいを使わなくても」

「起きない方が悪い」

きっぱり断言してくれるトーカ。

静槍流はトーカとミコ（巫斗）の2人だけが使える流派。

自分自身の手だけで、簡単に何でも切ってしまう。

どんな格好をしていても出すことが出来る恐ろしい技。

「ほら、さっさと着替えないとアウトだよ」

トーカは微笑みながら時間を示す。

「はっ 8時!？」

マッハで着替えながら内心、トーカに悪態をついていた。

『絶対に、のほーんとしながら、ギリギリに起こしたんだ……！

だいたい、『一輪草』ですむじゃんよ。久々に『風雷』を使いたい
だけだったに違いない!!』

そんなあたしの思いを読んだのかトーカが爽やかに微笑んできた。

「ありがとね、久々に風雷使わせてもらって」

トーカの微笑で凍結した者は数知れず……。

キンコンカンコンキンコンカンコン

HR終了の鐘になる。

「た、助かったあ。席がここでよかったよう」

あたしは心からそう思った。あたしの席は廊下側の一番後ろ。

ここじゃなかったら、遅刻扱いされるところだった。

「ここまで寝起きが悪いとはな。佳から聞いていたけど」

振り向きながら都が言ってきた。

目の前の席は都なのだ。どうやらシュート君に頼まれたらしい。

「『純歌は、まだ回復したばかりだから』だってさ。佳にも言われたよ。ま、俺もそのつもりだったけど」

のほほん、と言う都。

「さいか……」

疲れ果てたために話すことが一苦勞な蒼霞純歌だった。

「あーそーだ、都。あたしのことフルネームで呼ばないでね」

1 限目が終わるとすぐ、都に釘を刺しておく。

「了解、蒼さん」

ゾワワワ・・・

「さんなしでいい」

背中に悪寒が走るのを確かに感じた。

「ま、いいじゃないか蒼さん。早く更衣室行きなよ」

「へ？」

間抜けな声で、次の教科を思い出す。

『体育』という文字が頭にうかぶ。

「馬鹿都 」！

都を思いっきり蹴飛ばして、教室を後にする。

なんか、馬鹿でかい悲鳴が聞こえたような気もするけど、放っておく。

「ったく。こんな生活、いつまで」

ここであたしは言葉が途切れた。

『こんな生活』。

今、確かに口にした言葉。この言葉に、背筋が凍るような感触を得た。

同時に、罪悪感も湧き上がる……。

「ごめんね、蒼霞純歌」

空を見上げて呟くあたし。

あたしが地上にいられるのは、蒼霞純歌のお陰なんだ。

正直、こういうことに慣れていない。

あたし達は、いつも戦っていたから。

戦いの中で己を磨き、自分達を極めていったから。

『平和』というものに慣れていないんだ。

「プリメットが、平和じゃなかったわけじゃない。ただ、あたし達は……」

自然と拳を握ってしまう。

空から目が離せない。

続いて欲しいと思う。

地上に平和が訪れるのは当然のことだ。

平和は、必要不可欠の存在なのは百も承知なんだ。

でも。

どこかで何かが起きることを期待しているような自分がいることに
気付いてしまう。

そんなこと、思っではいけないのに……。

キンコーンカーンコーン

思いふけていたあたしを現実へ戻してくれたのは、次の授業開始の鐘の音。

「悪いな、ソニカ……つと遊だ」

「どっちでも俺だから。気にすんなよ秀人」

苦笑しながら都は言った。

薄暗い1 - 1の教室には2人の姿しかない。

「で？どうしたんだよ。時間を止めてまで俺に話したいことがあるなんて」

「ほんとに悪い」

本当ならば2限目が始まっているはずの時間を秀人が止めた。

真剣な顔で『どうしても、話したいことがある』と言って。

が、なかなか話そうとしない秀人は、さっきからこの調子だった。

「おい」

どうした？と彼が秀人に尋ねようとした時、ついに口を開いた。

「遊、ディックにどこまで聞いた？」

間髪いれずに秀人は都を見て続けた。

「ティアラとの関係も知っているのか？」

その眼差しに都は驚き、質問を返した。

自分でも驚くような大声で。

「どついうことだ？なにかあるのか！？」

ティアラとディックは兄妹とは知っている。それ以上に何の関係があるというのだ。

「そうか、知らないのか。お前も」

静かに呟く秀人。

「やっぱ俺しか知らないことなのか」

「秀人、どういうことだ？話すために来たんじゃないのか？」

問い詰めるような都の声。

「
知ってると思ったんだ。もしかしたらって」

悲しげな表情の秀人。

「でも！」

「時期に話す
」

そう言つて姿を消そうとする秀人を都が止める。

「時間まで止めて黙秘か？そこまで話したなら、気になるってのが普通だろ」

「もし拒否したら？」

「……使えるところ？」

1 - 1の教室を冷たい空気が支配する。

「今から話すことを誰にも口外しないと誓えるか？」

「それくらい、わかってる。それくらい重要なんだろ？」

数十分後。都は驚くことしか出来なかった。

「本当のこと、なのか？」

目を見開くしかない。搾り出すことしか出来ない、声。

「花天使にとっては珍しくないことだ」

目をふせ、淡々と答える秀人。

「いつ言うつもりなんだ？」

「まだ、未定だ。このことは俺とお前しか知らない」

「どうして、俺に？」

確かに花天使の名を授かったが彼は、あくまで人間だ。

なぜ、他の花天使に言わず自分にいうのか。

「俺にもわからない」

秀人は静かに消え、再び時間が動き出す。

「だからさあ、あの時は　　って、都も聞いてくれよ。
さっきのこいつのパスについて」

「え？ああ、あの時のか？」

あわてて都は、彼等の思考、映像を読み取り会話を成立させる。

「信じられねえよ」

クラスメートに聞こえないように都はそつと呟いた。

「たっだいまー……て、あれ？」

元気に純歌が帰宅する。いつも、最初に帰宅するのはトーカ。

そして、彼女の作ったおやつを食べるのが純歌の楽しみのひとつ。

しかし

「おかえり、純歌」

出迎えたのは秀人だった。

「佳は？一緒に帰ってこなかったの？」

「何で、ケイと帰って来ないといけないわけ？なんか担任に叱られてみたいだけ」

ブスツとしながらも、教室を覗いたらしい。

純歌らしいと思いながら秀人は笑ってしまう。

「???どしたのさ、シュート君」

「いや、何でもないよ。透香はレモンパイを焼いて、買い物に行った様だ。」

早く着替えて

」

秀人は最期まで言う必要はなかった。

レモンパイと聞いたとたんに純歌は電光石火の速さで着替え、3分後には席にしていた。

「あれ？巫斗じゃん。今日は早かったんだ。演劇部、もうすぐコンクールじゃなかったの？」

透香は、買い物帰りに兄の巫斗に会うと真っ先に荷物を持たせた。

もちろん、重たい方を。

「うわっ。透香、こんな重い荷物よくひとりで」

「他に誰が買い物すると思う？」

にこやかに兄に尋ねる透香。

「……………あは、ははは」

巫斗は演劇部に所属していて、プリンセスと言われている。

顔立ちが少女に近く、体格も華奢な巫斗は、『私立クリメス学園』のお姫様の存在。

彼が入部してから、3位までに必ず入っているのは巫斗の影響が大きい。

妹の透香が並べばクリメス学園が大喜びすることは間違いない。

「明後日の日曜日だよ。台詞はすでに覚えてるし演劇は嫌いじゃない

いからね」

「で、役は？」

「聞くな」

即答する兄を見て、透香はため息をつく。

「まあ、頑張つて」

2人は季節館に帰宅した。

秀人の自室

「パーシカリア・クルル」

言葉と同時に、秀人は紫色の十字架で空をきるとタデの花が一輪現れる。

花は姿をかえて彼の対の存在、クルルとなった。

「うわあい！！久しぶりの、外だあ！！」

クルルは嬉しさのあまり、ピヨピヨはねる。

「クルル……用件を伝えてもいいか？」

クルルは静かにするといふことができないのか…と秀人が頭を悩ませるのは毎回のこと。

NO・10 Top・Secret?! (後書き)

ここにきて都が未だに登場するのがおかしいと思う、Rueです。
当初の予定では、都はこんな役につくはずがなかったのに……

では、又お会いできることを祈りつつ……

Rue

NO・11 コンクールで十字架を（前書き）

全てのものには表裏あり。

表裏がないもの、世に存在せず

あなたは、どうやって表裏を使い分けていますか？

NO・11 コンクールで十字架を

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

水城晶 みずぎ あき 巫斗が通う学校の演劇部部长

セブント・ヒース：十字架を持たない『剥奪されし者』のひとり

クルル・パーシカリア：秀人 ジル の対の存在の。

ルルッルルル……ル！

「 ついに今日がきたかあ」

日曜日の朝6：00。

コンクール当日。

巫斗は気合をいれてリビングへと向かう。

「おはよー。ついに今日だねえ」

と透香。妹は朝食をお弁当のようにして、学校で食べられるようにしてあった。

「助かるよ、透香。ありがとな」

そういうと、弁当を持ち、ドアを開け巫斗は会場へと向かう。

「見に行くからねー巫斗の『シンデレラ』」

という透香の言葉は、兄には聞こえなかった。

「ふーん。ハンスが演劇ね……分かる気がするわ」

季節館の上空にいたクルルが呟く。満面の笑みで。

「さて、どうしようかな」

クルルは心底楽しそうだった。

「み、巫斗が、シンデレラ」

佳がおかしくてたまらない、という感じの笑い声をだす。

「さぞかし可愛いシンデレラになるだろうねえ」

言いながら、密かに想像する秀人。

「ミコなら、みれるだろうね。佳は絶対無理だけど」

はつきり言うのは純歌。

『額に十字架があるシンデレラ』

「さぞかし恐ろしいシンデレラになるだろうねえ」

「私は見たくないな。そんなシンデレラ」

「まず、ありえないから問題ないけどね」

「　　おおまあええらあ……」

佳の性格は『短気』の一言。ここまで馬鹿にされて黙ってる奴じゃない。

「黙って　　うお!？」

佳の足技より一瞬早く、純歌の膝が右腹にくいこむ。

「あんたが黙んな」

にこやかで満足そうな純歌だった。

「相場、台詞あわせするよー」

部長の水城晶が、男子更衣室に入ってきた。

「い、今行きます!」

着替え中だった彼は、慌てて着替えを終了させ、部長の元へとかけしていく。

「相場も着替えてたんだ? やっぱり似合う」

水城は、満足そうに巫斗を見た。今回の彼女は王子役。

巫斗がお姫様の存在なら水城は王子的存在。

2年生の彼女は、真面目で面倒見がよいことから教師、生徒から信頼を得ていた。

「今日は必ず優勝するよ！相場、あんたにかかってるから！！」

「はっはい！ベストをつくします！！！」

熱意に押された巫斗は、反射的にそう言つと水城に『違和感』を感じた。

『部長の目がいつもと違うような』

いつもはもつと力あふれるようなオーラをだし、演劇が本当に好きだということを感じさせる目の水城晶。

声はいつもとかわらない調子をしているのに。目は、そうじゃない。

『目は口ほどにものを言う』という。

今の水城は、まさにそうだった。

いくら声がいつもと同じでも、その意思が見られない目。

「あ、あの、部長？」

おずおずと声をかけてみる巫斗。

「どうしたんだ？ほら、台詞あわせしにいくよ」

その時、巫斗はしっかりと見えた。彼女にとりついている者を。

『剥奪されし者！？』

「剥奪されし者セブント・ヒース……」

流石、秀人の対の存在、というべきか。

クルルは、姿もリーナスも完璧に消し、巫斗の真後ろにいたのだから。

巫斗は見事に気がついていない。

……そして、これは敵にもいえること。

「相手にとって不服なし」

クルルの陰しい声は誰にも聞こえない。

「さつきから五月蠅いわね、ケイ」

「誰のせいだ！あ”？！あざが出来たのはっ！！あ　ほんっと女じゃねえよ、てめーは」

「佳、それは全員に言えることだよ。私達、まだ性別が決まっていんだから」

冷静に指摘する透香。

クリメス学園の敷地内。

巫斗のシンデレラを見に彼等はここにきた。

館を出た時から佳と純歌はこの調子で、道中とても恥ずかしい思いをした透香達。

が、2人の辞書に『恥ずかしい』という文字はない。

「佳、蒼さん。いい加減にしてくれないか？」

おどろをしょいながら都が言った。

「『蒼さん』……？」

「純歌に『さん』つけ……」

佳と透香が笑をこらえている。

肩が小刻みに震えているのが純歌の目に入る。

「……！っさあああい」

はつきりいつて『五月蠅い』純歌。

そんな純歌を見る秀人は悲しげな瞳。

「俺達の、性別……ね」

秀人が雲ひとつない、青空に向かって呟いた。

「どうしたもんな」

巫斗はひとり控え室で悩んでいた。水城部長のことで。

『剥奪されし者、セブントが部長にとりつくなんて』

セブント・ヒース。ユザナと同じ人間を虐殺している者のひとり。

記憶が確かならユザナと一緒に剥奪されたはず。

「あーだーもー！」

よりによって今日とりつかなくても……深いため息をつく。

『皆に知らせるべきかな』

そんなことをぼんやり考えながら、ボーっとしていたはずだったが。

「……場……相場……幕があがる！早く……！」

悩みの種、水城の声で我にかえる巫斗。

考えながら、ついウトウトしてしまったらしい。

時間を見ると、本番2分前。

「なにしてんの！あんたは主役なのよ？自覚ある……？」

「はいっ……！」

そういいながらも巫斗の悩みは消えない。

水城の目は、どんどん死んでいく。

『今は手を出すな。出したら敵の思う壺だ』

自分をコントロールすることで必死の巫斗。

『劇の最中でやるしかない』

巫斗の気も知らず、幕はあがる。

『シンデレラ、シンデレラ!』

『はい、お呼びですか？お姉さま方』

パシヤッ

『お呼びですかじゃないわよ！今日着ていくドレスは出来上がったの？』

『はい。お姉さま方出来上がって』

パシャパシャッ！！

『もちろん、私の分も用意してあるわよねえ、シンデレラ？』

『はい、もちろんです。こちらです』

パシャパシャパシャ…パシャパシャ…………

「トーカ、凄いね。あんたの兄」

小声で隣のトーカに純歌が言う。

「それ言ったら、巫斗が怒るよ？」

答える透香も小声で返す。

先ほどから主役の巫斗が出るたびに、男女問わずカメラを撮る者達。

気持ちはわからないでもない。

巫斗＝シンデレラは可愛い。

透香たちは舞台の最前列。

前後左右からのフラッシュ音はやむことを知らない。

「でも、これほどとは、驚きだな」

パシャッ！パシャパシャッ！！！！

「俺は予想通りだぜ？」

都と佳は本音を語る。

そんな中、沈黙を守りながら継母役の少女を見続ける秀人。

『俺達の、性別、ねえ』

再び彼は繰り返す。

いつ決まるか分からない性別。それが秀人の不安を増大させる。

『いや。今はそんなことはいい。巫斗、今は辛抱しろ』

初めて巫斗に目を向ける秀人は、心の中でそう言った。

カライン、カライン……

『ああ12時の鐘だわ……ごめんなさい王子様』

カライン、カライン……

『待ってくれ』

舞台も残りわずか。ここまでは無事に進行し、もう終章に近かった。

このまま終えたいが、世の中そんなにあまくない。

『 限界だ！ 』

水城の目をみた巫斗の心に火がついた。

今、巫斗の前にいるのは水城ではない。

ただ、観客が気づかないだけ。

気づくはずが無いだけ。分かるのは花天使達のみ。

そのために、こんなことを防ぐために来た。

『 そう言われたら、待ちますわ。王子様。そして私の名は 』

走り去るべき場面なのに立ち止まるシンデレラ。

名を明かさず行くはずの物語。

『 君の名はなんと言っのか？ 』

土壇場でアドリブしたのは、水城にとりついたセベント。

『 シンデレラと申します 』

うやうやしく頭を下げながら言う。

『おやまあ！こんなところで何やってるんだい！？シンデレ
』

継母が口をはさむ。

『お母様こそ……どうしてこちらへ？』

不思議な笑みを見せながら問う。

『お前
』

言葉を失う継母。

『王子様。確かに私はシンデレラと申します。でも役名です。それは、このお母様も同じこと』

しっかりと王子を見るシンデレラ。

『王子様もそうでしょう？水城晶部長……今はセベント・ヒースだけだな』

大切なのはコンクールではない。

水城を生かせることが出来るか、それとも……。

全ては自分達にかかっている。

それが十字架背負う花天使達としての使命、だ。

今舞台上にいるのはシンデレラではなく、相場巫斗。

花天使名、ハンス・A・ポインセチア。

「久しぶりだな。セベント・ヒース」

落ち着いた声を出そうとしても、今の巫斗には無理だった。

怒りの感情がむきだしの声。

「そうだねえ、ハンス・A・ポインセチア」

おどけた声で水城からセベントは離脱する。

「お前に何が出来る？この会場に何人いると思ってるんだ？何人の人質がいると思ってる」

「確かに人は多いけど。剥奪されし者に言われたくないわね」

継母を演じていたクルルの涼しい声。

「私がノコノコ演劇にでるためにすりかわったとでも？」

にこりとするクルル。

「思わないね」

わかりきった声のセベント。

「なら話はいいたよな」

ゆつくりと壇上にあがるのは佳。

「決着ついたら、ユザナのこと話してもらつたよ。」

セベントの背後から話す純歌。

「君達に、僕が倒せるとは思わないな」

冷たい目で微笑むセベント。

舞台上に冷気が漂う。緊張がはしる

『ここから早くでたい！』

『自分だけでも助かるんだ！！』

観客のわめく声は両者の思いをきっぱりわけた。

セベントは楽しんでいる。この状況を、心の底から喜んでいる。

人々の声を。

そしてそれに対して喜びをえていた。

対して巫斗達は怒りをあらわにする。

セベントに対して。

この状況を作った張本人は笑って楽しんでいる。

源はセベント。

人々の声、心の声の源はセベント・ヒース。

舞台上の彼等の動きは同時だった。

「『黒煙』」

静かな声でセベントは逆十字を空で切る。

巫斗達は、それぞれの十字架の傷を瞬時にきる。

もう、舞台上にいるのは巫斗達ではない。

舞台上に立っているのは十字架持つ者の花天使達と剥奪されし者セベント・ヒース。

「黒煙で全てを闇に包むなんて。ほんと汚い手ばかり使っわね」

呆れた声の主はティアラ・ジブソフィラ。

軽く2mある白い十字架は恐ろしいほど細く、青白い光を放っている。

「ま、それしか能が無いからな」

クリス・サンフラワーの関心の無い声。黄と茶の色が混ざった十字架。

「それしか能が無いってクリスと同じ？」

のほほんと余計なことを言うのはクルル。紫色の十字架を手にしていた。

「『黒煙』をあまく見ないようにね。僕が一般的な『黒煙』を使う

とは思わないだろう？」

全てが闇に包み込まれた中、彼等を馬鹿にしたような言葉は、すでに勝負はついたととれる言葉。

『黒煙』は普通辺りを暗くするだけで攻撃的な技ではない。

リーナスの消耗も激しくない。

「私達を馬鹿にして……っ」

しだいに呼吸をするのが苦しくなるクルル。

それは花天使一同、同じこと。

「くっ！」

ティアラが顔をゆがませる。

突然の痛み。

己の十字の傷が痛む。見えない誰かにあたえられる衝撃。

切り刻まれる傷跡。

ポタッ、ポタッ……

静かな闇の世界でこんな音をだすのは……………血。

「っセベント、てめえ」

肩や腕にあるハンス達とはかく、クリスの傷は右の額にある。

どの程度のリーナスで切りつけたのかわからない。

彼等の瞳に映るのは闇ばかりな

のだ。クリスの症状がわからない。

ポタツポタツ…………ポタツ…………

次第に早くなる血の音。

『集中しろ。奴の気配を…………感じる!』

ハンスはクリスなら大丈夫だと言い聞かせて、セベントの気配を読む。

『黒煙』は見えなくするだけ。『風』で吹き飛ばし、攻撃するのは簡単。

今の痛みも苦しさも全てセベントがあたえているだけ。

『あまくみるな』とは『黒煙』ではなくその後の自分の攻撃を言っていたのだ。

そして、ハンスは吹き飛ばし、ダメージをあたえることが出来る確率が高い。

彼は主に『風』を使う者。

リーナスを消しても、集中すれば気配が伝わる。

『風』によって、運ばれる。

全神経を十字架にかたむけ、彼は『よむこと』に集中しようとしたが。

『早く…早く！』

今の彼には仲間を案ずる気持ちと水城の容態が気になってしまっために

すんなりと『よむこと』が出来ない。

『なんとかしない、と』

汗がつたう。

『突破口が、開ければ！俺にもっと……力があれば！…！』

歯ぎしりするハンス。

「あっけなさすぎだね。つまらないな」

クスクス笑いながらセベントが言う。

「なんでユザナは負けたのかな？不思議だねえ」

姿が見えない敵。

『こんな奴に、負けるか！』

新たな意思が芽生える花天使達。

『ユザナ』の名前で戦闘意識が強まった。

「『油断禁物』といえますよね？」

誰の声でもない、よく通る声が響き渡る。

セベントは振り返ると彼の目に映ったのは

「ハンス！？」

思わず声に出し、動揺するセベント。

『違う……奴はあそこにいる』

否定しながらも心に隙が出来る。

その隙を突いて目の前の者は、セベントに言う。

「反逆者……いえ、剥奪されし者にとっては、どうでもいいことなんですネ」

同情と悲しみが入り混じった声。

「お前は誰だ！？そんな目で見るな！！」

セベントが声をはりあげる。

自分が反逆者という道を選んだのは、十字架を剥奪され、周りの視線が痛かったから。

絶えられなかったんだ。あの視線に。

その悔しさを人間を虐殺するということではらしていた。

目の前の者が歌うように話し出す。

「『コインに裏と表があるように

光が目立つには闇が必要のように

上がいれば下がいるように

全てのものには必ず対となるものが存在する』って忘れてしまったんですか？『炎のこども』！」

目の前の者が自分の周りを火の海に変えようとしている。火は自身にもついていく。

「ちっ！『水の　　』」

「『風弾』！！！」

セブントより早くハンスが風という風を集めて打ち込んだ。

『風弾』によって火は炎となりセブントに襲いかかる。

舞台上に光が差し込む。

「明るくなれば、こつちのもん！『氷のパロス』！」

ティアラが炎の塊となっているセブントに氷の弓を放つ。

「燃えるのが嫌なら、体内から凍りつきな」

冷たい視線で言い放つティアラ。

「あゝあゝ……」

声にならないセブント。

「さっきの礼として、お前を成仏させてやるよ」

まだ血がとまっていないクリスが十字架の先端を向ける。

「『殺し』を私達はやってはいけない。そんなことは百も承知よ」

『殺しちゃいけないだろうが』ということを目で訴えるセベントに対してクルルが感情の無い声を出す。

「俺達が殺すのは原因となる『源』だけ。そして今回の源は『セベント・ヒース』お前だよ」

ハンスがゆつくりと告げる。

そしてセベントの喉元にある逆十字架の印を懇親の力で突き刺した。

「汝、セベント・ハース。汝の十字架、我ハンス・A・ポインセチアが引き受けよう……『クレスト』」

ハンスが成仏すると同時にセベントは消えていく。

今、彼等の目の前にあるのはセベントの『魂』の花『じゃのめのエリカ』のみ。

この花は『生命力』や『リーナス』の源であり、『魂の形』とされている。

クリスが『じゃのめのエリカ』に触れると簡単に消えた。

「これでセブントはクレスト……成仏したんだね」

小さな呟きは誰のものかわからなかった。

NO・11 コンクールで十字架を（後書き）

なんだかんだでミコで遊んだ気がするRueです。

彼は外見がお嬢さまなので、遊びがいがあるんです。

そして、佳は……やんちゃ坊主。

決して女の子には変装できません。

では、又お会いできることを祈りつつ……

Rue

NO・12 メッセージ……（前書き）

安堵した直後に、谷底へ落とされる気分をあじわったことはりますか？

NO・12 メッセージ……

登場人物

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日 佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都 遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

水城 晶 みずき あきり 巫斗が通う学校の演劇部部长

セブント・ヒース：十字架を持たない『剥奪されし者』のひとり

ユザナ・H・ハーブ：謎が多い。ディックをとて愛している。

リリー・A・ポインセチア：巫斗 ハンス の対の存在。

「終わったみたいだな」

「会場の人達は皆無事だよ」

セブントとの戦闘が終わってしばらくは誰もが口を開かなかった。

ひたすら静寂。

その静寂を破ったのは、秀人と透香。

2人は会場にいた人々を非難させていた。

セベントが人々に危害を加える前に。

そして、人々の記憶を消してここにきた。

「ああ、終わった」

とハンス。

どこかやりきれない、そんな口調でハンスは言いながら『相場巫斗』へと姿を変える。

「……セベントの気持ちをきいちゃうと、ね」

ティアラから『蒼霞純歌』となりながら、珍しく静かで小さな声。

彼等には聞こえた。

セベントの想いが思考が嫌でも伝わってきた。

『周りの目線』というのは誰でも気にすること。

セベントは『剥奪されし者』とレッテルを貼られた時から、『周りの目線』を肌で嫌というほど感じてきた。

その八つ当たりが、彼の出した出口が『剥奪されし者』の集まりである『反逆者』。

行為は断じて許しがたいが、『剥奪されし者』となつたのは一存にセブントのせいとはいえない。

ユザナが自分の物にするためにセブントに何人も殺させるように操つたのだから。

プリメットでは皆知っていることだが、証拠がなくセブントは『剥奪されし者』となつた。

「もう、『クレスト』した奴のこと考えたって仕方ねえだろ」

クリスこと、『向日佳』が透香に治療されながらぶつきらばつに言う。

「……かもしれないけど」

巫斗が歯切れ悪く返事を返す。

彼は心が優しい、優しすぎるのかもしれない。

そんなところが、武器であり弱点でもあるのだが。

「みこちゃん、部長のこと忘れてるよ」

巫斗をグイグイ引っ張る少女の名は『リリー・A・ポインセチア』
巫斗の対の存在。

セブントに戦闘中話しかけていたのは彼女だった。

「……部長！大丈夫で」

急いでかけより、水城に声をかけたとたん、巫斗は言葉を失った。

「みこちゃ　　兄さん？」

透香が不審に思っただけでいい

「純歌、『氷の柩』を今作るリーナスはある？」

水城に視線をおとしたまま透香が尋ねる。

「へ？どつたの？？」

「さつさと作って！んで超特急で季節館と一緒に連れてくよ……！」

有無を言わせぬ透香の声。

未だに言葉を失ったままの巫斗。

いわれるままに作ろうとした瞬間、水城部長から異臭がしてくる。

気が遠ざかっていく……

ゲシッ！

思わず踵落としをまともにくらう純歌。

おかげで目が覚めた。覚めたのだが。

「ったいなあああ！ケイ」

頭をさすりながら抗議する純歌。

「だったら早く作れよ『氷の枢』。お前、気、失うところだったろーが！」

ガルルルルと喧嘩モードに入る2人だったが

「は・や・く」

につこり透香スマイルに純歌は白旗を揚げざるおえない。

数秒後、水城部長も連れて季節館に戻る花天使達。

「で？どうしてこんなことを？？トーカ」

口火を切ったのは純歌。

「のど元」

ようやく巫斗が言葉を取り戻し、答える。

言われたとおりに柩の中を覗き込む一同。

「ちょっと　　どついう……」

息をのむ純歌。

「な・なんで、あるんだよ」

動揺する佳。

水城部長ののど元には、はっきりと『逆十字架』が刻まれていた。

『剥奪されし者』の印と全く同じ逆十字。

「　　メッセージ……か」

秀人は確信に満ちた声で、そう言った。

「フフ。気づいたかしらあの子達。」

楽しそうに冷笑をうかべる少女。

「気づかないと楽しめない。そう思わないか？ユザナ」

闇の剣をもて遊ぶ少年。

「2つの性を持つてるのは、あの子達だけじゃないわ……ねえ？セベント」

赤目を彼の方へしっかりと向けてユザナは言った。

「正式に『男』に決まったのか僕は」

少女の名はユザナ・H・ハーブ。

そして、ユザナの視界に入っている少年は確かにセベント・ヒースだった。

「どう動くかな、今後が楽しくなるといいが」

ユザナでもセベントでもない少年の声。

少年の後ろには『四葉のクローバー』が掲げられていた。

そして、少年は横に新たな花を掲げる。

その花は『なのはな』

「これで魂が2つになったな」

満足げに少年は呟く。

『四葉のクローバー』はデッキ・クローバーの魂。

『なのはな』は水城晶の魂だった。

「私達だってプリメットの住人……だから存在する対の存在。でも、それをどう使うか、なんて私達の勝手。

だから躊躇わない……使い方は個人の自由。さあ、どうでてるの？十字架背負う花天使達さんは」

ユザナの赤と黒の瞳が不気味に光った。

「『メッセージ』?!」

秀人の一言でリビングは騒がしくなり始める。

「ちよっ、ちよっと！秀人？どんなメッセージがこめられてるって
いうんだよ」

巫斗が早口でまくしたてる。

他の者も同意見だった。

「いくら逆十字架が水城さんに刻まれてるからって」

「どこからその自信がでてくるんだ？」

らしくない、という純歌の声と、なんでそうなる！といったげな口調の佳の二重奏。

「根拠は？」

秀人の発言に驚きながらも冷静に、ゆっくりと問う透香。

はつきりと秀人の目を見て、瞬き一つしない彼女。

対して秀人は目も見ず下を向いて口を開こうとしない。

ボンボンボンボンボンボンボン……

6時を知らせる時計の鐘。

「明日、話す。待ってくれるか？」

やつと声を出す秀人。

この声は透香だけでなく全員にむけられていた。

「了解」

透香がそういうと他の面々も自室へと向かう。

「おい、遊。部長さんを運ぶの手伝ってくれないか？」

唐突に秀人が都に呼びかける。

「シユート君、何処に運ぶの？」

コテと首を傾げながら純歌が聞いた。

「ディック兄がいるとこ」

あっさり秀人が答える。そして彼は続けた。

「純歌達はこなくていい」

きつぱりと断言する秀人は別人のよう。

「なんで？兄さんのとこ、行った事ないのに！あたしは……兄妹なの？」

思わず声をあらげてしまう純歌。

記憶を取り戻しても、純歌だけが会ってない。

会わせてもらえない。

「尚更だ……」

秀人は悲しげな声を純歌に向ける。

「明日、全員で学校を休むぞ。メッセージに関しての話があるし」

秀人はここで一度言葉を切って純歌をチラリとみる。

「なにより、もう言わなきゃならない気がするしな」

「あー、だから俺に手伝わせるのか」

都が『分かった』という声を出す。

「分かってもらわなきゃ困る。じゃ、な」

苦笑いしながら秀人と都が姿を消す。

理由が飲み込めていない花天使達を残して

「へえー……ここが」

都がイメージと違うという声を出す。

「意外、だろうな。俺も最初はそう思ったよ」

ここはディック・クローバーの『外見』だけが安置されてる場所。
通称、『眠る花』といわれている。

「このへんでいいか」

「だな。お久しぶりですね、ディック」

氷の柩をディックが眠る、紅の柩の横に置く2人。

都はディックに話しかけ始めた。

そんな都を見、秀人が尋ねる。

「なあ、部長さんは何の花だと思うよ」

「は？花？？」

意味がわからない、という都の口調。

「部長さんの魂はないんだぜ？この中に」

「なん
」

みなまで言わせない秀人。

「多分、ディック兄を……」

目を合わせずに言う秀人。

しばしの沈黙を守っていた都が口を開く。

「だから、言うのか」

「もう、限界だろ。犠牲者を増やすわけにはいかない」

目を伏せ、秀人が答える。

「そうだけど」

「行くぞ、遊」

半ば強引に都と秀人は姿を消した。

「あらあら、もう『見えなくなった』のかしら。ジル・パーシカリ
アは」

眠る花に突如、姿を現すユザナ。真下にはディックの『外見』が置かれている。

「明日は学校を全員で休むそうだ」

ユザナにそう教えたのはセベント・ヒース。

「あなたのことも『見えない』なんて……ジルも落ちたものねえ。

『魔術師』の異名がないてるわ。昔は、いろんなことが『見えていたのに』」

含み笑いをするユザナ。

「明日、ここに全員来るのなら」

ユザナは言いながら、セベントを見上げる。

「ああ。邪魔者がいないということだな」

感情のない声でセベントが答えた。

かすかに微笑しながら。

「会いたかったわ。ディック」

ユザナは愛しそうにディックの顔をなでる。

「私は貴方のもの、貴方は私のもの……そう、決められているのよ」

ユザナはそう言いながらディックを抱きしめた。

夜がふけていく。

月が見え、星が輝き始める。

そして、あっという間に太陽の出る時間となる

NO・12 メッセージ……（後書き）

正直、ユザナ大嫌いです。というか、かいていて気持ちが悪くなったりするのです（苦笑）

大抵、モデルを決めて話を書くのですが、やっぱり嫌いな人をモデルに使うのは心臓に悪いですね……

では、又お会いできるのを祈りながら……

R u e

NO・13 真実という名の詩（うた）（前書き）

あなたは全てを通し出来たら気持ちいいですか？

愛する人が手に入らないと知った時、あなたは諦めますか？

NO・13 真実という名の詩(うた)

登場人物

蒼霞純歌 あおがすみじゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日佳 むかひけい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおでしゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいばみこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやまとおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都遊 みやこゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

水城晶 みずきあき 巫斗が通う学校の演劇部部长

セブント・ヒース：十字架を持たない『剥奪されし者』のひとり

ユザナ・H・ハーブ：謎が多い。ディックをとて愛している。

イングル・ジプソフィラ。(晴夜)。ティアラ(純歌)の対の存在。

レミカ

ギゼル

カチャカチャ……カチャ……

「 ケイ、それ頂戴」

「 え……あ、ああ」

佳は純歌にイチゴジャムを渡す。

「巫斗、おかわりする？」

「あ・ありがと。頼むよ」

コーンスープのおかわりを頼む巫斗の皿を持ち、スープを注ぐ透香。季節館の住人の朝は、珍しく静かに迎えられた。というより、ひとりひとりの空気が重い。

誰かがため息をつく。

誰かがスープをこぼす。

誰かがパンを落とす……。

皆、落ち着きがない。

落ち着けるはずがないのだ。まさに今の住人達は『心ここにあらず』である。

皆の頭の中には『秀人の根拠』ただ、それだけで頭の引き出しはいっぱいだっただ。

時間が迫っている……秀人の話を聞く時間が。

ハナシヲハヤクキキタイ。

ハナシヲキキタクナンカナイ。

そんな言葉が全員のあたまで、グルグル回る。

「行くぞ」

不意に秀人の声がして我にかえる住人達。

「行くつて……？どこに？」

純歌が尋ねる。

それに対して立ち止まり、純歌を見ずに彼は言う。

「純歌がずっと会っていない人の所」

シュート君に目隠しをされ

あたしは何も見えないままその場所へとたどり着いた。

行きたかった場所であり、会いたかった人の眠る場所。

噂にしか聞いたことが無かった場所。

『眠る花』に、あたしは……あたし達はいた。

「さて、説明しようか。透香は疲れているようだし」

「秀ちゃん、皮肉のつもり？」

トーカは方眉を上げてシュート君を見る。

その目は充血していた。昨夜、一睡もせず考えるだけ考えたのだろ
う。

彼女はそういう性格だ。

「論より証拠。全員、見てみるよ。部長さんの逆十字」

水城部長の逆十字を再度覗く。とたんに誰かが息を飲む。

「色が、濃くなってる？」

「大きさも　　違わねえか？」

巫斗と佳が意見を交し合う。

「そして『魂』がない。ユザナの手に落ちたと考えた方がいい。

水城晶の魂の花である『なのはな』が」

口々に意見を出す中、シュート君が口をはさむ。

その言葉に言葉を失ってシュート君の言葉に耳を向ける。

視線に耐えられなくなったのか、シュート君が話し始めた。

「俺は『見える』ということをおぼれたのか？昔はコントロールでき
ず、無意識に……見てたんだ。　　全て……」

一言一言にシュート君の辛さが伝わる。

プリメツト時代

まだ幼い頃のこと。彼はなんでも言い当てて、あたし達を驚かせた。

『ジル、凄いね！何でも分かる』

『ホント外したとこ見たことねえや、お前天才だな』

『ジル、ジル 次は私とハンスのこと当てて 』

あたし達は面白かった。

彼の力を見る度に『凄いね』と繰り返していた。

決して悲しげな顔なんてしなかった。

だから気づかなかった。背負っている『重み』に。

要らない能力。

好きで持つて生まれたわけではない能力。

見たくも無いもの。

見てはならないもの

第三者からみて『面白くても』彼にとっては『楽しくない能力』。

彼は自分の『透視能力』が大嫌いだったんだ。

それを今回、あえて使った。

花天使の役目として。

「大丈夫？ 秀ちゃん」

「そりゃ、大丈夫って言うに決まってるだろ よ」

心配そうに尋ねる透香と、当たり前前の返事を代弁する佳。

本人は、苦笑いするしかなかった。

「話を戻そう。俺には見えるんだよ、その気になれば何でも、さ。でも、昔は違う。コントロール覚えたのだって3年前にようやくだ」

シュート君の視線が、あたしに向けられる。

「純歌。いやティアラ・ジプソフィラ？ディック・クローバーとの関係は？」

思わずこけてしまうような質問。

「兄妹関係だつてことは」

百も承知のはずだと言いたかったが、シュート君が遮る。

「違うんだよ、ティアラ。全てを思い出しきれていないか、ディックが消したんだ」

「そんなわけ」

「あるよ。ティアラ。現にお前は恋人関係なことを忘れてる」

シュート君の眼差しは真剣だった。そして彼は続ける。

「ユザナは……ユザナ・H・ハーブは、ディックの対の存在なんだよ」

雷が落ちた
眠る花に。

あたし自身に。

「なら、あたしは」

震える声。

震える身体。

シュート君の告白に頭の中が真っ白になる。

『あたしとディック兄が恋人関係?! ユザナがディックの対の存在!?!』

何かの間違いだといってほしい。

冗談だと笑ってほしい。

「嘘じゃない。残念ながら真実だ。俺は『見てしまった』から」

彼の視線はディック兄に移った。

シュート君の透視能力はお墨付き。

コントロールできないときに『見えてしまった真実』。

「ディックは反逆者になりたくなかった。だから逃げ出した。ユザ

ナ達から」

彼を見ていると何も嘘をついていないのだな、と感じてしまう。

「ようやくわかったよ。ユザナがディックの魂をクレストしないわけが」

「……ユザナはディックを自分のものにしたいんだね」

天を仰ぎつつトーカが言うと、静かに後を継ぐニコ。

「花天使がクレストした魂は、どこにいくかわからない。

もし他の花天使に触れたら、その魂は瞬時に『花』と化す

そして、幾つか集まれば『死者を蘇らせる』ことが可能となる。

そのためにはクレストした魂と蘇らせたい者の魂が必要だよな」

見回しながらシュート君が話していく。

「自分の操り人形にする気が……」

あたしは目をふせた。

『蘇らせるため』に使われた魂は当然、蘇ることは無い。

天国にも地獄にも行くことは無い。

関わった人達も記憶が無くなる。

「部長は下手すれば死ぬかもしれないってことか」

齒をくいしばりながらミコは言う。

「ねえ、都は驚かないの？この事実」

突然、トーカが都に声をかけた。

事実、都は一言も喋ってはいない。

「知ってたのに驚けてのが無理な話だ」

落ち着いた都の口調。

この言葉に多少驚く、花天使一同。

「なんで俺達に先に言わない！」

「俺達、信用されてないの？」

「うわっ秀ちゃん、酷い」

シユート君を集中攻撃。壁際に追い込む。

あたしだけはディックの眠る枢に屈む。

「ユザナが兄さんの対の存在だなんて信じられないです」

自然と口調が敬語になってしまった。

ディックに触れようとした時、声がした。

あたし自身の中で。

『ティアラ、おいティアラ・ジプソフィラ!!』

対の存在、イングルの声。またの名を『晴夜』（はるや）という。

かなり慌てている様子だ。

あたしが彼を落ち着かせるように問おうとしたとき、彼の怒鳴り声が全身に響きわたった。

『気付かないのもたいがいにしろ！外でユザナ達がすき放題やってるぜ!』

花天使一同が眠る花に行く同時刻。

彼女達は現れた。

「へえー見晴らしいわね」

「そうだな、そして人が大勢いる」

冷笑をうかべるユザナ・H・ハーブ。

そして満足そうに答えるセベント・ヒス。

2人は季節館の真上にうかんでいた。

季節館は、とても広い。

が、周囲にも同じような家が並んでいる場所。

つまり、人間が大勢いて魂集め最中のユザナ達にとって都合のいい場所だった。

「早く始めましょ」

何処から始めようかと迷いながら、明るい声でユザナが言った。

「ああ、あの2人に大目玉をくらうのは勘弁したいしな」

落ち着いた声でかえすセベント。

2人は見えるはずなのに、普通の人間には見えない存在。

だからこそ簡単に殺し、魂集めができる。

鬱陶しい花天使達もいない。

「『死者を蘇らせる』にはクレストした魂が必要。でも」

ユザナが瞬時に姿を消す。

「私には『魂を奪うリーナス』がある！」

彼女はひとつの家に姿を現した。

住人は突然の訪問者に気づくことはない。

「朝ごはんできたわよ！おりてきなさい」

右手にハムエッグを乗せた皿を持つ主婦。

「……おふぁよう、ママ」

寝癖が目立つ少年が降りてくる。

「うわ！久しぶりのハムエッグだあ」

テンションの高い少女。

ユザナは平和な家族を見て虫唾が走った。

「役に立ってもらわよ……『ガミレグ』」

主婦の背後から体内に手を入れる。

「　　まずはひとつめ」

ゆっくり主婦から手を抜くとデージーが握られていた。

魂を抜かれた主婦は口ウのように白くなり、のど元には逆十字が刻まれていく。

「ママ？どうし　　」

少女はみなまでいえなかった。

「お姉ちゃんとママなにやって　　」

少年も同じだった。

3人の人間は魂を奪われた。のど元の逆十字がしっかりと刻まれる。

「デージー、ネムノキ、フリージア。ありがたく頂くわね、魂を」

答えることのない人間の姿に感情のない声で彼女は言った。

そして次の獲物の元へと向かう。

「ユザナはいいよなあ。『魂を奪うこと』が簡単にできて」

ユザナが魂を奪っている時、セベントは自ら研究して作った『黒煙』を町中に広めていつていた。

元気だった雀が、猫が犬が……自然が様々なところで死んでいる。

人間はふらつく程度でも、小さな動物や自然は黒煙の餌食となっていく。

「僕の『黒煙』は成功のようだな」

どこもかしこも暗闇に包まれ、威力を試した彼は嬉しそうに表情をほころばせる。

「さて、僕も盗らせてもらおうかな」

セベントはゆっくり地上に降りる。

そこでひとりのサラリーマン風の男に会った。

男はふらつきながら、セベントに声をかける。

「や、あ君……身体がおかし、くな……」

「僕が作ったんだから、おかしいわけじゃないですか『ガミレグ』」

にこやかに話しながらセベントは男に『黒弾』を打ち込み、魂をぬきとる。

男は全身黒くなったが、逆十字はきつちりと見えている。

「アネモネ？似合わないなあ」

セベントは歩きながら獲物を探す。

「花天使達は、この事態に気づくかな」

クスクスと笑いながら『黒煙』に『ガリナク』を混ぜ、風に運んでもらう。

「この前みたいには、いけないよ。ハンス」

笑みをうかべながら呟いた。

プリメット 反逆者の住む街 裏街道

「ギゼル〜レミカも魂集めしたかったよう」

甘えた声でレミカはジタバタ暴れた。

炎のように赤いワンピース丈を大雑把に短く切り、当たり前のように身につけている少女 レミカ。

「 レミカ、その発言は俺が覚えている限り、この10分間で253回目だと思うんだが」

ギゼルと呼ばれた少年は、うんざりとした顔つきでレミカに告げる。

「だってーレミカ行つた事ないんだよう？ だいたいなんでセベントに行かせたわけ？」

不満という文字がレミカの顔に書いてある。

「レミカ……。顔に書いてある文字、消せよ」

ため息交じりのギゼル。

「いいじゃないか。セベントはハンスを目の敵にしてるしな」

ギゼルは静かにレミカに返答したが

「ギゼルどこに書いてあるのさあ」

本人は一生懸命、文字を探していた。ギゼルに言われた通りに……

「1、2、3……36個」

「それに私の42個たして、78個か。いいんじゃない？」

セベントとユザナは合流し、魂の数を数えていた。

「もう、ここには用はないわ。この街は死んだも同然ね」

ユザナが含み笑いをしながら発言する。

この街に生氣を感じない。

皆、様々な格好で固まっていた。

ハムエッグの皿を持った人。

自転車に乗ろうとした人。

お金を出そうとしてる人。

トイレに駆け込む男性。

「面白い光景だね、これは」

セベントが笑う。

闇に包まれた、この街で。

NO・13 真実という名の詩（うた）（後書き）

何気にレミカは気に入ってます。動かしやすいですし。
私にしては珍しい、モデルのない少女です。

それにしても、もうちょっとシリアスな場面を作りたい（ため
息）

では、またお会いできることを祈りつつ……

R u e

NO・14 飛び交う疑問符・アヤメの過去（前書き）

死者が蘇生するのは、嬉しいですか？
それとも、哀しいですか……？

NO・14 飛び交う疑問符・アヤメの過去

登場人物

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

ケイン・カメリア：セラフィンの対の存在

清水連 しみず れん：純歌のクラスの委員長

セブント・ヒース：十字架を持たない『剥奪されし者』のひとり

ユザナ・H・ハーブ：謎が多い。ディックをとて愛している。

「!？」

突然リーナスを感じとり、その方向に身体を向けるセベントとユザナ。

先ほどまで笑っていた表情はそこにはなかった。

敵のリーナスが近くに感じる。リーナスを高め、闇の中でセベントが見つける。

「……意外と早かったね、花天使の諸君？」

微笑しながらセベント。

「でも、魂はもらったわ。残念でした」

悪戯っ子のように舌を出すユザナ。

ユザナとセベントは背中合わせに攻撃隊態勢をとりながら、姿が見えない敵　花天使達に話しかける。

「……なんとなくだるいし、ぼけーっとさせるのやめてくれない？」

ティアラが悪態をつく。

「やつぱり、お前あの時

『身代わり』にしたな？セベント」

隣にいるハンスの怒りの声。

「なあんだ、ばれたのか。……クスッ」

微笑しながら答えるセベント。

「たくっ快晴だったのに暗くしやがって！」

「五月蠅いよ、クリス」

セラフィンとクリスはユザナの方向を向いていた。

「てつきりティアラが来ると思ってたわ」

見えない敵、ユザナはその場にいる全員に聞こえるように言う。

「うる……さい黙れ！ユザナ！！」

「あらあら、元気ねえ。ディックの彼女、ティアラ・ジブソフィラ。

貴女はまだ性別が決まってないでしょう？いい加減に」

「決まってよーが決まってなかるーが関係ない！」

兄さんの名前を気安くよぶな！」

ティアラが闇の中で傷跡をきり、『十字架背負う花天使』の証である十字架を取り出し

「『風槍』！」言いながら十字架で空をきる。

『黒煙』で闇に包まれていた街に一条の光がわずかにともる。

「ハンス！」

「『傷の……』?!くっ！」

ハンスの身体は水でも被ったようにぬれていた。

息もあらい。

「?!ハンス！」

ティアラの集中が切れ、一条の光が失われる。

『風槍』は使った者の集中力が切れると効果をなくす技。

「ハンス!ハンス！」

ティアラがハンスに呼びかけるが声は聞こえない。が、彼女もまた頭が朦朧としていた。

「ハンスに何したの?セベント」

セラフィンが静かに呼びかける。

「彼が得意としている属性を、利用させてもらったただけだよ？」

セベントは軽い口調で答えた。

「『風』が『ガリナク』を運んでいるわけ、か。通りでハンスだけ異常にきついはずだよ」

姿が見えなくても『兄を苦しめる輩は容赦しない』というのがセラフィンの信念。

仲間が『ガリナク』の混じった風にやられているのに彼女だけが平然としているには理由がある。

彼女が主に使う属性が『草』であり、薬品を作らせれば天下一品だからだ。

もつと言えば、彼女はツバキに宿りし者。ツバキは生命力に満ちている花。

この程度のガリナクでやられるセラフィンではない。

「風を通じてハンスを集中攻撃するとはね……」

小さく呟くと同時に彼女はクリスの隣から姿を消していた。

ぐはっ！！

「セベント？」

暗闇の中でセベントを呼び振り返るユザナ。

同時に隙が生まれる。

がはっ！……ぐっ！！！！

「私のリーナス、よめなかったの？残念ね」

セベントは左肩から右の腹部にかけて深く切られ、ユザナは以前ハンスによって切られた胸部の傷を開かれていた。

2人とも出血が止まることはない。

「静槍流『タスキかけ』に『一文字』。深さは少なく見て10cm
つてとこかしら」

落ち着いた声でセラフィンは言った。

怒りに満ちた目で。

音のなき技、静槍龍。自らの手だけが武器と思えない切り傷をうみだす流派。

「リーナスを」

「ええ、静かに高めていたわ。ケインに手伝ってもらってね」

そう言ってもう一度、構えをとるセラフィン。

「何度も同じ手にのるかっ！」

間一髪、ユザナは静槍流から逃れた……が！

「油断大敵ですよ」

「！な！！！」

ドス！！

ユザナの身体を中心に直径20cm弱の円が背中に出て上がる。

「どうも。ケインです。僕の『円弾』はどうですか？」

にこやかに問うケイン。

今の衝撃でユザナの懷から魂が落ちていく。

このまま誰も邪魔しなければ本来の持ち主に自然と戻ることは間違いない。

「『風のざわめき』！」

クリスとハンスが同時にくり出す。

みるみる闇が消えていく。

それは、光が差し込んでくることを意味している。

「『魂の集い』」

ほとんどが本来の持ち主に戻っていく中、セブントが最後の力を振り絞る。

「しまった！」

セラフィンとケインの声が重なる。

数十個の魂がセブントの手に収まった時

「お前にはもう、身代わりにできる奴がない」

冷淡な声がセブントの真上から聞こえた。

「そうだな」

力なく言うセブント。否定せず、当たり前のように肯定する。

以前、セベントは対の存在を犠牲にし、ハンスのクレストから逃れた。

だから、『男』としてここに生きている。

「汝、セベント・ヒース。汝の十字架、我、ハンス・A・ポインセチアが引き受けよう……クレスト」

ハンスの十字架が完璧にハンスの逆十字を貫いた。

『蛇の目のエリカ』が宙を舞う。

そして落ちながら原型を完全に無くした。

「セベントだけが敵じゃなかったはずよね」

ユザナの高笑いするような声が響く。

彼女の手には数十個の魂が抱えられていた。

出血は止まる気配がない。

「とりあえず出直すわ……ごきげんよう」

「待て！ユザナー！！」

ティアラの叫びも虚しくユザナは一瞬で消えうせた。

「……さん。蒼霞さん、移動しないの？」

1 - 1の委員長、清水^{しみず}連^{れん}があたしに声をかけてきた。

「……………ありがとう清水」

かなりの時間をかけて返事を返す。

もう5時間目だったのに、未だに数時間前の会話があたしを縛り付けてくる。

「嘘だといってほしい」

あたしは窓越しに見える青空に向かってポツリと言った。

季節館リビング

「『性別が決まっていない』から！？ユザナだって同じじゃない！

『殺すこと』が私に出来ない！？ふざけんじゃ」

「残念ながらユザナは『女』だよ。純歌」

静かに秀人が口をはさむ。

「どうして!？」

ものすごい剣幕で怒鳴る純歌。秀人は動ぜず、小さく首を振りながら言った。

「ユザナは……ディックの対の存在『シーナ』なんだから、当たり前だろ」

静まりかえるリビング。

ユザナ・H・ハーブ「シーナ・クローバーという一言で。

皆、動きが止まってしまう。

そう、ディックとシーナ……ユザナというべきか。

2人は完全に別行動をしている。別行動をし続けている。

それが意味するのはただひとつ。

今のディック・クローバーは『男』で、ユザナ・H・ハーブは『女』。

対の存在は、常に男女の組み合わせ。別行動をしている時は、必ずひとつの性別になるに決まっている。

「そのために……それを確かめるために戦闘に加わらず、ディックを守ると同時に『透視』してたの？」

一言一言をかみしめるように尋ねる透香。

「よく見えたよ。間違いなく、ユザナ＝シーナだ」

ここで秀人は純歌を見る。

「それでも、本当に純歌に殺すことが出来るのか？ユザナを……ディックの対の存在を」

その迫力に純歌は返す言葉が出なかった。

その時の純歌に出来たことは、歯を食いしばり、右拳をテーブルにぶつけ、テーブルを破壊することだけだった。

「蒼霞さん！質問に答えなさい！」

教師の怒鳴り声で我にかえる。が、答えれる言葉はただひとつ。

「聞いてませんでした」

回想してるあたしに、授業を聞けというのが無理な話ではないだろ

うか。

「何とか答えなさい！」

教師の雷が落ちる瞬間、

「蒼霞さん、調子が悪いみたいで……」

目を見張る教師。

声の主は清水だった。

「すみません、昨日倒れたんで、聞いてませんでした」

我ながら下手な演技だと思いつつ、調子をあわせる。

「まあ……それなら……。もう大丈夫なの？」

ころつと態度を変える教師の言葉と同時に授業終了の鐘が鳴る。

すぐに、あたしはお礼を言いに清水の下に駆けつける。

「清水、さっきはありがとう」

「『倒れた』のは『嘘』でも『調子は悪い』だろ？」

にやっと笑う清水。

あたしは清水が何をいわんとするか想像がつかなかった。

「おい、純！帰るぜ」

下校時刻になり、ケイが迎えにきた。

「あんたってホント元気よね」

思わずため息をつく。

「朝のこと、気にしてるのか」

教室をでるなりケイが聞いてきた。

「気にするな、という方が無理だと思うけど？」とあたし。

「けど……現実のことだ」

ケイがそう呟いた瞬間、

「どうしたんだい？蒼霞さん」

息を弾ませた清水がいた。

「誰だ？お前」

ケイが露骨に嫌な顔をする。

「僕は清水連。蒼霞さんのクラスメートで委員長だよ」

にこやかに笑いながらケイに握手を求める清水。

「向日佳。よろしく」

ぎこちなく握手するケイ。

「で、清水。何か用？」

あたしは尋ねる。

「ああ、忘れるとこだった。蒼霞さん忘れ物だよ」

そう言って取り出したのは『教科書の山』。

「もう、テスト期間だろう？入れたままだと先生に没収されるよ」

「……………」

あたしは固まった。

『テスト』という言葉には縁が無いと思っていたところだったから。

「秀ちゃん。確か裏街道を抜けるのってさあ……………簡単じゃないんだよね？」

透香が紅茶とタルトを持って、おずおずと尋ねた。

「ああ、そうだよ」

カップを持ちながら答える秀人。

「裏街道を抜けることは、あそこでは『重罪』だ」

秀人はそう言う一口、紅茶を飲む。

「……」

「裏街道を脱獄した者は『対の存在』を奪われる。本来なら、ユザナはこの世に存在しないはず……」

そして本来なら対の存在ディックを憎みながら、この世から消えるはずなのに」

タルトを取りながらボソリという秀人。

「なら、どうして……」

疑問を抱く透香。

「ユザナの黒幕が……かなりの大物で、なんらかを企んでいる、というのが俺の意見だよ」

タルトを食べ終え、紅茶を一口飲むと複雑な表情で返答をした。

同時刻

「すみません」

帰宅途中に前方から来た、同年代位の少女に声をかけられる都。

「なにか？」

「あの、この辺りに『桜の公園』ってありませんか？」

少女は急いでいるようだった。

「えと。この道を真っ直ぐ行くとポーカーというパン屋があります。そこを左折したら着きますよ」

丁寧な道順を教える都。

「ありがとう『都遊』さん」

少女は不気味な笑顔でそう告げると同時に切りかかる。

「！！！」

切りかかれるまで気づかなかったリーナス。

少女が手に持っているのは間違えなく『闇の剣』。

間一髪のところではかわすした。

「お前　　裏街道の奴だな?!」

そっついながら戦闘態勢をとる都。

「今日は挨拶代わりよ。都遊こと、ソニカ・アイリス」

そう言うと、都に再度切りかかる。

「『大地の守り』!」

「『剣の宴』(つるぎのうたげ)」

少女は闇の剣で攻め立てる。

一方の都は、それを防ぐので精一杯だ。

少女は動きが速い。とても都が反撃できる相手ではない。

かといってこのまま引き下がらせてくれるわけではない。

「『緑の砦』!」

攻撃と防御能力のある技、緑の砦は少女をすっぽり包み込む。

『俺には、特別な属性がない……緑の砦をどこまで強力に出来るかが問題だ』

限界までリーナスを高める都。どこにも穴が見えない緑の砦が完成

した。

「 ?! 」

一段落したと思った矢先にリーナスを感じた途端、氷の弓が彼に向かってきた。

「 『氷のパロス』 まさか?! 」

「 私があの程度のリーナスで殺せると思ったら大間違いよ 」

冷酷の瞳で都を見下す。

『 なんなんだ? さっきからの、この気持ちは……… 』

都は少女を見ると、どうも誰かに似ている気がしてならなかった。

『 誰だ? 誰に 』

思い出そうと必死な都。

でも思い出すことはできない。その隙を少女が許すはずがなかった。

「 『逆十字切り』!! 」

少女が闇の剣で空を切ると、裂け目から無数の逆十字が都に襲いかかる。

避けたいのは山々だが、下手をすれば民間人を巻き込んでしまう。

それだけは避けなくてはいけないことだ。

「俺の命でよければ……くれてやる！」

意を決し、少女をしっかりと見て言葉を放つ。

すでに何本もの逆十字が刺さっているにもかかわらず都の口調はしっかりとしていた。

「オロナ」

少女がそう呟くと逆十字は跡形もなく消えてしまう。

「馬鹿げてる」

少女ははき捨てるように言つと背を向けた。

「次に会う時は、その馬鹿げた行動をとらないほうが身のためよ？」

少女が消えていくのと都が思い出すのは同時だった。

「『看夏』………か？」

都の問いに答えるものは誰もいない。

「『看夏』！？」

いつのまにか居候になった都は全身、血を流しながらの帰宅となった。

住人達は都の姿を見るなり、罵声を浴びせ、強引に、かつ強制的に透香は治療を始めた。

勿論、純歌と佳に脅され、全てを話しながら。

「どおして防御が遅れるかなあ」

にこやかに極上の笑顔で彼女は都に問う。

ブルルルルル……

都の背中に悪寒がはしる。

「で、確かに『看夏』さん……遊の妹に似てたんだね？」

巫斗が再度確かめる。

「瓜二つにも程がある。間違いなく死んだ妹の看夏だよ」

遠い目をしながら都が答える。

都には2つ違いの妹がいた。『看夏』とつけたのは母親。

彼がまだ赤ん坊の頃、父親は事故死したため何も覚えていない。

母の手ひとつで都は育てられた。

そんななか看夏が産まれるが異常な熱をだして入院をする。

母親は身体を壊しながらも看夏の看病をし、都も育て大変な苦勞をした。

文字通り看夏は夏生まれで、運悪く猛暑が続いた。

看夏の熱がようやく下がり、もう安心だと医師から告げられえた時、母親は倒れた。

疲労という疲労が積み重なり、大丈夫と聞いたとたんに張り詰めていた神経が切れたのだろう。

「私はこの夏だけでしたが、あの子を看病できました。

あの子の名前は『看病した夏』という意味をこめて『看夏』（みなつ）と付けて下さい」

そう言つと母親は安らかな眠りについた。

都と看夏は叔父と叔母に育てられたが都が10歳の時、悲劇は起きる。

看夏と下校していた時、背後から猛スピードで来る車に2人は気づかなかった。

都が気づいた時は、すでに目の前に迫っていたのだ。

「危ない！」

せめて看夏だけでも　　そう思って彼は看夏を突き飛ばす。

しかし。

実際に生き残ったのは都だった。

彼が突き飛ばした方向に車も避け、看夏は車と壁に挟まれ、即死した。

「俺が、助けるつもりが殺しちゃった　　憎んでるだろうな、俺のこと」

初めて弱いところを見せる都。

「んなことないって」

バンバンと肩を叩きながら佳が励ます。

「まあ、風呂入って寝ることだな」

秀人が言うと、都はその通りにして自室に入った。

「どう思う？皆」

最初に口を開いたのは巫斗。

「考えは、皆同じだよ」と純歌。

「レミカのことだろうな」

秀人の言葉に反論する者は誰もいない。

裏通りの主要人物で思い当たる少女がいないのだった。

「レミカ……お前って奴は」

呆れたようにギゼルが深々とため息をつく。

「えー？レミカ悪いことしてないよう？ギゼルに言われた通りにちやんとしたもん」

頬を膨らませて、レミカは不満そうにギゼルに反論する。

先ほど、都と戦闘していたときと、まるで口調が違っていた。

「でも、ソニカは多分、あんたの正体に気づいたはずだよ」

胸と背中に重症をおっているユザナが発言する。

プリメット裏通りに彼等の姿はあった。

セブントを殺され、花天使の誰かで遊んできていい とギゼルが
レミカに言ったのが間違いだった。

本当はユザナに言ってきたてしかったギゼルだが、彼女は重症をおったばかり。

無理させるわけにもいかず、仕方なくレミカに頼んだのだった。

「俺は『花天使の誰か』といったはずだが」

こめかみを抑えながらギゼルが言う。

「あれえ？そうだったけえ。まあ、いいじゃないのさあ」

反省の色無しのレミカ。

「……不思議だね。こんな形で再開するなんて
ん」 お兄ちゃ

側にいたギゼルにもユザナにも聞こえない声で、小さな少女レミカ
は呟く。

看夏として、兄の遊に聞こえるように……

NO・14 飛び交う疑問符・アヤメの過去（後書き）

都の過去がようやく書けたRueです。

書きたいと思いつつ、なかなか書けませんでした。

それにしても、都は何でこんなに重要キャラになってるんだろう（疑問）

では、またお会いできることを祈りつつ……

NO・15 本音と殺人（前書き）

光から闇へと落とされる……そんな経験ありますか？

目の前で人が殺された時、正気に入れますか？

人を殺める理由を聞きたいですか？

NO・15 本音と殺人

登場人物

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日 佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都 遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

清水 連 しみず れん 純歌と都のクラスの委員長。

ユザナ・H・ハーブ：謎が多い。ディックをとて愛している。

イングル・ジプソフィラ。（晴夜）。ティアラ（純歌）の対の存在。

ギゼル・ツンベルギア

レミカ

「どーするよ……」

「…………俺に聞くな」

登校中、何回純歌と佳がこの会話を繰り返したのか。

犬猿の仲の2人が仲良く(?)相談している原因は都だった。

死んだはずの妹との再会はとても喜べるような設定ではなかった。

妹の名は看夏。今はレミカと名を変えて反逆者の仲間になって都に攻撃をしてきた。

そのショックから都は抜けきれていないのだった。

「おはよう、どうしたんだい？元氣ないようだけど」

爽やかな挨拶をしてきたのは清水だった。

「おはよう、清水」

「
よお」

「……………委員長、か。おはよ」

誰がどの挨拶かは言わなくてもわかるだろう。

「？都君、顔色悪いけれど大丈夫かい？？」

心配そうに都を覗き込む清水。

「俺、先行くわ」

そういつて都は早足になり、ひとりで教室に向かった。

「み、都君！待ちなよ！！じゃ、僕も先にいくね。蒼霞さん、向日君」

慌てて都に追いつこうと走り出した清水。

「おい純」

ケイが清水を見ながら話しかけてくる。清水はもう、都に追いついていた。

「アイツ 清水には気を許さない方がいい」

そういうケイの視線はまだ、清水に向けられている。

純歌には理由がわからなかった。

しかし、『聞くなオーラ』がケイのことを包み込んでいる。

「 了解、ケイの野生の感って当たるもんね」

ホントのことを言ったのに、何故かあたしは叩かれた。

「みーやーこー！元氣出せってのは無理だけど、お互い頑張ろうよ」

あたしは教室に着くとすぐに都に言った。

都の気持ちはよくわかる。

あたしもディックのことで参ってた。

いや、進行形で言うべきだろう。

いつも通りに見えるのは単なる空元氣であって演技にすぎない。

宿敵、ユザナの実兄がディックな上に、ユザナ「シーナだなんて……」。

今までクレストさせる気満々だったあたしにとって大誤算。

ディックの対の存在を殺す覚悟が、あたしにあるんだろうか……

そんなことを考えながら都に『頑張ろう』というのは、刻と言つものだろう。

ほんの一瞬。

あたし達の間には沈黙が出来る。

「
そうだったな、頑張るか」

都に笑顔が戻る。無理してるのは百も承知。

だけど、今のあたし達にはこれしかできない。ただ、演技をし続けるしかできない。

そして、それは都も同じなんだ。

キンコンカンコン……

「授業始めるぞー、席につけ」

チャイムと同時に国語教師が教室に入ってきた。

「今日は4月14日か……蒼霞、教科書13ページから読みなさい」

「はい。『父さんの存在を忘れてたのよ？それを疑問に思いもしなかったのよ？』」

ガタッ

授業開始から何分経過したときだったんだろう。

妙な音が聞こえて、顔をそちらに向けた時。

先生が倒れてた。頭から血を飛ばして。

鮮血に染まる教室。

ピクリとも動かない先生。

遠目でも分かる。先生は銃で頭を打ちぬかれた。サイレンサーつきの銃で。

「せ……んせ？」

後ろの席のクラスメイトが近寄ろうとしたが。

「い……いやあああああ！……！」

先生の死を目の前で目撃した女子生徒が悲鳴をあげる。

目の前で殺されるところを見たショックが今、初めて実感に変わったのだろう。

「騒がないで！」

「動くな！近づくな！……！」

「みんな、そのままでいて！」

あたしと都の二重奏に清水の声が混じる。

県立お茶の葉学園

「どうしたのですか。茶山さん」

琴の授業中、手を休めた透香に尋ねる教師。

「……………すみません」

透香がそういうと教師は、それ以上聞かずにその場を離れる。

仕方なく琴を弾きながら彼女は再度考え始めた。

『さっき感じたリーナスは誰のもの？感じたことの無いリーナスだった。』

正体を確かめたかったのに！』

その矢先に教師が邪魔をしてきた。なんて運がないんだ。

『何事も無ければいいけど……………』

青空を横目で見ながら、透香は心の中でため息をつく。

「……………やはり駄目だ。先生は」

あたしと都より席が前だった清水が真っ先に脈をとる。

「だろうね」

弾は右から左へと綺麗に貫通していた。恐らく、先生に『苦しみ』の文字は無かったはずだ。

「……………何で委員長は死体を平気でみれるんだ？」

都が眉をひそめ清水に問う。

「それなら、君達も同じじゃないのかい？」

笑顔なのに挑むような視線に見える清水の顔。

都と清水の間に緊張感が漂い始めたのが分かる。

「と、とりあえず、職員室にいかなきゃ、ね？」

こういう空気が大の苦手なあたしは2人に提案した。

クラスメートは後ろの方に固まって、ヒソヒソ話してる。

まあ、内容は『何で死体の前で話が出るんだ？』などだろう。

「
だな」

「今すべきことは、それだったね」

2人の間にあつた緊張感が音をたてて切れたとき。

「結論はでたかい？」

見知らぬ声が飛び込んできた。

閉めていた教室のドアを静かに開けながら長身の男がトカレフを両手に持って立っている。

「誰、あんた」

男を睨みつけるあたし。

「お前が蒼霞純歌だな？」

「誰から聞いたわけ？」

こめかみに青筋が立つのを感じる。

『誰』が『何のために』あたしの情報をこんな男に流すのか。

男は、この質問に答えなかった。

「依頼されたんだよ……お前の目の前で誰でもいいから殺ってくれ
つてな」

ニツと笑う口。目はサングラスで覆われて素顔が見えない。

実に楽しそうな口調。何の罪も無い人間を、そんなもので……殺す
なんて！

「楽しそうに殺すんだね。あんたの生きがい？」

先生の顔を見ながら尋ねるあたし。

「人なんて、もろいもんさ。簡単に殺せる。」

そして俺は報酬を貰うことが出来る。こんなに楽な仕事はねえだろ
？」

男は、どう探っても『人間』だった。そして、トカレフも普通の銃にすぎない。

クレストさせることなんて簡単だ。でも。

運悪くここは教室であり、クラスメートがいる。

『記憶を消すこと』はできる。

でも男がクラスメートに危害を加える可能性は十分にある。

それだけは避けなくてはならない。

「俺は『安全が保証されている』。だから殺すだけ無駄なのさ『都遊』」

都の問いを軽く流す男。

「俺のことも知ってるとはね」

「おっと。今動いたら……」

「「!?!」」

男は銃口を後ろにいるクラスメートに向けていた。

顔はこちらを、トカレフを持った片腕はクラスメートを確実に殺せるように向けられている。

「そっちにとっては絶対絶命だな」

男は笑って言う。

「その言葉、そっくり返させてもらっよ」

清水が男に向かって静かに告げる。

「
な?!」

男の顔から血の気が引いていくのが、よくわかった。

「あーれまあ」

「近くなってきたな」

あたし達だけでなく、クラスメートも聞こえたようだ。

それは紛れも無く、警察のサイレンの音。

もう、聞こえない者はいない。安堵の表情も見ることが出来る。

「くそっ！裏切りやがったのか?! マッポ呼びやがって!!」

男が慌てて逃げる。

『今までマッポにつかまっていたことがないんかい』

そんなことを思いながら、あたしは男を追いかけて教室を飛び出した。

「警察のサイレンの音、よく出来てるな委員長」

純歌と男の姿が見えなくなると都は清水に言った。

「いやあ力ケだったんだよね」

そう言いながら取り出したのはごく普通の携帯。

「携帯に見えるのはみかけだけ。どのボタンを押しても警察の音が出るんだ」

清水は満面の笑みを見せた。

1F 渡り廊下

「な、なんなんだよ、お前」

男が小さく感じられる。明らかに、あたしの方が小さいのに不思議と感じられない。

「なにが？」

短い言葉の中に怒りの感情をむき出しにする。

「に、人間じゃねえだろ！お前……化け物か！？」

「さっきとはえらく違うな」

あたしの口からでる声は、既にあたしのものではない。

「あーあ。だらしねえなあ……？お前」

「き、聞いてないぞ？！蒼霞純歌は二重人格なのかよ！？」

男はあたしを恐れた。

あたしの声と違う声が、あたしの口から出ていたから。

「てめえに教える義務はねえよ」

冷酷な眼差しを男に向ける。

この場所に来てから喋っているのは『対の存在』であるイングル。

またの名を晴夜。

「てめえみたいなのは蹴り飛ばしてえよ……でもな、んなことしても犠牲になった人たちは満足しねえんだ」

晴夜は完全にブチぎれていた。

だからこそ、あたしは晴夜に乗っ取られているのだけれど。

正直、こんな奴の罪を受け入れたくない。

でも、これが役目だ。花天使としての。

「お喋りもここまでね」

ゆっくりと十字架をだす。

もう、晴夜は精神の中に戻っていた。

男の前にあたしは十字架をかざして立ちふさがる。

「う……腕からだし………」

右腕から長く、細い十字架をとりだすと男は取り乱す。

蒼霞純歌のままでクレストさせることは出来る。

それに、相手は人間にすぎない。この姿のままで十分すぎる。

「汝の十字架、我、ティアラ・ジプソフィラが引き受けよう
クレスト！」

もう二度とこの世に生まれない事を強く願いながら、あたしは男を成仏させた。

「地獄であんたが犯してきた罪、存分に味わいな」

男がいた場所を睨みながらあたしは呟いた。

「で、男からなにも聞かずにクレストしたわけだ」

呆れたようにケイが言う。

「頭に來たんだ」

あたしと晴夜の声が重なった。

晴夜が精神の中から「出たい出たい!!」と五月蠅いため仕方なく『男』として晴夜も姿を現している。

学校も無事に(?) 終わり、季節館に帰宅したあたし達。

今日のことを報告すると住人達は頭を抱えた。

「いや、気持ち分かるんだけどね」

こめかみを抑えながらトーカが発言する。

「情報は引き出すものであって……今回のことは情報源から断ち切

「つたも同然なんだよ？」

「それもそうだが」

そう言って話しはじめるのはシュート君。

「『依頼された』ってところが気になるな」

「純歌の情報を得ていただけでなく遊の情報まで知っていた」

ミコが都に確認しながら発言する。

「あと、『殺すだけ無駄』とか」

「『安全も保証されてる』とも言ってたな」

都と晴夜が交互に話す。

「もう少し早くわかれれば俺が『透視』できたのに」

悔しそうにシュート君が言った。

彼は透視能力がずば抜けていてクレストした後でも、相手がどんな気持ちだったかを読み取ることが出来る。

でも、今回はかりは時間が経ちすぎているので透視できないのだった。

「にしても、何で誰も気づかなかったんだ……今回のこと」

ケイの疑問は誰もが感じていたことだ。

花天使は仲間の危険を察知できる。リーナスが教えてくれる。

リーナスの共鳴といったところか。それが今回、誰にも無かった。

同じ学校のケイでさえなかったのだ。

「あ！ でも関係ないよねえ」

突然、トーカがひとりで納得した……もとい。納得しようとしていた。

「どうしたんだ？透香」

兄のミコがトーカに尋ねる。

「うゝん。関係ないと思うけど。私、妙なリーナス感じたんだよね」

そういつてトーカは内容を詳しく説明した。

琴の授業中に感じた不思議なリーナスのことを。

「関係ないとも、あるとも断言できないけど。もしかしたら繋がるかもしれないな」

ミコの言うとおりだった。トーカの感じた時間は男が教師を射殺し

た時間と同時にだったから。

「おい、遊。その時、清水もいたんだよな」

しばらく黙っていたケイが口を開く。

「？ああ。いたけど」

「ケイ、清水のこと気にしてるよね。どうして？」

面食らいながらも返す遊と、理由を聞きたいあたしの質問はほぼ同時だった。

「俺の勘だけど……アイツはどうも胡散臭い」

「委員長は優しいけどなあ」

「誰かと違って親切だしねえ」

都とあたしは意見が一致した。

「っせえな！俺の勘は百発百中なんだ！！」

ガルルと唸るケイ。すでに獣になっている。

「まあまあ、佳。獣から人間に戻りなよ」

につこりとトーカが言うと、ケイはピタリと静かになる。

「でも、確かに佳の勘が外れたこと無いしなあ。秀ちゃん、どうする?。」

トーカがシュート君を振り返り、訪ねた。

「どうしようか」

即答するシュート君に全員ずつこけた。

プリメット裏街道

「え?今何て言った???ギゼル」

目を大きく開けて聞き返すユザナ。まだ静槍流の傷は完治していない。

背中 of 穴も胸の傷もほとんど治っていなかった。

「もしかしたら、の話だ。ユザナ、うろたえるな」

落ち着いた声でギゼルはユザナを一括する。

「でもお。ギゼルがそんなこと口にするなんてえ今までなかったよ
う?。」

「レミカ、お前も黙れ」

「でもお」

「い・い・か・ら・だ・ま・れ」

レミカの顔を引っ張りながら彼は言い聞かせる。

ユザナはともかく、レミカの言い方は気に障るのだった。

「ふい・ふいたふい！ふいたふい」（い・痛い！痛い）

涙目でレミカは訴える。

そんな2人を横目で見ながらため息をつくユザナ。

「今回はレミカと同意見よ、ギゼル」

ギゼルの動きが止まる。

「今まで、一度も言ったことないじゃない。

『もしかしたら感づかれてるかもしれない』なんて」

ユザナはゆっくりと続ける。

「何度人間として地上に行ったと？『ギゼル・ツンベルギア』としてではなく『清水連』として」

ユザナの眼差しはギゼルに向けられていない。

彼女が見つめているものは闇が広がる空

「ふい、ふいふいふあふえんふあふあふいふえふおー」

声の主はギゼルに引つ張られたままのレミカ。

ギゼルは手を離すことをすっかり忘れていたのだった。

ちなみに「い、いい加減離してよー」とレミカは言っている。

NO・15 本音と殺人（後書き）

悲鳴の字体を変えたいと思うのは私だけでしょうか。

目の前で人柄が変われば怖いだろうなあ。
なんて思ってしまったRueです。

こんなご時世。

人は沢山殺されています。

それも、嘘みたいな理由で……
とても悲しいことですよね。

ではまたお会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・16 真相は野生が語る（前書き）

隠されていた真実が、自分を脅かすものだったら、あなたは立ち向かいますか？

NO・16 真相は野生が語る

登場人物

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日 佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都 遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

清水 連 しみず れん 純歌と都のクラスの委員長。

ユザナ・H・ハーブ：謎が多い。ディックをとて愛している。

ギゼル・ツンベルギア

レミカ・D・バイオレット：本名を都看夏。ソニカ（都）の実妹。

1 - 1

「まだ怒ってるわけ？」

「……」

あたしは返事をしない都に大げさにため息をつく。

実は4組にいるケイも都同様、怒ってるんだ。

まあ、原因が『食べ物』だから恨みが深いのは分からないでもないけど。

「いい加減に機嫌治しなよ。4時間目も後2分で終わるんだから」
それでも都は返事をしなかった。

『食べ物の恨みってここまでとは思わなっただけだなあ……』

キンコンカンコン

授業終了の鐘になる。

すると都がくるりこちらを向いて

「佳が中庭で食べるってさ。俺達も早く行こう」

どうやら、ケイと交信していたらしい。

「あたしにも一言言ってくればいいのに……」

今の今まで、都とケイの関係を心配していたのがバカみたいじゃない。

「お前と佳なら、心配するけど。俺とケイに限ってねーよ。バーカ」

あたしは都の顎にパンチを入れてやる。

「ケイにも入れるから、安心なさい」

につこり都に告げた私は、クラスメートの視線を無視して中庭へと

向かった。

例え、都が床から起き上がれなくなっていたとしても、あたしには無関係のことだから。

同時刻

「……ここか」

「そうみたい早く始めよう」

ここは純歌達が通う『市立花並木中学校』の1F渡り廊下。

先日、純歌が謎の男をクレストした場所に透香と巫斗は訪れていた。

『誰かが情報源をクレストした』ので、2人はここに派遣された。

秀人によって。

透香が懐からピンをだし、いたる所にまいていく。

「透香、それ水にしかみえない」

「失礼ねえ、巫斗。これ、私が生み出した薬品よ？」

そういつて兄に微笑む妹。彼女は『草』属性で薬品などを作るのが趣味だった。

日夜、鼻歌まじりで薬を作っていることを知っているのは、彼と秀人くらいだろう。

「　　暖かい空気を寒くしないで……」

巫斗がブルツと震える。

透香の笑みはときに最大の武器となる。

まあ、今は微笑みと同時に、どす黒い液体の瓶をちらつかされたからでもある。

そんなこんなで、薬品をまいて4分後。

『青いカスミソウ』の幻影が浮かび上がる場所が現れた。

「巫斗！このビンの中にいれて！！早く！」

「分かってる！『風の集い』！」

幻影は長いことは見ることが出来ない。持ち帰ることも困難だった。

が、透香の薬品の効果で幻影は形を留めることが可能となり、

その形を崩さず、ビンの中へ押し込めることができるのは、『風』属性の巫斗ならだけだ。

「さて、私達の役目は終わりだよ」

「ここでは、な。帰ったら秀人にこき使われるだけだ」

「はいはい。つべこべ言わずに行くよ」

透香は巫斗の耳を引っ張って、静かに姿を消した。

1 - 1 の教室の前で向日佳は待っていた。

ガラガラ……

ドアが開くと待ち人3人が姿を現す。

「おまたせ、ケイ」

「うちの担任、HR長いよな」

「うーん、確かに長いかもね」

自然な会話でできた3人。何も向日佳を怒らすような発言はない。

ないはずなのだが……

彼 向日佳はとてつもなく怒りが頂点に達していた。

額の十字傷が、意志を持ったかのように鋭く光っているようにも見え、

尚且つ彼のつり目が一段と鋭さを増していたのは、一目瞭然だった。

こうなった原因は、全て今出てきた純歌、都、そして清水のせい……らしい。

いつもなら3人で帰る展開になるのだが、今日は急遽、清水も一緒に帰ることになったのだ。

こうなったのは今日の昼休みに遡る……

昼休み

「たくっ朝ご飯のことで腹を立てるのもいい加減にしてよね」

中庭へ出た途端、純歌は、都と佳に悪態をつく。

「まあ、いいじゃねえか」

「そうそう、過ぎたことだし」

「……………もう一発、いれてあげようか?」

この一言で2人をフリーズさせてやる。

都は教室で、佳に至っては、顔を合わせるなりとび蹴りを食らわせていた。

2人がフリーズするのは当然だろう。腕力と急所にいれるのが純歌の取り柄なのだから。

そうこうしているうちに、芝生の上に座り3人で食事をしようとしたとき、彼、清水連は現れた。

「相変わらず仲いいね。僕も一緒にいいかな」

と、笑いながらそう言ってきたのだ。

「ああ、いいけど？」

「委員長もここにきたんだな」

「……」

都と純歌は簡単にOKをだしたが、佳は何もいわずに黙々と弁当箱を開け始める。

「ええっと。向日君は駄目、かな？」

空気を感じ取った清水は遠慮がちに佳に尋ねた。

「……………別に」

青い空の下、陽も照っていて暖かい。

それをぶち壊す源は『向日佳』ただひとり。

結局、都と純歌のOKサインが出たにもかかわらず、清水は同席するのをやめ、かわりに『一緒に帰る』と約束したのだ。

『あゝ！飯と一緒に食つときゃよかったよ』

今更、佳は後悔していた。

回想している間に、公開が重くのしかかってきたらしい。

そのせいなのか、ひとりペースを遅くして3人から離れて帰る佳。

「どーしたの？ケイ」

「おいおい、腹減ってるのは俺もだぜ？」

「具合が悪いのかい？向日君」

3人が口々に声をかける。

『ああ、誰かがいるせいで気分悪いよ』

思わずそう言ってやろうかと思ったが、珍しく大人気ないと判断し

「ん？ああ。今行く」

そう言つて佳は3人の元に駆けつけた。

佳だけは滅多に口を挟まず、純歌、都、清水は他愛ない話で盛り上がりながら、下校を楽しんでいた。

そんなこんなで、学校を出て数十分後。

「じゃあ、僕はここで」

ある十字路で清水が別れを告げる。

「またねえ」

「じゃあね、委員長」

「……………んじゃ」

完全に清水の姿が見えなくなると純歌と都に佳は質問攻めにあう。

「なんつでああいう態度かなケイ」

「委員長は関係ないって。佳の考えすぎだよ」

ブーブーいう2人にうんざりして、佳は空を見上げて尋ねる。

「アイツの思考が読めなくても、か？」

真剣な佳の眼差しに都も純歌も何も言い返せない。

ピーピーピー

「秀ちゃん、分析結果がだよ」

先ほど入手した幻影に透香が作った薬品を数滴入れること約10分。
透香が作った薬品は『生前の記憶が映像で見れる』というものだった。

映像は正方形の箱に入っていて、中に全ての記憶が収められている。
蓋を開ければいつでもみることができるのだった。

「先に見ようか」

そういうと秀人は、蓋に手を伸ばし静かに開けた。

同時刻

「「思考が読めない?!」」

都と純歌が声をそろえて佳に向ける。

後10分もあれば季節館に帰宅できるだろうという場所。

2人に構わず、佳は淡々と話し始める。

「お前等は気づかないだろうが。アイツは俺達のことを確実に探ってる。自分のことは悟られないように思考を閉ざしてな」

100%そうとは言えない口調。

それでも、はてしなく100に近いだろう。

向日佳こと、クリス・サンフラワーの野生の勘は本物だから。

「……もしそれが本当だとすれば、委員長は『花天使』ってことか？」

思考を完全に閉ざし、『花天使』に分からなくするのは普通の人間ではまず無理だ。

「人間でも、花天使でもない。十字架を剥奪された者……『反逆者』と人は言うの。反逆者はリストアップされてる、けど」

ゆっくりと純歌が都に話しますが、それを彼は遮った。

「なんで？ユザナと看夏……いや、ユザナとレミカが主犯じゃ」

「……その後ろ盾、ということさ」

都を黙らせるような威圧感を放ちながら、佳が言葉を発する。

3人は季節館玄関前にたどり着いた。

「反逆者でただひとり誰も知らないリーナスの持ち主がいる。勿論、リストアップされてねえ」

都を見ずに話す佳。

「分かっているのは名前だけ。『ギゼル・ツンベルギア』とね」

純歌がそう言うと、ドアが静かに開きだす

「反逆者で一番のリーナスの持ち主ってことも入るんじゃないか？」
都が玄関に入りながら、純歌達に問いかけた。

「できれば思い過ごしたらと思ったんだけどな」
投げやりに言う佳。

「信じられない……」

「同じく」

あたしと都が口々に呟く。

「清水連で間違いないね？」

シユート君が確認する。

あたし達は機械のように首を縦に振ることしか出来なかった。

季節館リビングに住人は自主的に集合した。

あたしがクレストした男の記憶の映像を見るために。

そしてそこには、しっかりと清水連の姿が映し出されていたのだった。

「分かったと思うけれど、この男と清水連が繋がったわ。

清水連の『電波』と、この男に近づいた少年の『電波』は全く同じ」

トーカの顔から笑みが消えていた。

「俺達も最初、信じられなかった」

そう言ったのはミコだった。

初めは気にもしなかった少年が、トカレフを男に渡している場面を見た時、

『まさか！』と思い、情報や細かい資料を分析した結果がこれだっ

た。

「なかなか資料がなくてさ。悪いけど純歌と都の部屋を調べたよ。同じクラスだし……まあ半々の確率だったけど」

「そして、見つけたのがこの写真」

シユート君、トーカの順で話し、一緒に写真を出すトーカ。

それはクラスの集合写真だった。

「秀人が透視したんだ。間違いない」

断言するミコ。

シユート君の透視能力は、お墨付きだから依存は無い。

記憶の少年と写真の清水の電波を探ることなんて、彼にとっては簡単なことのはず。

でも、彼の顔には疲れの色がみえた。

「結構、大変だったよ。すごいリーナス消耗した」

「でも、よみとってくれたんだな」

ケイがシユート君に感心する。

「俺が思考を感じ取れないわけだ。秀人が難しいっていうんだから」

「佳、どういうことだ？」

シュート君が目を見開いて尋ねた。

ケイは、今日の経緯をシュート君達に報告する。

今日の出来事を、全て。

「おいおい……だったら清水連は」

報告を聞いたミコは最後まで言わなかった。

まあ、言う必要もなかっただろう。

全員が同じ事を考えたから。

そして、先ほど都和ケイと話していたことだったから。

「清水連は、反逆者の要、ギゼル・ツンベルギアに間違いないな」

シュート君の声がリビングに静かに響き渡る。

「もう、貴方はばれてるわ……ギゼル」

プリメット裏街道の一角で話しているもの達がいた。

反逆者の街、プリメット裏街道では一目置かれている3人。

ユザナ・H・ハーブ、レミカ・D・バイオレット。

そして、ギゼル・ツンベルギア。

以前はセベント・ヒースもいたのだが、花天使達によってクレストされてしまった。

「だろうね、ユザナ。クリスは野生の勘がすごい……最もここまでとは思わなかったよ」

落ち着いた声、落ち着いた瞳。彼、ギゼル・ツンベルギアに焦りはみえない。

彼は今日、ティアラ、ソニカ、クリスと共に帰宅した。

ごく当たり前のように、何をするのでもなく。

「クリスの野生の勘は本物なのよ？貴方、クリスが思考を読もうとしているのが分かってたなら、別のイメージを見せればいいものを」

「うーん……確かにそうした方がよかったのかもね」

ユザナの呆れと怒りのこもった言葉を遮ってやんわりと答えるギゼル。

口調は穏やかでも、有無を言わせない迫力が彼にはあった。

そう、ギゼルは知っていた。クリスが自分の思考を読もうとしていることに。

だから、思考を閉ざした。

その方が楽しくなりそうだったから。

「全く何考えてるんだか」

ユザナは、勝手にして下さいというようにわざと大きくため息をつけてやった。

「まあまあ。完全に僕だとわかったわけじゃないんだから」

あくまで、のほほんとするギゼル。

「ギゼルウ、完全にはれてるよぉ〜？」

レミカの突然の言葉に流石のギゼルも驚いたようだ。

「なんでわかるんだい？レミカ」

彼女の戦闘能力は素早いが、予知能力や透視能力はないはずだ。

「えとねえ。レミカ、ずっと前にソニカ・アイリスと戦ったでしょう？その時から、ずっと　と気づいてないのぉ。これにい」

レミカがそう言って見せたのは、逆十字架の形をした盗聴器。

「レミカねえ、あの時これを混ぜて攻撃したんだよう。ソニカ・アイリスのどこかに、これが皮膚の中に入ってるんだあ」

つまり、彼女はソニカ・アイリスこと、都遊と戦闘した日からずっと、会話を盗聴していたことになる。

「……レミカ。なんでいわなかったんだい？」

「忘れてたあ」

あっけらかんとはくレミカに、ギゼルとユザナは、無言でハリセンの鉄槌を食らわせる。

「ところでユザナ。そろそろ十分じゃないのか？魂の数は」

レミカが痛みをこらえているのを横目で見ながらギゼルは問う。

「あら、気づいた？」

ユザナは嬉しそうに答える。

「もう、魂いらないのお？」

無邪気にレミカが聞いてきた。頭を抑えながら。

「ええ……もういいの。十分よ」

ユザナはレミカにそういうと再び、ギゼルを見て続ける。

「いつでもいいわ。準備はできてる」

「　　なら花天使達との決戦は近いうちにやろうか」

そついいながらギゼルは、清水連と姿を変える。

「最高の舞台を用意しなくちゃな」

そう言うとは花並木中学へと向かった。

「フフ。ティアラ・ジプソフィラ。貴女に私は殺せない。

私が『シーナ・クローバー』である限り、貴女は私を殺せない。ましてや、クレストなんて問題外よ……さあ、どうでるのかしら……？」

闇に包まれたプリメット裏街道に雷が鳴り響く。

その中にはユザナの笑い声も混じっていた

市立花並木中学

「やあ、おはよう。蒼霞さん、都君、向日君」

屈託の無い笑顔で、彼等に挨拶するのはひとりしかない。

「　　あ、うん」

「あー……おは……？」

「……」

声をかけられ、びくつとした純歌と都はぎこちなく挨拶をするが

「向日君って人見知り激しいのかい？」

清水が問うのも無理は無い。佳は挨拶をしていないのだから。

「ケイが人見知り激しいってのはないよ」

「うんうん。どっちかって人間より、野生そのものだし」

都達が力説すると、佳は真っ直ぐに清水を見すえ

「いい加減に茶番はやめたらどうだ？」

単刀直入で彼は清水に言い放つ。

目に力強い光を宿して。

それは本当に野生そのものの光で、純歌と都でさえ、身震いした。

自分の意思に関係なく、身体は震え、鳥肌が立つ。

「やはり、そうきたか。クリス・サンフラワー」

先ほどの笑顔はどこへやら。清水は今、ギゼルとなっていた。

青空が広がっているのに、どこからか見えない雷が落ちる。

それは2人の間に落ち、交互に照らし続けていく照明となった

NO・16 真相は野生が語る（後書き）

クリスが珍しく的を得た意見を言っ たなと思ったりするRueです。
彼の性格は、やんちゃ野郎、俺様主義なんです。

それにしてもなんて書きやすいんだ、レミカ（笑）

では、又お会いできることを祈りながら……

Rue

NO・17 花言葉 (前書き)

想いを言いたくともいえない気持ち、わかりますか？

NO・17 花言葉

登場人物

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

清水連 しみず れん：純歌と都のクラスの委員長。本名：ギゼル・ツンベルギア

ユザナ・H・ハーブ：謎が多い。ディックをとて愛している。

レミカ・D・バイオレット：本名を都看夏。ソニカ（都）の実妹。

「まさか、いきなり言うとは……野生そのものってのは嘘じゃないね」

口元に冷笑を浮かべるギゼル。

「お互い、もう隠すことは無いはずだ。だったら」

「さっさと決着をつけるべき、といたいのかい？」

佳は肯定するように無言で頷く。

視線をそらさずに。

「……やりたいけれど今は無理、だなあ。明らかにそちらの人数が多いじゃないか」

彼は微笑して、指をパチンとならすと霊獣3匹が現れた。

空へと向かう青い霊獣。

花壇へと向かう紅紫の霊獣。

黄色い霊獣は木の方へと向かっていく。

「『『守りの盾』！』！』」

動物が向かった場所から光が放たれる。

霊獣達は、光にはじかれ、ギゼルの元へ戻ってきた。

「こうして会うのは初めてだね。ジル、ハンス、セラフィン」

言葉こそやわらかい感じだが、目は冷たい光を帯びていた。

いつもの柔和な笑みは、完全に消えうせている。

「『ダッフォディル』の精霊ね。あわなすぎ」

木の後ろから透香が呆れたように言う。

「おい透香、精霊じゃなくて霊獣だろ？こいつ等の場合。俺は『はなずおう』。秀人は『シラー』がきたぜ？」

花壇の中から巫斗の声がした。

「『ダッフォディル』、『はなずおう』そして『シラー』。どれも剥奪されし者』（お前）が選ぶ花とは思えないな」

宙に浮いていた秀人声が、上空からゆっくりと下降しギゼルを見せる。

『十字架背負う花天使』と『剥奪されし者』の要が初めて顔をあわせた瞬間だった。

「それは特別さ。全ての始まりを示しているんだから」

最後のほうの台詞をギゼルは、純歌を見て言った。

純歌の脳裏にひとつの仮説が浮かぶ。

「兄さん……ディック・クローバーに関係ありそうね」

「流石、というべきかな？ ティアラ・ジプソフィラ。全てはディック・クローバーへのメッセーじさ」

彼は微笑むが、それは冷笑にすぎない。

「兄さんへの？」

何で？ という顔で秀人を反射的に見る純歌。

「想像だが……多分、ギゼルはユザナ……もといシーナが

好きなんだと思うよ」

この言葉に一瞬ギゼルの顔が険しくなったことに佳だけが気づいた。しかし、そのことには触れずに秀人に同意を示す。

「秀人に賛成」

「てか、それしか考えつかないよな」

「花言葉を考えると、どうしてもねえ」

佳に続いて巫斗、透香も賛成した。

「花言葉？……ああ、なるへそ」

やっと飲み込めた純歌。

「
な」
どう意味か説明しろ。これ以上読者を混乱させる

都の背中におどろが描かれているのは錯覚ではない。

「その心配は、ないかもね」

「最初から、混乱してるし？」

巫斗と透香が口々に、当たり前のように言う。

それを聞いて否定しない（できない）都。

そして『あ、そっか』と納得してしまうばんくら作者。

「『シラー』の花言葉は『さびしさ』。』はなずおつ』は
『裏切り』

そして『ダッフォルデイル』は『らっぱずいせん』のこと。花言葉
は『報われぬ恋』。これを含めて考えると……？」

透香が都を見ながら訪ねる。

「……………落ち込んでいいか？」

さっぱりわからん、というジェスチャーで透香に返す都。

「だから、ギゼルは『報われぬ恋』と思いながらも」

「『黒嵐拳』！！」

都に答えを教えようとした一瞬の隙につき、ギゼルが純歌の喉をめ
かけて拳をふるう。

その速さは電光石火の速さを超えていた。

「純歌！」

皆の声で初めて気づいた。

目の前にギゼルが嵐のように激しい拳が飛んでくることに。

でも、遅すぎた

！！

「……ディックの妹なら、もう少し手強い奴だと思ったんだが」
ギゼルは拳についた血を制服でぬぐう。

ポタッ

「まるでリーナスに気づかないなんて……お粗末なもんだ」

ポタッポタッ

そして彼はようやく、こちらを振り向く。

その顔には不満が満ち溢れていた。

あたしは、声を出すのに苦勞していた。

貫通はしていないものの、中途半端に挟られている状態。

正直、こっちの方が痛みを、苦しみを味わせることができるだろう。

苦しみと同時に、視力も気力もまでも削られていく……

声にならない、言葉にできない
話せない。

ギゼルの目が微笑を超えているのが嫌でも分かる。

「おい！純！！」

「純歌？！無理しないで！話さないで！！」

ケイとトーカが口々に話しかけてくる。

その声までもが、遠くになっていくようだ。

2人に、答えることが出来ない。

ポタツポタツ……ポタポタポタツ……ポタツ……

血は止まる事を知らないのだ。

意に反して流れていく赤い血。紛れも無く、あたしの血だ。

あたしとギゼルの距離は6、7mはあっただろう。

トー力達が現れてすぐ、ギゼルから離れたのだから。

まあ確かに技を出せない距離じゃないけど。

「『黒嵐拳』は危険性が極めて高いために、永久禁止令がだされたはずだが？」

秀人はギゼルの黒い瞳を、瞬きひとつせずに見る。

「そんな常識を俺達を守るわけないだろう？」

その言葉に即答で答えるギゼル。

「でも、使い手自身も危険なはずだ。いつまでも」

「俺が何百……何千回この黒嵐拳を使ったと思ってる？」

ミコ　　の言葉をも遮り、挑戦的な声を返すギゼル。

あたしの、リーナスが教えてくれる……今のギゼルの目が、次の獲物を探す目だということを。

キンコーンカーンコーン……

運がいいのか悪いのか。

間が悪いというか、間がいいというか。

鳴り響いてくれる始業ベル。

あたし達にとっては『始業ベル』でなく『終業ベル』だ。

今が朝だろうが関係ない。

あたし達の『今日』は今、終わりを告げたのだから。

「これ以上、ここにいるわけもいらない。次に会うときがお前達の命日」

そう言い残してギゼルは姿を消した。

あたしは緊張が途切れて　　気を失った。

「　　ここ、は……？」

目を覚ました時には、あたしの声が回復していた。流石に完璧に、ではないけれど。

「よ、よかったー！まだ未完成の薬が効いて！」

トーカが抱きつきながら涙を流す。

締め付ける力が強く感じ、小さくうめき声を出してしまつ。

トーカは慌てて『ごめん』と言つたけど、ミコに首根っこを掴まれて離される。

時間を見ると、PM18:43。思いっきり寝ていたようだ。

「目え覚まさないし、動かないし……死んだと思ったよ」

安堵の声を出したのはミコ。

「まあ、馬鹿はほつといて、続きを話すぜ？遊」

「お願いします」

ケイの言葉に、深々と頭を下げた都。

あたしは痛みを忘れ、視力を尽くしてベットから飛び降り、

「一度……逝つて来い！」

都に右足で踵落としを、その反動を利用して左足でケイを蹴飛ばす。

サッカーでシュートを決めるように力強く。

そりゃもう、頭キックで。

「……………純歌、もう回復したわけだ？」

あきれ果てたようにシュート君が呟いた。

彼の目の前には、コンクリートの塊が、そして後ろにはヒビの入った壁があった。

プリメット裏街道

「何があつたんだろ、ギゼルは」

「まだ出てこないのぉ？ギゼル、ご飯食べないのかなぁ」

純歌達が季節館に着いた頃、やはり帰宅したギゼルは、無言で自室にこもったきり出てこなかった。

「ユザナ、レミカお腹減ったぁ」

「……………あんたってホントに掴みどころないわ」

ユザナはレミカを引っ張って、キッチンへと消えた。

「……柄にもない霊獣よんだから仕方ないけど」

ギゼルは自室に入ってから考え込んでいた。

「『花言葉』か……」

彼の視線は、どこをみてるわけでもなかった。

彼がよんだ霊獣は彼自身の意思でよんだわけではない。

あちらから勝手に来た霊獣だった。

あの時の花天使達の思考を思い出す。

彼等は霊獣達の『花言葉』で自分の気持ちを悟っていた。

『報われぬ恋』（らっぱずいせん）と知りながらもシーナに思いをよせていた自分。

だからこそ、ディックの脱獄という行為が許せず、『裏切り』（はずおう）者に死を　　と思った。

迷うことなく殺すつもりだった。

が彼女に懇願され、諦めた。彼女は許した。『裏切り』という罪を。数年経ったが、まだディックのことを想っていることに気づいた時、どんなに『さびしさ』（シラー）を感じたことか。

「……わかるもんか。俺がどんなに苦しい思いをして決断をしたか……俺は！」

彼は瞼をとじていた。

「俺はユザナが幸福になるなら、それでいい」

瞼をゆっくりと開けると、彼の黒い瞳は今まで以上の光を宿していた。

「さて、バトルを申し込もうか」

彼は立ち上がり、ツンベルギアを一輪だし、外へ放り投げる。

「こちらも用意しなきゃな」

ドアを開け、彼はリビングへと降りていった。

今の彼に、迷いは一切ない。

全ては、愛する者の為だけに動く人形

第2章
完

NO・17 花言葉（後書き）

元々、純歌達の名前も花を取り入れています。今回は苦戦しました。

花言葉がピンとこないものだったり、あまり知られていない花だったり……

まあ、結局はあまり知られていない花になりましたが。

さて第2章も終わりました。

次回から第3章に突入です。

もう少しお付き合いください。

では、またお会いできるのを祈りつつ……

R
u
e

NO・18 ツンベルギアは始まりの合図（前書き）

いけない、と思っていても、わかっていても
やらなければ路が開かないときもある。

第三章、始まりです。

NO・18 ツンベルギアは始まりの合図

登場人物

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日 佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都 遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

清水 連 しみず れん 純歌と都のクラスの委員長。本名：ギゼル・ツンベルギア

ユザナ・H・ハーブ：謎が多い。ディックをとて愛している。

レミカ・D・バイオレット：本名を都看夏。ソニカ（都）の実妹。
ディック・クローバー

イングル・ジプソフィラ

「久しぶりに来ましたよ、ディック・クローバー。最近、クレストばかりの　　!？」

秀人が魂無き花天使、ディック・クローバーに話し掛けながら近づいた。

眠る花は正直暗い。

明るいところと言えば、ディックが眠る紅の柩の辺りだけ。

そして、十分に見えるところまで来た時、彼は信じがたい光景を見た。

「　　どういうことだ」

彼は、その場に釘付けになった。

らしくもなく、顔を青ざめ、一筋の汗を垂らしながら……。

「だ、誰だよ……お前達、お、俺達は何も」

「何もしてない？ふざけないで」

狼狽する数人の男達に、セミロングの少女が厳しい表情で一喝する。

「普段の笑みはどこにおいてきたんだ？」

やれやれといった口調の少年が少女に問いながら横に立つ。

「ふ、たご？」

ひとりの男が『最後となる言葉』を口にする。

この時、本人に『最後の言葉』という自覚はなかったはずだが。

「我名、セラフィン・カメラリア。汝等の十字架、我が引き受けよう……クレスト……！」

少女が右肩から緑色の十字架を瞬時に出し、男達の頭上にかざす。

十字架中心に刻まれたツバキが赤い光を放ち、男達を包み込む。

「ら、楽な仕事じゃねえじゃねえか！」

まだ残っていた者達が逃走するが、少女、セラフィンは追わない。

変わりに突然、風が激しく吹く。

風はセラフィンの髪をゆらししていく。彼女は細めた目で言っていた。

『後は任せた』と。

彼女の目の前にいたはずの男達は骨の欠片も残っていない。

「ねえ、俺のこと忘れてるよ?」

少年はにっこりとそう言っただけで彼等の前に立ちふさがる。

残りの男達が必死で逃げ走っているのに、少年は涼しげな顔で話してきた。

「何、処から」

「我、ハンス・A・ポインセチア。汝等の十字架我が引き受ける！
クレスト!!」

笑顔が怒りの表情にかわり、男達の問いをみなまで聞かず、平凡な木の十字架を勢いよく左肩から取り出した数秒後。

ハンスの目の前にいた者達も何も残らず消えていた。

「何処から……って『風』に連れてきてもらったのさ」

ハンスが、もうこの世にはいないひとりの男に返答する。

先ほどまでの激しい風は、もう吹いてはいない。

今吹き抜けている風は、とても穏やかで気持ちいい風の子守唄だった。

「あ、おかえり。トーカ、ミコト」

「トオ カアアア！おやつどこ？あ、ミコもおかえり」

季節館に2人が帰宅すると純歌と晴夜が出迎えた。

「 純歌。貴女の頭の中は、食べ物のことしか頭にないの？」

透香が尋ねると

「へ？なんで？？駄目？」

首をかしげて純歌が逆に聞いてくる。

「……………はいはい、今から作るから」

「じゃあ、座って待ってる！」

ビシュツ！と純歌は消え、テーブルに座っていた。

「大変だな、ハル」

「どうにかしてよ…………ハル」

双子は揃ってハル 蒼霞晴夜に頼み込む。

「絶対無理」

彼は即答した。大真面目な顔で。

「で、今日は何回クレストしたさ」

午後8時。

夕食を食べてる最中に純歌が皆に尋ねてみた。

「俺と透香は7回ずつ」

最初に答えたのは巫斗。横では透香が頷いていた。

「俺は5回。奈津が2回」

佳が対の存在、レミがクレストした数も報告する。

何故、レミではなく奈津と言ったのか。

それは多分、目の前にいる晴夜の影響だろう。

ここはプリメットではない。

地上なのだ。

だったら相応しい呼び方をしなくてはならない。

そんなことを考えて言ったのだろう。

佳とはそんな男だ。

「……しかし俺まで狙われるとはな。あ、ちなみに4回」

ごく普通の人間の少年、都遊は花天使の名を授かっている。

それなりのリーナスは扱える。

十字架を持っていないので、クレストこそできないが、リーナスだけで何とかなる程度の奴等を相手にしたらしい。

花天使の純歌達から見れば『天晴れ』、に値する。

「しょうがないじゃないか、遊。君だって花天使のようなものだし。『ソニカ・アイリス』だろ？」

晴夜が都にウインクしながらなだめる。

「で、秀ちゃんは朝から見ないけど、どこにいるの？」

透香がハーブティーを注ぎながら純歌に尋ねる。

「シユート君は私でもわかりませーん」

「シュートがわかる奴ってディック兄くらいだよ」

純歌と晴夜が口々にいう。

正直、大出秀人こと、ジル・パーシカリアと対の存在クルルはつかみ所が無い。

仲間といえど、何を考えているのか分からない時がある。

それは彼等に大きな不安を抱かせる。

全員が思っていることだったのだろう。

そんな気持ちが大きくなる度、周りの空気は重く、なおかつ低下する。

「ま、まあ……もともとシュート君はああだし」

「敵じゃなくてよかったよな」

純歌と佳のぎこちない会話。

「だ、だよねえ……純歌」

「俺等考えすぎだよな」

透香と巫斗が一生懸命、笑顔を作る。

「あはっはははは」

リビングに不気味な笑い声が響く。

「透香、ハーブティー新しいのくれるか？」

「あ、はいはい秀ちゃん……へっ!？」

思わず、息をのんだ住人達。

全員の視線の先には大出秀人が立っている。

「ただいま、遅くなって どうしたんだ？皆、凍り付いてるけど」

いつの間にやら、話題の人間が帰ってきていた。

「え？ああそーかな」

透香が兄の足を軽く蹴る。

「いっ！凍りつく理由なんてないだろーが」

言いながら都に視線を向ける。

「え……そうそう、何処行つてたんだ？」

「まっつてたんだぜ……!い、でっ!」

都に小突かれた佳が超が付くほどの下手な演技をする。

それを見かねた純歌が、佳の背中をつねる。

加減なんかせずに。

「
まあ、何があったか知らないけど話してもいいか
？」

秀人が真剣な顔で同意を求める。

「なにかあったのか？ シュート」

晴夜が怪訝そうに尋ねた。

いつもの秀人らしさが欠けていた。

「らしくない！ シュパツといいなよ。これ以上、驚くことなんかないんだし」

透香も促す。

「じゃ、いうけど」

秀人が前置きをして、懐からビンをだす。

中に入っているのは『ツンベルギア』一輪のみ。

「ツンベルギアで思い出すことは？」

眼を閉じながら、シュートが皆に問う。

「え、そりゃ…ギゼル　　？！」

口に出しかけたトーカの顔色が瞬時に変わる。

トーカだけでなく、全員変わっていた。

鼓動も、いつもより速く大きく聞こえるのは錯覚なんだろうか。

「……何処にあったと思う？眠る花のディック・クローバーの柩の中だ」

悔しそうに顔を歪ませ、苦々しげに秀人が告げる。

だが話はここで終わりじゃなかった。

「柩の中にディック・クローバーはいなかった」

住人達は、内側から完全に凍りついた

『やあ、十字架背負う花天使のみなさん。久しぶりだねえ。君達の体の調子は大丈夫かな？』

ひとりでも欠けたら、僕達に絶対勝てないだろう？今、恐れているのはそれなんだよ。

これを読んでる時には、眠る花にディック・クローバーの姿はみえずさ。

まあ、そんなことはどうでもいいか。肝心なのは、僕達とのバトルのこと。

こちら準備しなきゃいけないから、もう一度ツンベルギアが届いたら、バトル開始直前とする。

届いたら、そちらも送ってくれ。誰の花でもいい。こちらに花が届いたら合図とする。じゃ、今回はこれで』

フシュ と音をたてて溶けていく花、ツンベルギア。

確かに花は役目を果たした。

彼等はツンベルギアがあつた場所をひたすら見続ける。

それで、何かわるでもないのに、彼等は見ることにしか出来なかった。

自分の誕生花に言葉を詰め込み、読んでほしい相手のイメージを花に伝える。

後は花が相手の場所に到達するという一風変わったプリメット独特の伝達方法。

眠る花からディックが消え、変わりにツンベルギアがあつたのだ。

これだけ条件が見事に揃っているのだから内容かなんて嫌でもわかる。

巫斗が静槍流『風雷』でテーブルごとツンベルギアを一刀両断。

誰からも非難の声はあがらない。

すぐにツンベルギアからギゼルが瞳に映る。

もちろん、立体映像で本物ではない。

そして今 伝達は終わりを告げた。

「…………やるか」

しばらく沈黙していたリビングに佳の声がよく通る。

これを皮切りに純歌と晴夜が話し出した。

「いつくるかわからないけど」

「やらないよりは、いいな」

全員、無言で頷く。今出来ることは、ひたすら練習。

少しでも、リーナス向上のためにやらなければならない。

プリメットに住んでいた頃は日常だったこと。

地上にきて平和ボケでもしてたんだろうか。

「やるのはいいけど…………どこでやるの？」

透香が当たり前の疑問を投げつける。

「その心配は無用のようだよ？」

透香の問いに秀人が外を指差しながら、口を挟んだ。

「用意周到…………」

誰が言ったかわからない。

ただ言えることは、練習できる状況に置かれたということ。

「十中八九、ユザナ達だろ」

都が呟く。

私達の目の前に広がっているのは空。

季節館ごと花天使一同は空に移動していた

プリメット裏街道

「ねーねーユザナご飯」

トントンとユザナの部屋を叩くレミカ。

ユザナは朝届いた荷物を持って自室から出てこない。

彼女は先ほどから、こうして催促しているのだがユザナは出てくる気配が無い。

レミカは力を強め、部屋を叩くが結果は同じだった。

「もうく開けるよー」

しびれを切らしたレミカはドアを開けた。

「ねえーご飯　?!」

レミカは言葉を失った。

彼女が入った部屋はユザナの部屋に間違いない。

なのに、当の本人はどこにもいない。

いるのはユザナに似た少年。

少年は眠りこけていた。

「……『ディック・クローバー』?」

口を小さく動かすレミカ。

が、少年は目を覚まさない。

ガシャン!!

後ずさりするレミカは思わず花瓶を割ってしまった。

少年が目を覚ました。

レミカは飛び出した。

何故だかわからないけれど、ここにいたらいけない気がした。

「待ちなよ。レミカ・D・バイオレット」

少年の静止がかかる。

足をとめるレミカ。でも、振り向きはしない。

「初めまして……というべきかな、レミカ。本名は『都看夏』だね？」

レミカは驚いて無意識に振り向いた。

「俺はディック・クローバー。シーナは俺の対の存在だよ」

そう言つて微笑むとディックは手をさしのべる。

「部屋に入らないかい？お腹減っているんだろっ？」

眠る花

「どう？花天使達の様子は」

ユザナが含み笑いを浮かべ出し抜けに聞く。

「そりゃあ、びっくり・しゃっくり・天津甘栗・驚き・桃の木・秋
刀魚のひらき」

声の主は誰なのかわからない。

花天使だということしか、わからない。

ユザナの目にも人影は映らない。

見えるのは『影』だけ。

「ふふ。相変わらず変な答え。こっちは順調よ。

ツンベルギアを送った時点でディックは目覚めていたんだから」

「嬉しそうだね、シーナ」

影の主が無感情の声で返す。

「……忘れないことね。自分がもう、立派な『反逆者』ということ
を」

ユザナの冷笑が眠る花にこだまする

NO・18 ツンベルギアは始まりの合図（後書き）

ちよつと謎を書きました。

これが上手くいくかは知りません。

秀人に対しての住人達のやり取りは自分では気に入ってたりします。

ではまたお会いできることを祈りつつ……

R u e

NO・19 花送りは試合開始の返事（前書き）

本当に怖いことは、何だと思いますか？

NO・19 花送りは試合開始の返事

登場人物紹介

蒼霞純歌 あおがすみ じゅんか 花天使名：ティアラ・ジプソフィラ

向日 佳 むかひ けい 花天使名：クリス・サンフラワー

大出秀人 おおで しゅうと 花天使名：ジル・パーシカリア

相場巫斗 あいば みこと 花天使名：ハンス・A・ポインセチア

茶山透香 さやま とおか 花天使名：セラフィン・カメリア

都 遊 みやこ ゆう 花天使名：ソニカ・アイリス

イングル・ジプソフィラ（晴夜）

リリー・A・ポインセチア（芙雪）

ギゼル・ツンベルギア：反逆者リーダー

ユザナ・H・ハーブ：ディックをとて愛している。

レミカ・D・バイオレット：本名を都看夏。ソニカ（都）の実妹。

ディック・クローバー

「レミカは『ユザナ』。『シーナ』ということを知りなかつたのか」

ディックは腕をくんで困つたように呟いた。

「うん、初めて聞いた」

レミカはハンバーグを頬張りながら、頷いて返答する。

ディックと会話をし、初めて知ったことがいくつかあった。

が、やはり凄く驚かされたのが

1：ディックの対の存在がユザナ。

2：ユザナというのが偽名で、本来はシーナ。ということだろう。

彼女は話には聞いていただけで、本物と話すことは勿論、見るのも初めてだった。

「何歳？」

レミカは思い切って尋ねてみた。

話し方は年上を感じさせ、見た目は少年のまま。

正直、ギャップがありすぎる。

「何歳だろうなあ……」

しばらく考え込んだ答えがこれだった。

拍子抜けしたレミカは、口がポカンと開いてしまう。

かといって、彼ははぐらかしていない気がした。

『これがディック・クローバーかあ』

レミカはボーっとしながら、ディックお手製ハンバーグを黙々と食べた。

「はあっ！」

カキン！

「あまいあまい！おらああ！！」

カキン！カキン！！ガキン！！

セラフィンの十字架とクリスの十字架がぶつかり合う音が空に響く。

十字架背負う花天使達の証であり、クレストの時に必要な武器。

戦闘時には何が起きるかわからない。己の力で戦わなきゃいけない時もある。

その為の練習試合だった。

木で出来てようが、金属で出来ていようが花天使の持つ十字架は、

簡単に壊れたりなどしない。

十字架は、互いを高める為に、日々の練習を怠らぬようにできただ。

本気でぶつかり合いができないとクレストさえできない。

例え十字架を持っていても、宝の持ち腐れというもの。

「おーおー。いい試合してんなー」

ジルの視界にセラフィン達の試合が入る。

とても楽しそうな顔つきだった。

「いい度胸だねえ……相変わらず」

真下から恐ろしいリーナスを感じたジルは横に飛びのく。

「『青い雷』！」

ジルが先ほどまでいた場所に、青い雷が突き上げてきた。

「……一歩間違えば、俺は死んでた確率が高いんだが？」

「よそ見してる余裕があるんだから大丈夫でしょ」

ジルの対戦相手、ティアラが第二の攻撃を構えながら言い放つ。

「『紅の十字架』！！」

ティアラの十字架から、炎の十字架が連発される。

「『水の踊子』！！」

とっさにジルは水のリーナスで身を守る。

「『風の怒り』！！」

少女が自分の周囲にある風を対戦相手にぶつける。

もろに当たれば骨を折るところじゃない。

「『木々の守り』！どうした？！芙雪！」

少女と試合しているのはハンス。

芙雪は本名を『リリー・A・ポインセチア』。ハンスの対の存在。

芙雪が静槍流の構えをとった、が

「残念だな……静槍流『風雷』！」

「?!『トルネード』！」

芙雪が十字架に宿った風を爆発させる。

互いの相手は『自分自身』。

両者、一步も進まず試合は続行される。

戦闘時は何が起きるかわからない。

精神的ダメージをくらうこともあるはず。

その時一番辛いのは、『自分自身』に勝てるかどうかだ。

仲間や肉親も入るだろうが、それはまた別のものだと思う。

一番怖いのは、精神的に辛いのは、『相手が自分の弱点を知っていること』。

自分しか知らない弱点を、相手に知られているのはかなりきつい。

その上、その弱点を『最初から知っていた』となると……。

リリーとハンスが戦っているのはそのための訓練なのだ。

十字架のみで戦う試合、リーナスのみで戦う試合、

十字架とリーナスの混合試合、精神面の試合にわけて練習する花天使達。

2回目のツンベルギアは未だ届かない。

もう、何週間たったかも解らない。

けれど、ここで止めてしまえば後悔する。

今できることは、練習試合をすることだけ

「今の俺は『本当の魂』で生きてない。いつ死んでもおかしくない状態さ」

何時間経っただろう……と思った時、ディックが唐突に話した。

「…………死ぬのが怖くないの？」

あっけらかんと彼が話すのを見て、レミカが息をのむ。

「怖くない、というのは嘘になるけど。本当に怖いものは、生きるか死ぬかじゃない」

ディックがレミカにカフェオレを渡しながら断言する。

「なんなの？」

好奇心で尋ねるレミカ。

「『大好きな人に忘れられること』さ。レミカもそうなんだろう？」

『ソニカ・アイリス』に『都遊』に忘れられたくない、言いたい言葉があるからここにいるんだろ？」

真っ直ぐな瞳で私を見るディック。

曇ってない、深紅色の瞳に私が映る。

「わ、私は」

口を開いた時、下からギゼルの声がした。

「レミカ！レミカ　??」

探している口調。もう、ここにいられない。

「じゃあね」

そう言って私は部屋を出た。静かにドアを閉める。

「なにやってたんだ？ユザナの部屋で」

不思議そうなギゼルの声。

「？何にもしてないよあ？？どーしたのおギゼル」

「……部屋の中を見たのか？」

咎めるようなギゼルの問い。

「うん、みたよー……って駄目だった？レミカお腹減ったから、ユザナに作って欲しくって」

ギユキュルルルル……

「はいはい、わかったから下に行こうか。特別に作ってあげるからさ」

レミカが真っ赤になりながら、ギゼルをペシペシ叩く。

それを笑いながら、なだめるギゼル。

「中にいる奴をみたんだよな。ディック・クローバーを」

「あの人の名前？あれがディック・クローバー？？レミカ初めてみたよお」

2人の足音が遠くなり、ようやく消え去った。

「
やっといつたか」

ディックは再び起き上がると大きく伸びをする。

そして、ポケットに入れてある紅の石を手に取り、石に向かって話し出す。

「俺だ。作ってもらった石、すごいな。記憶もリーナスも消えたよ」

「それはよかった。でも、あんまり無茶は」

「りょーかい、りょーかい任せなさい」

「……そんな調子だから心配は倍以上」

相手は呆れを通り越していることがディックにはよくわかった。

だからこそ、『もっと困らせたい』。

『頼むからこれ以上悩み増やすような真似は』

「じゃ、サンキューな」

最後まで聞かずに彼は自ら交信を絶った。

「今頃、悪態ついてんだろーな」

想像しただけで笑いがこみ上げてくる。

「さて、俺も頑張らなきゃな」

ディックはそういうと、ユザナのリーナスを探した。

「……『眠る花』にいるのか、シーナ」

彼はそう言つと、眠りにつくため壁にもたれかかった。

「きをつけ……ろよ…」

誰に言ったのかわからない。知っているのは本人だけ。

「さて、私もそろそろ戻るわ。そっちも早く戻った方がいいわね」

ユザナが『影』に提案した。

「それもそうだ」

「大騒ぎになるのも、面白いんだけどね……ふふ」

あくまでユザナは楽しんでいる。

ゲームのようにしか彼女は考えていないのだろう。

それに、彼女はディックを取り戻したも同然だ。

ユザナもとい、シーナがディックの『本当の魂』を持っているのだから。

彼女の目的は達成したといえるだろう。

「じゃ、実際に会う日まで」

そう言って『影』は消えていった。

「ふふふ。大変ね……お互いに。さて、愛しのディックの元に戻ろうかしら」

彼女は笑いながら、眠る花を後にした。一輪のツンベルギアをその場に残して

「あゝのゝやゝろ……！ばつかやろ　　！！！」

空に向かって大声で叫ぶジル・パーシカリア。

彼にしてはとても珍しいことだけに、花天使達は目を丸くした。

「ど、どうしたの？ジル」

びくびくしながら、セラフィンが尋ねる。

「あたしとの練習試合で、おかしくなったの？頭」

と皮肉を言うのはティアラ。

「ありがとう、セラ。『どうかの誰か』と違って心配してくれて」

ジルはセラフィンに嬉し涙をこぼす。

「あーもう分かったから……。で、どうして雄叫びあげたのさ」

「ん？まあ、休憩中にストレス発散させてただけ」

ティアラの問いに彼はすんなり答える。

「　　そか、ならお昼にしょーか」

ティアラがそう言って館に向かう。

「俺はもう少し休んどく。ティアラと練習試合はやっぱりきついしな。風にもう少し疲れをとってもらつよ」

そう言って寝転がるジル。

「珍しいことの連発だな、ジル」

「なんともいえよ、クリス。マジで疲れた」

クリスは苦笑しながら、館に姿を消していった。

「　　らしくなさすぎだ、俺……」

ジルは先ほどの交信内容を思い出す。

雄叫びの理由は交信相手のせいだった。

自分は練習試合中なのに、『困らせて楽しんでいた』明らかに。

「一方的に来たうえ、勝手に切んなよな……ディック」

彼は小さく声に出す。

本当に寝てしまおうと目を閉じた数秒後。

「ジル！ジル！！戻って来い！！」

走りながら自分の名を呼ぶのはハンスだった。

「どうしたんだよ、そんなに慌てて」

ジルは自分の元に来たハンスに優しく尋ねる。

「きた……来たんだよ！ツンベルギアが！」

息を切らしながらハンスが言った。

「……行くぞ！ハンス！」

眠気覚ましに丁度いい伝言だ、とジルは思った。

「ただいま。置いてきたわ」

ユザナが楽しそうにギゼルに報告した。

「ご苦労様。置いてくるだけにいちや遅すぎないか？レミカの腹が鳴りっぱなしで大変だったんだ……でっ！！」

「ごめんねえ、レミカ知らなくて中を見ちゃったの〜ディック・クローバーって若いんだね〜」

笑顔でいいながら、見えないようにギゼルの足をグルグリ踏むレミカ。

腹の虫のことを言われたことが気に障ったらしい。それも相当。

「ふふ。後で話させてあげるわ、レミカ。彼はもう、話せるし、立てるし……何でもできるのよ？」

そう言っただけで彼女は自室に向かおうとした、その時。

パーシカリアがユザナの目の前に落ちてきた。

「返事が来たようよ、ギゼル」

振り向きざまに伝えるユザナ。

がギゼルとレミカの頭上からも花が落ちてくる光景が目に入る。

「な……」

啞然とする3人。

花は『ジプソフィラ』、『カメラリア』、『アニユアル・ポインセチア』、『サンフラワー』そして『アイリス』の6種類。

「これは……」

ユザナの顔がギゼルに向けられる。

「きっと彼等は『いつでもOKだ』と全員で言っているんだ」

冷静にギゼルが答える。

「さあ、準備をするか」

どこか楽しそうにギゼルが言うと、レミカとユザナも小さく頷く。

数分前

「で？誰が何処で見つけたんだ？」

ジルがティアラに尋ねると

「俺だよ。眠る花の見回り時間るときさ」

晴夜がジルに返事を返す。

「……そうか」

ジルはそういうと、パーシカリアを一輪出した。

「返事を出そう」

ジルが窓から投げようとしたとき、一瞬早く花が投げられた。

「おいおい。全員投げなくても」

「一輪だけでいいって分かってるけどさ」

「戦うのはジルだけじゃねえだろ？」

「私達もいるんだから」

「投げてても問題ないはずさ」

ティアラ、クリス、セラフィン、ハンスが口々にいう。

「それもそうか」

ジルは笑い、自分も投げる。

「こいつ等に緊張の文字は無いんだな」

そつと呟くとソニカも同じようにアイリスを投げる。

「待つてろよ、看夏」

色んな思いを胸に、ソニカはアイリスが見えなくなるまで外を見続けた。

ジル達も、シーナ達の動きも、今までのことを完全に分かる者がひとりだけいた。

その名は『ディック・クロバー』。

彼が何を考えているのか分からない。

眠っているのは演技なのか、そうじゃないのか……

何を考えているのかもわからない。

彼はひたすら目を閉じて、動こうとしない。

そして、舞台はプリメット裏街道へと移動することになる。

NO・19 花送りは試合開始の返事（後書き）

短い第三章ですがよろしく願いします。

またお会いできることを祈りつつ……

R
u
e

NO・20 ゲームスタート！（前書き）

戦いの中で大切なのは、仲間を信じること。

NO・20 ゲームスタート！

登場人物紹介

ティアラ・ジプソフィラ：旧・蒼霞純歌

イングル・ジプソフィラ：旧・晴夜

クリス・サンフラワー：旧・向日佳

レミ・サンフラワー：旧・奈津

ジル・パーシカリア：旧・大出秀人

クルル・パーシカリア

ハンス・A・ポインセチア：旧・相場巫斗

リリー・A・ポインセチア：旧・芙雪

セラフィン・カメラリア：旧・茶山透香

ケイン・カメラリア

ソニカ・アイリス：旧・都遊

ディック・クローバー

レミカ・D・バイオレット：旧・都看夏

ユザナ・H・ハーブ：本名・シーナ・クローバー

ギゼル・ツンベルギア

プリメット裏街道・北

「『つむじ風集合』！」

「『スズランの舞』！！！」

ハンスとセラフィンのコンビネーションは抜群だった。

『つむじ風』で風をおこす。

同時に『スズランの舞』を繰り出し、敵の口の中へと押し込んでいく。

キュイルル……

敵が苦しそうに喉を抑える。

スズランは綺麗な花だが、一種の毒草と考えていい。

花にも葉にも根にも毒が含まれているのだから。

「まだまだああ！飲み物はアルコールでもどーぞー」

懐から何本ものビンをだし、静槍流一輪草でビンを真っ二つにしていく。

アルコールは風が運んでいく。敵の口の中に、どんどん運ばれる。

「
ハンス」

「ああ、移動だな」

2人はバタバタ倒れていく敵を見もせずにその場を去った。

キュ、キュイル……ル…ギャアアアア…！

スズランは毒草。

アルコールと一緒に口にすれば、毒の周りが早くなる。

2人が倒した敵の数は軽く300はこえているだろう。

プリメット裏街道・南

キイイン！キン！！キン

「ちっ……きりがない」

紫の十字架で敵の剣と対峙するジル。

何百という敵を相手にしているのだ。ゆっくりしてられない。

「あんまりやりたくなかったんだけどな」

呟くと十字架を正眼に構え目をつぶるジル。

敵は馬鹿にされたと思って一斉にジルに飛び掛る

グギヤ

!!!!

ジルに向かっていった敵は皆、微塵切りにされていった。

「『闇の目』……成功つと」

彼はそう言って上空を見る。

「頑張ってるじゃないか」

上空ではソニカがリーナスで勝負していた。

「『草の戒め』！ 『凍結』！！」

何十という敵をソニカは相手にしていた。

花天使の名は授かったものの、人間には変わらない。

つまり、十字架を持っていない。

十字架はない、だがリーナスは使いこなす。

そんな人間、聞いたことがない。

ソニカはリーナスを体中から放出しながら戦っている。

花天使である自分達でも、きついことだ。

人間のソニカには、耐え切れないと断言できる。

だからソニカにとって、10人以上相手にすることは大変なことなのだ。

「でも、ソニカはちゃんと『目的』があるから戦えるんだな」

苦戦していることはジルに十分伝わっていた。

でも、助けなくても彼ならやり遂げる。

ジルはそう確信していた。

「……てめえらの相手なんて、してらんないんだよ!!!『落雷』!」

凍った草に雷が落ちた。

「じくろっさん、ソニカ」

肩で大きく息をするソニカに、ジルが微笑みながら飛んできた。

「終わったんだな？そつちも」

敵の残骸を見たソニカは思わず身震いした。

「少々手荒になったかもね……まあ、とにかく行こう」

「そうだな。てか、めんどくさいことやらせるよなあ」

ブツクサいいながらソニカはジルの後を追う。

何故こんなことをやっているのか……それは今から、数時間前に遡る。

バツリン！！

突然、ユザナ達の家の窓が碎け散る。その向こうには花天使達が揃っていた。

「あら、早かったわねえティアラ」

冷笑をうかべるユザナ……もといシーナの横には、ディック・クローバーの姿があった。

「兄さん！」

駆け寄ろうとした時、彼女の目にもう1人の少女の姿が飛び込んできた。

「……ちよっ！ハンス！！」

彼女が振り向いた時、ハンスも目を見開き呆然としていた。

「水城、部長？……水城晶部長！？」

ハンスの声に少女は反応しない。

「ふふ……この子の魂、『なのはな』はこちらにあるんだもの。簡単に操ることができるわ」

今は亡き、セブント・ヒースが、水城晶に取り付いたのが原因で、彼女は魂を抜かれ、人型のみが季節館に安置されている。

喉元に『逆十字架』を刻まれて。

だから本来、彼女の姿があるはずない。が、それが可能となっている理由はひとつ。

魂を、ギゼル達が使い、操っているからだ。

生きている人間の魂を、こんな形で悪用するのは危険極まりない。

だが、そんな常識は、ギゼル達に通用しない。

彼等は、彼等のやり方が『常識』と考えているから。

水城晶の『逆十字』は今、どす黒い光を放っていた。

「このままだとおゝいつ死んでもおかしくなんだあ」

無邪気な笑みでレミカ・D・バイオレットが口を挟む。

「看夏！」

ソニカ・アイリスの声に反応するレミカ。

一瞬、ビクツと肩を震わせるが

「ふふふ……以前は物足りない戦闘でしたわ。こんなところまで来て、御用でも？」

先ほどの顔つきではなかった。冷たい声、冷たい光。

「……………看夏」

愕然とするソニカ。

「感動の再会は終わったかい？」

ギゼルの声が頭上から聞こえてきた。

「君達も見たように、こちらには人質がいる。返して欲しければ、君達が僕達に勝つだけでいい。簡単だろう？」

ギゼルは花天使達の前に降り立ち、話す。

「ギゼル、いきなりこの人達と戦うのお？レミカ、まだ眠い」

大あくびをしながら、レミカは尋ねる。

「心配ないさ。そうだと思って、ちょっとしたゲームをしようと思
うんだ」

ここまで言うと彼は花天使達を見回した。

「前置きはいいいから、さっさと説明しやがれ」

青筋が立つ寸前のクリス。

流石に短気で、『長い話』が大嫌いなだけある。

「そう、焦らなくても大丈夫さ。君達が僕達の部下と
全滅させることが出来たら、君達の勝ち。僕達を

人質も全て解放されるさ。ただし1時間で、ね」

不気味な沈黙が一帯を支配する。

どれだけの数の部下がいるかわからない。

その上、ギゼル達も含めて1時間で決着をつけなくてはいけない。

かなり厳しい条件だ。

「その条件で問題ないわ」

しっかりとギゼルを見てティアラが断言した。

「へえ？君１人だけの結論でいいのかい？」

ギゼルが馬鹿らしいといわんばかりに聞き返す。

「当たり前じゃん？」

「予想してたし」

「いきなりお前等と勝負させてくれるはずないしな」

セラフィン、ハンス、ジルが後を継ぐ。

「そういうこつた。さあ、ゲームスタートだぜ？」

クリスの一言で、今にいたる。

組み分けは、北・セラフィンとハンス、西・ティアラとクルル。

東・クリスとイングル。そして南・ジルとソニカ。

東西南北の部下を全員倒したら、彼等の本拠地『闇の城』で合流すると決めた。

役目を果たした今、向かっている場所は『闇の城』。

「　　なあ、ジル。ギゼルの最後の言葉どう思うっ？」

「ああ、ホントだと思うよ……俺は目星がついてる」

「え?!」

ジルの発言に驚くソニカ。

「俺達の中に、『裏切り者』がいるって……マジなのか?!」

あのと、ギゼルが最後に言った言葉だ。

「『裏切り者』にご注意を。花天使の皆さん」

プリメット裏街道・西

「『氷のパロス』!!連射!!!!」

ティアラが次々と氷の弓を放つ。

少しでも当たれば、そこから内部に浸透し、最後には内側が全て凍りつく。

ティアラは一度たりとも外さない。

「『闇の歌声』！」

クルルが静かに、それでいて不気味な歌を歌いだす。

彼女の周りの敵達が頭を抱え込み、半狂乱になっている。

「楽にしてあげる……『紅乱拳』！！！」

たった一度しか振るわなかった十字架。

たった一つしかでてない刃。

なのに、もう何処を探しても、敵の姿は見当たらない。

「
いこうか」

「うん、いこう」

2人が目指すは『闇の城』

「ねえ、聞いてもいい？」

クルルが速度を落としてティアラに問う。

「どうしたの？クルル？？」

不思議そうに首をかしげるティアラ。

『闇の城』は目の前にあるのに、仲間があそこで待っているのに…。

どうして呼び止める必要があるのか、ティアラは理由がわからない。

「どうして……『裏切り者』になったの？」

ティアラが冷や汗をかくのを、クルルは見逃さなかった。

プリメット裏街道・東

「『太陽の光』100万V!!」

クリスの誕生花は『サンフラワー』。簡単にいえば『ヒマワリ』。

夏の代表的なシンボル。

そして、彼自身の光を闇に包まれたこの地に捧げる。

裏街道の住人は『光』を苦手としている。

「そのまま、焼けな！」

元気いっぱいの子クリスの声。

「やれやれ。俺の出番なし？」

不満をたっぷり含ませてイングルが言った。

「さて、行こうか」

イングルの言葉を見殺して『闇の城』に向かうクリス。

その後を急いで追う、イングル。

『闇の城』は目の前に迫っている。

「ねーえ、ギゼル。花天使達はもう、ここに来るかしら」

「どうしてだい？ ユザナ」

心待ちにしているユザナをみて、ギゼルが尋ねる。

「だって、部下は何人いても『コマ』にすぎないでしょう。」

だったら、もう来るかと思ったのよ」とユザナ。

「こないんじゃない？」

突然、レミカの声がした。

さつきまで、叩いても、踏んづけても起きなかったレミカが。

「おはよう、レミカ。どうしてそう思うの」

目をゴシゴシしながら、レミカは言う。

「だってえ……今、ここの前にいるんだよう？なにに入ってこないんだもん。なんか、あつたんだよお」

フワア……と欠伸をするレミカ。

ユザナはギゼルを見た。

「レミカの言うとおり来ている。……どうやら、仲間割れしたようだ」

明らかに、ギゼルは楽しんでいた。

「で？『裏切り者』になった理由は？ティアラ」

クルルがもう一度聞いてくる。『闇の城』は目の前だというのに。

ティアラをぐるりと囲む花天使達。その瞳は冷たい光を帯びている。

「ティアラ、何とかいえよ」

クリスのドスの利いた声音。

「あた、しは……」

突然のことに驚き、思わず泣いてしまっティアラ。

「おい　泣けば済む事じゃ」

「行こう。時間が、ないんだ」

クリスを遮って、きっぱり断言したのはイングル。

「……………」

静まりかえる花天使達。

「さんきゅう、イングル」

ジルが頭をポンと叩く。

「ここで時間を無駄にしちゃいけないよね」とセラフィン。

「……後でいいな」

大きく伸びをしながらハンス。

「じゃあ、行こうか！『闇の城』の中に」

「おお！」

クルルのかけ声に全員が応えた。

今、必要なのは『信じる気持ち』

ここで疑ったりしたら、ギゼル達の思う壺。

花天使達は、それぞれの目的の為に城の中に乱入する

NO・20 ゲームスタート！（後書き）

ここにきて裏切り者がでてきたのには自分でびっくりです。
ああゝまだまだ未熟だなあと思わずに入られません。

では、またお会いできることを祈りながら……

R u e

NO・21

兄妹の想いは（前書き）

肉親だからこそ、言い残したことを言いたい……

NO・21

兄妹の想いは

登場人物紹介

ティアラ・ジプソフィラ：旧・蒼霞純歌

イングル・ジプソフィラ：旧・晴夜

クリス・サンフラワー：旧・向日佳

レミ・サンフラワー：旧・奈津

ジル・パーシカリア：旧・大出秀人

クルル・パーシカリア

ハンス・A・ポインセチア：旧・相場巫斗

リリー・A・ポインセチア：旧・芙雪

セラフィン・カメラリア：旧・茶山透香

ケイン・カメラリア

ソニカ・アイリス：旧・都遊

ディック・クローバー

レミカ・D・バイオレット：旧・都看夏

ユザナ・H・ハーブ：本名・シーナ・クローバー

ギゼル・ツンベルギア

「……っ」

「…これ、反則だよ……」

クリスとレミが、右の額から血を流していた。

手に握られていた十字架が赤く染まっていく。

血の池が出来つつあった。

「おい！レミ！クリス！！」

青ざめた顔で駆け寄る花天使達。

「うーん。腕は悪くないけどお。レミカには勝てないねえ」

のほほんと言う、レミカ・D・バイオレット。

本名は『都看夏』。ソニカ・アイリス（都遊）の実妹だ。

決してレミとクリスの攻撃が、レミカに劣っているわけではない。

むしろ上にあるはずだった。

でも、彼女は殺せない。まだ、クレストすることもできない。

力が上回っているのに、何故、クレストができないか。

それは、少し前のこと

「氷のパロス！」

ティアラの一発で、頑丈な扉は一瞬にして消え去った。

「遅かったね『十字架背負う花天使達』の皆さん」

氷が蒸発するときに放つ霧があたりを支配していく中、高いリーナスと共に反響する声が聞こえる。

自分が優位だ、というオーラを発し続けながらギゼルが言った。

「この城の前で、何分のロスをしたのかしら？」

ユザナが、この上ない笑みで花天使達に問う。

「裏切り者についてじゃないのぉ？」

間延びした声で言うのはレミカ。

鶴の一声……じゃなく、レミカの一声で空気の流れが瞬時に変わる花天使達。

反射的にティアラを見てしまう花天使達。

凶星だ。

それだけに、ごく自然に顔を、目線を動かしてしまう。

「へえ、ティアラ・ジプソフィラ。お前が『裏切り者』……それでよくディックを取り返すなんて馬鹿げたこと」

「あ、あたしは！」

ギゼルの言葉を震えた声で制するティアラ。

顔から血の気が引いたように青い顔、震える身体で声を震わす。

だが、こんな声が届くはずなかった。

誰の心にも、届くことはないのだ。

「……俺達は、そんな『馬鹿げたこと』に付き合いにきたわけじゃない」

ティアラを庇いながらイングルが一步前が出る。

「さつさとルールを説明しな」

レミがギゼルのことを睨みながら話をすすめる。

「……まあいいさ、時期にわかる」

ギゼルが苦笑しながら、レミカを見た。しゅしゅとレミカが口を開ける。

「しょうがないなあ。一言で言えば勝ち抜き戦だよ。まずはあ、レミカを倒さなきゃ、ユザナ、ギゼルとは出来ないのお。」

分かってると思うけど。誰一人殺せなかったら、貴方達の『取り返したいもの』は絶対に手に入らないからあ」

レミカは、そう言つと鼻歌交じりで前に出る。

余裕があるようにみえるのは、張ったりじゃないことがよくわかるリーナスの高さ。

全身がビリビリといている。

「私達とやったとしても、貴方達じゃ到底勝てないと思うけどねえ

……勝算がないゲーム好きなの？」

ユザナは冷ややかに笑いながら問い、ティアラを見つめる。

ほんの数秒だったが、彼女はそれ以上言わず、ディックの下へと行き、彼を抱くように傍観を決め付けた。

「誰でもいいよう？一度に何人来ても全然いいよー？まだ残り20分もあるんだしねー」

レミカのこの言葉にブ真っ先に反応したのが、レミとクリスだった。

そして、今2人はレミカにズタボロにされていた。

「……情けねえ……まだ、ひとりも、倒せねえ……」

「動かないで！クリス、レミ。今、血を止めてるんだから」

セラフィンとケインはクリス達の止血をしていた。

「ほらっ！レミ動かないで」

ケインがレミカに向かって行こうとするレミを力ずくで止めている。

「こんなところで、負……らん……だから！」

ケインの腕の中でもがくレミ。

止血が出来ない。

我を忘れ、使命感……もとい本能だけで動いている。

それは執念をも感じさせたが、視界に入る2人の姿は、痛々しくどうしても目をそらしたい衝動に駆られる。

セラとケインの止血を断り、再度退屈そうに待っているレミカの元へと行こうとする2人。

だが

「……………すまん、レミ！」

声と共にレミの腹部に第三者の右ストレートが深々と突き刺さった。

犯人は、ソニカ・アイリス。

「俺が、行く。いいだろ？」

ソニカはクリスに尋ねた。

「死……ぬ　　ソ……」

息苦しそうに、クリスが聞く。

「俺は、花天使の名は確かに持つてるが、花天使でもない。負ける可能性は十二分にある。」

けどな、2人がそんなにボロボロになった理由は俺にあるんだ。

『クレストしないでくれ』何て俺が頼んだから、2人は本気が出せなかった……すまねえな」

泣きそうな表情で2人に謝罪するソニカ目には涙が光っている。

「俺、ひとりでもいい。早く治せ。次の戦いのために……行かせてくれ、俺にアイツは……」

言うなり彼はクリス達に背を向け、レミカの元へ歩み寄ると全く予想してなかったらしく、レミカ　　こと、看夏は一瞬たじろぐ。

「……戦場で気をぬいたら、負けだけだっ!」

レミカの一瞬の隙を突き、顔を拳で殴る都遊……いや、ソニカ。

間髪開けずに回し蹴り、踵落としと3連打。

迷いのない目で、レミカを圧倒していた。

「げっはっ……ぐっ……いきなりつてのは、反則じゃない?」

息を乱しながら、レミカは睨む。

睨みながらも、内心は穏やかではなかった。

『……リーナスを使ってないのに……体術攻撃だけ、で、攻撃……した？』

信じられないが、レミカの考えは正しかった。

ソニカの攻撃は、全てリーナスを使ってはいない。

体術だけで、全ての攻撃を打ち込んできて、それを全てかわし切れなかった。

『体術、だけで……』

「俺はルールを変えてない。お前等の言った通りにしたはずだ」

冷酷な声音のソニカ。

未だかつて、彼のこれほど冷たい声を聞いたことがない。

一瞬でも、レミカはソニカに恐怖したが、すぐに体勢を立て直し、

「これで勝ったとでも？ 実力差はこの間、見せてあげたはずだけど？」

不適に笑うレミカ。

「『逆十字の舞』！」

逆十字が、あらゆるところから飛んでくる。

「ひとつでも当たって御覧なさい。その時、貴方は生きていない！」

彼女にとって、これは布石。

真の狙いは、ソニカを『自らの手』で殺すこと。

逆十字が、ひとつでも当たれば死ぬ　　そう言ったことでソニカの注意を散漫にしようとしたのだった。

「まだ　　5分しか経ってねえんだな、看夏」

背後から刺し殺そうとしたレミカの手が止まる。

それは、声に反応したからだけじゃない。

全てが分かっているような冷静な声。

そして彼の空気の変化に反応した。

それは次第に優しく包み込む光となる。

「じゅ、十字架？」

ギゼル達はもちろん、花天使達も驚いた。

光は十字架の形になり、迷わずソニカの手の中に収められたのだ。

「人間ながら、ソニカが花天使と正式に認められた……？」

セラフィンが止血の手を休めながら言った。

「看夏？お前が本当の悪じゃなくて安心したよ」

ソニカは十字架を握りしめながら、真っ直ぐ見て安堵の様子を見せた。

「な！そんなこと……！」

「『アヤメのやすらぎ』」

ソニカは微笑みながら、レミカに十字架を突きつける。

レミカをアヤメが包み込む

レミカの脳裏にある言葉が蘇る。

【本当に怖いものは、生きるか死ぬかじゃない】

ああたしか、これは……

【『大好きな人に忘れられること』さ。レミカもそうなんだろう？

『ソニカ・アイリス』に忘れられたくない、最後に言いたい言葉があるからここにいらっしゃる？】

優しい声、澄んだ瞳。彼女は直に聞いた気がする。

『今、いわな……きゃ』

朦朧とする頭の中でレミカは『都看夏』として、ソニカに言った。

「あ……り、が……おにい………ちゃ………」

「殺しちゃって、ホント」

弱々しく笑い、小さく、本当に小さく頭をふるレミカ。

最期に見せた笑顔は、ソニカの知っている優しく、暖かい笑顔だった。

「レミ………みなつ………看夏　　みな、つ………」

レミカの全機能が完全に停止したらしい。

受け止めた彼女はとても冷たく、それでも死に顔は安らぎに満ちて

いた。

背中には『闇の剣』がすっぽりと刺さっているのに血は流れない。

彼女は既に、『死人』なのだから、当たり前といえば当たり前である。

「レミカ いや都看夏。汝の十字架、我、ソニカ・アイリスが引き受ける……クレスト」

静にソニカはクレストさせた。もう、二度と会うことが出来ない妹を。

自らの手で。

本当に逝かせたのだ。今度こそ。

「確かにレミカは……『都看夏』は、お前達を裏切ったかもしれない。俺を『自分の手』で殺そうとしたくらいだ。

『逆十字の舞』が、布石だなんてこと俺にはわかっていた。でも！」

一気にここまでまくしたてるソニカ・アイリス。

「ここまで、お前達はレミカを使って『こちらの情報』がわかってたはずだ！なのに、こんな切捨て方すんなって！」

マジ切れのソニカ・アイリス。

「『情報が分かった』?!」

「俺に、レミカは盗聴器をつけてたんだ。以前、戦った時」

イングルの問いに答えながら、ソニカはゆっくりと首の付け根辺りの皮膚を引き剥がし、てんとう虫くらいの円い盗聴器を投げつける。

「俺も、さっきから『花天使』だ。時間もあんまりねえ……お前等、同時にしかかってこいよ」

怒りが頂点に達したソニカ。

レミカを見ながら、ゆっくりと立ち上がる。

「さあ。後10分切ってる。レミカは……あんた達が殺したんだよ！」

ソニカの怒りが伝染したハンスが声を張り上げる。

「ルールをそっちが破ったんだ。こっちだって変える権利は、あるはずだ。違うか？」

ジルがゆっくりとギゼルを見る。

「いいだろう。『我を失いし者達』お前達のルール変更、受け入れよう」

「残り7分25秒……それでも戦う気なの？勝算はないというのに？」

ユザナがディックから離れ、闇の剣を取り出す。

「んなこと、勝手に決めないで！『ドライアイスの雪崩』！」

ティアラとイングルが同時に放つ。

「はっ！小賢しいわね」

ユザナは鼻で笑い、その場から離れようとした。

「逃がさない！『ツバキの戒め』！」

ユザナより早く動いたセラフィンが彼女の動きを封じる。

「こんなので私を殺せるとでも？」

ユザナは痛くも痒くもないようだ。

彼女にとって、これは全てが『ハンデ』なのだろう。

カキン！カキンカキン！！ガキンッ

「へえ……やるもんだねえソニカ、クリス」

「ぜってえ負けねえ！」

「看夏のこと、許さないからな！」

ギゼルは闇の剣で、ソニカとクリスは十字架で1：2で戦っていた。闇の剣を持っていたても、瞬時に前後左右に分かれるクリス達から、ダメージを受けないのは神業と言っていていいかもしれない。

「『太陽の光』！」

十字架を剣にして攻防を繰り返していたクリスが、左手から光を放つ。

「あつたれー！！」

クリスが叫ぶ。『太陽の光』は自在に操ることが難しい。

当たれば『灼熱地獄』を味わうことになるが、当たる確率は極めて低い。

だから、一種の賭けなのだ。

「勝機のない君達も、運にも見放されているようだ」

『太陽の光』はギゼルの後方へと向かっていった。

「さて、気はすんだかい？」

シュッ！

「ぐ……っ……」

クリスが左手で拾い始める。

十字架と自分の右腕を。落とされたとき、痛みは感じなかったろう。時間をおいて、闇の剣に塗られた『ガリナク』が染み渡ってきたのだ。

「クリ、ス大丈夫……か」

クリスが切り落とされたように、ソニカも致命傷を受けていた。

左の胸の部分が、ぱっくり口を開いている。

「それでまだ生きてるなんて。生命力だけはすごいんだねえ」

2人に笑いかけるギゼル。

「早く楽にしてあげるよ……ソニカ、レミカに会えるよ」

あくまでギゼルは笑顔を絶やさない。

「『風弾』……!!」

ハンスが闇の剣を弾き飛ばす。

「俺も、混ぜてよ」

「何人でも、大歓迎だね」

ギゼルの手には新たな闇の剣がおさめられていた。

「みえ……た？」

「全く」

セラフィンとティアラは動揺した。

目の前で、クリスとソニカが傷つけられている。

「クリスっ！ソニカ！」

セラフィンは駆け出すが

「やめなよ。ユザナの思う壺になる」

ティアラが裾を引っ張り、セラフィンを止める。

「　　何がわかるの?!裏切り者が!」

止められたセラフィンは、奥底に閉まっていた言葉を口にする。

「そか。そういや、あたし裏切り者だったね」

苦笑して手を離すティアラ。

「でも、あたしも心配なんだよ？それでも、ね」

そう言ってティアラはユザナの元へと飛んでいく。

「『十字架背負う花天使』を裏切った感想を聞いてなかったわ」

ユザナがツバキに縛られたまま言った。

「めんどい」

即答するティアラ。

ズバツズバツズバツ

「な?!何やって……」

セラフィンの目が見開かれる。

「見ての通り、『ツバキの戒め』を解いてもらったの。ティアアラに、
ね」

ユザナは完全に開放されていた。

「だって、あたしは裏切り者でしょう?」

淡々としたティアアラの説明に固まってしまふセラフィン。

そんな彼女を呼ぶ声がする。

「『絆』なんて……この世に必要ないの」

ザンツ!!

闇の剣が振り下ろされる。

セラフィンの右の太股を闇の剣が貫通した。

「 !? 」

動きたくても、動けない。

『 静槍流も……出せない……っ! 』

セラフィンは、ユザナを睨みつける。

「 絶対に許さない!! 」

歯ぎしりするセラフィン。

「 !? セラ!! 」

兄、ハンスの声が聞こえた。

「 『 一輪草 』! 」

左足だけでジャンプをし、ユザナの背後に直線を刻み込む。

「 威力がないわね。その足、どうしたの? 」

ユザナの声じゃない。

「 ティア……ラ? 貴女、本当に 」

冷たい声はティアラ・ジプソフィラの声だった。

「 聞かなくても、貴女はさっき言ったじゃない! 『 青い雷 』! 」

ティアアラがセラフィンに……いや、この場にいる花天使達全員に攻撃をする。

いつもより、特大の青い雷。

「残り、1分切ってるって気づいてた？」

ティアアラの蒼い目が深みを増す。

手にしていた十字架が『青剣』となる。

「もう、止められない。あたしのことは」

呟くティアアラ。

「いやああああ！」

「やめろ！！ティアアラ！！」

顔面蒼白な花天使達になす術はない。

「『炎の砦』……！！」

セラフィン達の悲鳴に、最後の声はかき消された。

NO・21

兄妹の想いは（後書き）

もう、なんでもありなお話になってます。

ティアラ裏切り編は、もう少し長く書くべきだったな。

次回は最終回となります。

どんな展開になるかは楽しみです。

では、次回もお会いできることを祈りながら……

R
u
e

NO・22 無題(前書き)

死しても、やはり聞きたいことは聞きたいから……

後悔をしたくないから

私はここに……

NO・22 無題

登場人物紹介

ティアラ・ジプソフィラ：旧・蒼霞純歌

イングル・ジプソフィラ：旧・晴夜

クリス・サンフラワー：旧・向日佳

レミ・サンフラワー：旧・奈津

ジル・パーシカリア：旧・大出秀人

クルル・パーシカリア

ハンス・A・ポインセチア：旧・相場巫斗

リリー・A・ポインセチア：旧・芙雪

セラフィン・カメラリア：旧・茶山透香

ケイン・カメラリア

ソニカ・アイリス：旧・都遊

ディック・クローバー

レミカ・D・バイオレット：旧・都看夏

ユザナ・H・ハーブ：本名・シーナ・クローバー

ギゼル・ツンベルギア

誰も、何も言わない。何もいえない。

嫌な空気の中で期待してる目の者と動けない者の2グループに分

かれている。

闇の城の主達は、目の前で花天使達が死ぬことを期待していた。

花天使達は死を覚悟した。

青い雷に身体を引きちぎられ、焦げることが脳裏をよぎる。

ティアラの青い雷で死ぬだろうと誰もが思っていた。

目を開ければ、自分は存在できていないだろう、と。

「……生きてるの？」

痛みも何も感じない。

思い切って、セラフィンは瞼を開ける。

「よく分かんないけど、そうみたいだな」

ハンスがゆっくりと起き上がる。

彼女達は『炎』に守られていた。

美しい紅い炎。

強い意志を感じさせ、それでいて優しい炎。

「『紅炎』（こうえん）の炎……ってまさか！」

クリスが痛みも忘れて、声を出す。

「よっ！クリス。大丈夫か？」

紅炎を発した張本人がクリスの方を見て笑いかける。

花天使達の目に映ったのは紛れもなく、ディック・クローバーだった。

「ど、どうなって」

幻を見ている、と思いたいユザナ。

「これは幻じゃない」

声と同時に『青剣』（せいけん）がユザナの喉に当てられる。

花天使達に背を向けた常態のティアラの青剣が。

「おい、ティアラ何のつもりだ？お前は『俺達の』仲間だろうが」

ギゼルがティアラの前に現れる。

そんな彼をティアラは鼻で笑った。

「うつわー。そおんなに、あたしの演技上手かった？」

おどけたような口調は、先ほどの冷淡な声のティアラではない。

花天使達が知っている『ティアラ・ジプソフィラ』だった。

「あなた達は『計画通り』にことを進めていた『つもり』になってただけ。『どんな姿』だろうと、あたしは、あたしだよ」

ギゼルを見るティアラの蒼い目は、いつそう濃くなっていた。

迷いのない澄んだ蒼い目に、ユザナもギゼルも冷や汗をかいてしま
う。

「さあ、ここからが本当の『戦い』だよ」

そう言うとティアラの中から2つの魂が飛び出してきた。

「
！な？！」

「ティアラ・ジプソフィラが『3人』」

ギゼルとユザナは驚きを隠せなかった。

「どんな姿だろうと、あたしは『十字架背負う花天使』なんだから

「！」

「~~~~~！！！！いつでえ」

「セ、セラ、い、だい！！！」

クリスとソニカが涙声で訴える。

「ん？何かいったあ？」

につこりとセラフィンが2人に微笑む。

「おい、治療は……って凍り付いてら。どうしたんだ？ソニカとクリスは」

ディックが首を傾げながら問う。

「アイ・ドント・ノ」

セラフィンは棒読みで答えると、上空を見た。

「それにしても、ユザナ達を完全に騙すなんて」

「てか、『俺達も』騙されてたなんてなあ……『誰かを』除いて」

セラフィンに続いて、ハンスが嫌味をたっぷりと含んでジル・パー

シカリアに矛先を向ける。

「今は、そういうことを話するときじゃない。上空を見ての通り、ティアラは今、3人いる」

ジルが指で指しながら話す。

『青剣』をユザナの喉に当てたティアラ、ユザナとギゼルの目の前にひとりずつ。

合計、3人のティアラが浮いていた。

「俺が、どうして『演技』を続けてきたかつてのは、また今度な。

今は、ギゼルとシーナを『クレスト』するのが先だろ？」

ディックが一同を見回す。

「ちゃんと説明しろよ？」

ため息をつきながらクリスはディックに言う。

「あれ？凍り付いてなかったのか？クリス。セラ、今度はちゃんと凍りつける」

「そうだね。じゃないと五月蠅いからね」

2人はクリスを玩具と勘違いしているようだった。

「あーのーなー」

ひくつきながら、クリスは反論しようとするが

「はいはい。そんなだから『玩具』にされるんだよ、クリス」

傷口を叩いて、大人しくさせながらジルが割り込む。

「ディック、攻撃に転換しよう」

「OK、ジル。全員、回復したみたいだし、そろそろいかなきゃな。
『解除』」

炎の砦があつという間に姿を消した。

「さ、行こう『十字架背負う花天使として』。『エンパルト』！」

ジルがユザナに向かって十字架を投げる。

「え？」

痛みを感じない。

でも右の方が妙に軽い。それがユザナの感想だった。

「まずはクリスの仇をうつたぜ？」

にっと笑うジル。

その手には血が付いた紫色の十字架が握られていた。

ジルの十字架が、ユザナの右肩を切り落としたのだ。

「どどんいくぜ？シーナ」

ディックがユザナに断言した。

「　　ジル、あんた何した……」

苦痛な顔をするユザナ。額に汗をかき始めている。

「いやいや。たいしたことないぜ？ちよいと『コロナ』を塗っただけだ。死にはしない」

『コロナ』とは一定時間、しびれ、めまい等の症状をだす塗り薬。

これは使い次第で『時間』も『症状』も操ることができる。

ジルの得意分野は『念』。彼にとっては、たやすい事だった。

カキン、カキン！カキン！！

「2対1なんて……せこいと思わないかい？」

ギゼルが息を乱しながら問いかけてきた。

「てめえにいわれたくねえな」

「右に同じく」

クリスとセラフィンが口々にいう。

「『太陽の光』！」

クリスがまたしても賭けに出る。

「君達は『運』にも見放されてることを忘れたのかい？」

ギゼルが高笑いする。

「……やってみないとわからないんじゃない？」

セラフィンがギゼルの目の前に躍り出る。

「静槍流……『八の字切り』！」

軽く10cmといった深さだろう。

ギゼルの胴体に一瞬にして八の字の傷を刻み込む。

バシューウー――

ギゼルの身体から血があふれ出す。

「後できちんと洗わなきゃ」

素手で切ったセラフィンが手を見つめながらいう。

「『太陽の光』は布石だぜ？」

冷たい声でクリスがギゼルに言う。

「はあっはあっ……」

ユザナが左手で右肩を触る。

コロナの症状はまだぬけることはない。

動きたくても動けない。

だが、動けたところで彼女の危機は変わらないだろう。

ティアラの持つ『青剣』の餌食となるに決まっている。

「どうしたの？ユザナ。まさか、これしきでギブアップ？」

ティアラの冷たい声でユザナは冷や汗をかくのを感じた。

「……………ギブアップ？笑わせ、ないで」

強がりと言っていると分かっているながら口にしたユザナ。

「ジル、青剣で首とつていい？」

真顔で尋ねるティアラ。

「俺達は『十字架背負う花天使達』だ。それにユザナをクレストするの俺達じゃない」

言いながら、ジルは下を見た。

「それにしても……まだいたとはね。びっくりだ」

ジルの瞳にはディックと3人目のティアラが映っていた。

「ディック！ちゃんと守ってくれよう？」

大声でジルは呼びかける。

「すみません、ずっと存在してて」

3人目のティアラがディックに頭を下げる。

「今は、そんなことやってる時じゃないよ。俺だって人のこと、言えないし」

苦笑いしながらディックは頭を撫でてやる。

「お前は、『悪いこと』してないんだ。頭あげな」

「でも！」

目には涙が浮かんでいた。

表情も思いつめている。

どれだけ勝手だったか、ということをやんでいる表情。

「……持つてるんだろ？『魂』は」

ディックは優しく問い掛ける。

それに答えるように、小さく顔を縦に振る。

「だったら、問題ない。だいじょーぶ、だいじょーぶ」

笑って肩を叩くディック。

「ディック！ちゃんと守ってくれよー？」

上からのジルの声。

「だとさ。俺は『お前を』、お前は『魂』を守るという使命がある。わかるよな？」

彼女は、先ほどより少し大きく頷いた。

「忘れてないか？」

ギゼルが笑みを見せながら、クリスとセラフィンに尋ねる。

血はドクドクと流れ続けている。

「何をだ？お前、この期に及んで」

「『俺達が持っている魂』のことさ」

クリスの声を遮ってギゼルは笑いながら答える。

この声はユザナの方にいたティアラとジルにもよく聞こえた。

「俺達の手の中にある限り、『魂』は永遠に俺達が使える。お前達が奪わない限り、俺前達は誰一人として助けることが出来ない」

「それはどうかな」

勝ち誇った言葉をはいたギゼルを速攻否定するのはティアラ。

いや、ティアラの格好をしていたイングルだ。

長かった髪が急速に短くなっていく。

「イングル？なら、もうひとりは」

ユザナが驚いたように声をあげる。

「くっ……ははははは！さっさと姿を消して、何処に行っていたんだい？臆病風に吹かれたまま、帰ってこないかと思ったよ」

狂ったようにギゼルが笑う。

「俺が何処に行っていたかは、すぐわかるさ」

静かで力強い発言。蒼い目はティアラと同じく強い光を放っている。

「まあいいさ。お前達には殺すことができないんだ」

ギゼルは言っなり、空で逆十字を切る。

「『なのはな』の者よ、ここに現れよ！」

ギゼルの一言で、彼の後ろから『水城晶』が現れる。

そして

一瞬のうちに本物のティアラの元に現れ、

青剣を闇の剣で切り落とそうと振りかぶる。

ティアラの表情は変わらない。とても落ち着いている。

「ティアラっ！」

セラフィンが声をあげた、その時。

ガキン！！

ティアラの前に出現したハンスが水城の攻撃を受け止める。

何処から出てきたのかは分からないが。

「先輩の相手は俺です！『風の戒め』！」

風で水城の動きを止めるハンス。

「先輩！目を覚ましてください！」

必死に説得するハンス。

「無駄さ。彼女の『魂』は俺達が預かってるんだ。

君が何を言っても、彼女は俺達の『駒』にすぎない」

ギゼルは笑った。

「さあ、君の手でハンスを切りつけるんだ」

笑いながら指令を出すギゼル。

水城が闇の剣で切りかかる。真っ直ぐハンス目掛けて。

「……がはっ」

が、水城は素早く方向転換してギゼルの腹部に剣を貫通させる。

「な、何が……？」

予想外の水城の攻撃をもろに食らったギゼル。

額には汗をかき始めていた。

「言っただろ？俺が何処にいたかは、すぐわかるって」

イングルが淡々と声をかける。

「『魂』は、とうに私が持っているんです。ギゼル・ツンベルギア」

聞き覚えのある声だが、頭が朦朧として思い出せない。

「……まさか本物の『蒼霞純歌』（あおがすみ　じゅんか）?!」

ユザナが目を見開いて驚愕する。

「その節は、どうも。私達を殺した『剥奪されし者』の方々」

純歌の目は笑っていない。

あ　お　が　す　み　　じ　ゅ　ん　か

この名前が頭の中で駆け巡る。ユザナとギゼルの頭の中で。

「きつきさま!どうやって　　」

「『紅炎』!!」

ギゼルが純歌に向かって闇の剣を投げようとした時、素早くディックが炎をギゼルの身体にまとわせる。

炎はじわじわと濃くなっていく。

「っ！ディック！！」

忌々しいように睨み付けるギゼル。

その瞳は底なし沼を連想させる色をしていた。

「きさまが！きさまのせいで……………！！！」

「俺が飛び出さなきゃ、こんなことにはなってなかったらうな」
睨むギゼル、静かに肯定するディック。

「まさに、花言葉通りの目の色ですね。ギゼル・ツンベルギア」

冷淡な声で割り込む蒼霞純歌。

「何がしたい」

苛立ちながらギゼルが問う。

「『ツンベルギア』の花言葉は『黒い瞳』です。今の貴方の目の色は、それを超えた色かもしれません」

抑揚のない声で話す純歌。

「ハンスさま、水城晶さんから『闇の剣』を取ってください」
目を伏せながら、指示を出す純歌。

「了解」

ハンスは静かに水城から剣を抜き取ると、すぐに純歌が胸に手を置く。

「なにやってんだ？」

クリスが問うと

「『なのはな』を入れるんです。これで水城さんは大丈夫……」

純歌が手を離すと水城は目を閉じ、そのまま落下する。

「かつ『風の鎖』！……一言、言ってからやってくれ」

脱力しながらハンスが言った。

水城の喉元に、もう逆十字架は見られない。

「どうして場所がわかった？魂の置き場は俺達意外

」

炎に包まれ、全身火傷になっているにも関わらず、ギゼルは問い続ける。

「普通だったら、とつくに『あの世』だぜ？」

「しぶといたのが取り柄何じゃなあい？」

ハンスとセラフィンは呆れたようにギゼルを見る。

「この方も私も、『人間』ですから。共鳴してたんですよ。ここに来てから、ずっと。だから簡単に見つけることができました」

純歌は真っ直ぐにギゼルをみて話す。

その目の強さに、負けてしまいそんな錯覚に陥るギゼルとユザナ。

「生意気……！」

ユザナは逆十字を切ろうとするが

「マジで首、とるよ？『シーナ』」

ティアラの青剣が首に食い込む。一筋の血が、ゆっくりと落ちる。

「……！」

「貴方方の『魂』と私達、人間の『魂』は違うんですよ。『人間』は『人間の』、『花天使』は『花天使』だけの魂なんです」

目の前の少女は自分達の勢力が頂点に達している時に『殺した』少女。

今までと同じように、自分達は『忘れる』だろうと確信していた。

覚えていても『意味のないこと』だから。

自分達の『玩具』にすぎないから。

『ゲーム』で死んだ人間のこと何て、気にしていても仕方ないことだから。

そつ、『死んだ』……『殺した』はずだった。

なのに、彼等の目の前で蒼霞純歌は話し続けている。

責めるわけでもなく、取り乱すわけでもなく淡々と。

「これ以上は無理だ。クレストしてやるよ」

ディックが純歌の前に出て紅い十字架を掲げる。

「あのね、ディック」

「俺達もいるんだぜ？」

「私達、クレストしたら、ディックの番だからね？」

「聞きたいことは、山ほどあるぜ？」

ティアラ、クリス、セラフィン、ハンスが口々に言う。

「……………マジ？」

後ずさりするディックの肩をポンと叩くジル。

「ま、当たり前だよな」

にっとなつて自分も十字架を掲げる。

そして全員の気持ちがひとつになったとき

「待ってください」

蒼霞純歌の静止画かかる。

「ひとつだけ、この人達に聞きたいことがあるんです」

目を伏せ、拳を握りながら、蒼霞純歌はギゼル達に質問をぶつける。

「あなた達は『どう思ってるんですか』？『3年前』のあの事件のことを。全ての始まりと言っていていいほどのあの事件を。」

犠牲になつた人々のことを」

声は震え、顔色が悪くなつていく蒼霞純歌。

それでも、聞いておきたい一心で言葉を出す蒼霞純歌。

答えは2人同時に帰ってきた。

「「どうも思っていない」」

はつきりとそう返す2人。

「……わかりました」

そう言う純歌は、みるみるうちに姿が見えなくなっていく。

「……後は『十字架背負う花天使達』（あなた方）に……」

こうして蒼霞純歌は姿を消した。笑顔で、本当に『成仏』した。

「今、あんた等……何て言った？」

ティアラの十字架、彼女自身が青白く光りだす。

声には感情がこもっていない。

「『ゲーム』で死んだ奴等のことなんて『覚える必要』ないでしょ？」

何言ってるの？という口調で即答するユザナ。

「命はひとつだけなのに？」

「セラフィン。僕達は『楽しかった』。僕達が『楽しければ』それでいい」

この言葉を聞いてセラフィンとハンスも、

やはりティアラと同じように光りだしていく。

「少しでも悔いてる気持ちがあるって信じてた俺等が大馬鹿だったぜ」

はき捨てるようにクリスが言う。

「普通にクレストしようと思ってたんだけどね」

かぶりを振って、ジルが悲しそうに話す。

「まあ、すんなりいくとは思わなかったけどな」

ソニカが2人を冷めた目で見る。

「あいつは、蒼霞純歌は『俺達に』決断を任せた。

だから、あいつが満足するような決断を俺達はしなきゃならない」

ディックはユザナを見ながらかみ締めるように言う。

「それが、『俺』の『対の存在でも』な」

紅い瞳が濃くなっていく。

「いくぜ……『春』（しゅん）！！」

ティアラ、ディック、ソニカが叫ぶ。

「『夏』（か）！！」

クリスが十字架を振り上げながら声を出す。

「『秋』（しゅう）！！」

ジルが十字架を正眼に構える。

「『冬』（とう）！！」

ハンスとセラフィンが十字架を重ねる。

「『花吹雪』！」

全員が声を揃えて十字架から光を放つ。

光はギゼル達に近づくと花に変化していく。

彼女達の『誕生花』へと。

「花が……俺達にくっついていく?!」

「なんか上手くはなせ……ない」

カスミソウ、クローバー、アヤメ、ヒマワリ、タデ、ポインセチア

にツバキ。

十字架背負う花天使達の誕生花は、2人の生気を吸っていく。

「ギゼル・ツンベルギア並びに、シーナ・クローバー汝等の罪、我等『十字架背負う花天使達』が引き受けよう」

ディックが十字架を彼等に向ける。

「 ディック」

ユザナとして生きてきたシーナが『対の存在』のディックを呼ぶ。

「クレスト!!」

「ばいばい」

言葉はディックの耳に入ることはなかった。

闇の城に一条の光がさしこむ

彼等の目には涙がつたう……

十字架背負う花天使達
E
N
D

NO・22 無題（後書き）

十字架背負う花天使達・1が完結しました。
今までお付き合いくださり感謝しています。

初めて書いた小説をそっくり載せたので、「ここおかしくない？」
と思った箇所があると思います。

すみません、修行不足です。

この話は3部構成となっております。

つまり、これが本当の終わりではないということです。

第2部は完結して、いつでも投稿できる状態ですが、

第3部は執筆中です。

投稿はしますので、お暇な方は読んでくださると嬉しいです。
携帯からの読者が多いのには少しばかり驚いたRueです。

では、第2部でお会いできることを祈りつつ……

Rue

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4580a/>

十字架背負う花天使達・1

2010年10月12日03時41分発行